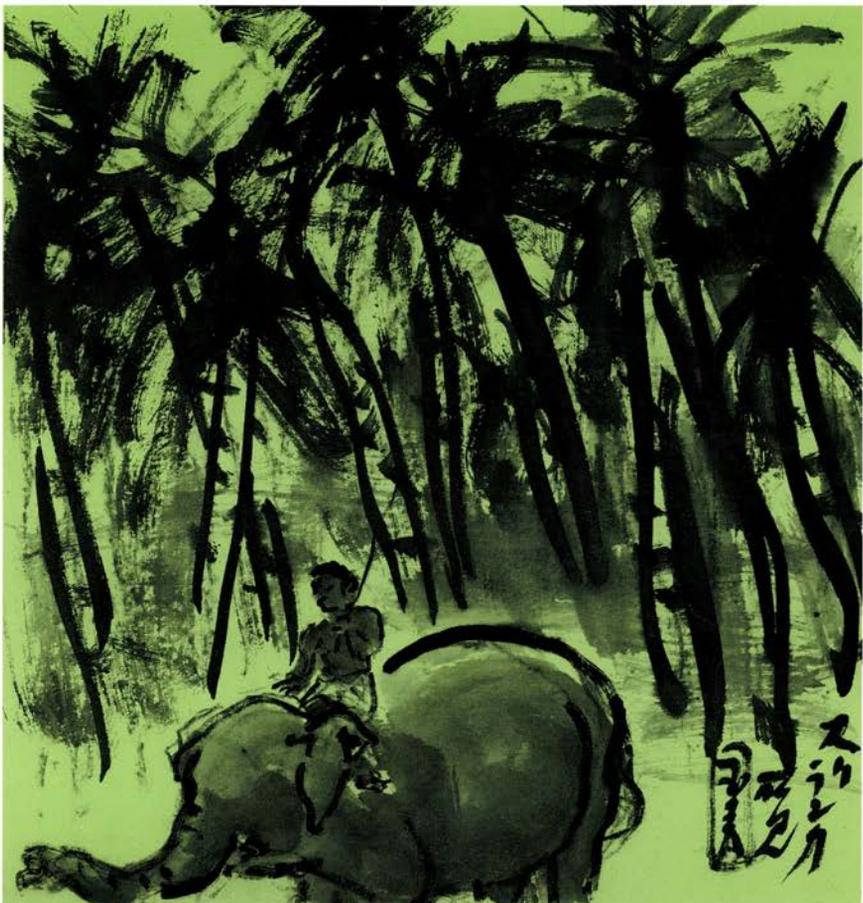


# 川柳塔

平成十年三月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷八五〇号



白川協加盟

No. 850

三月号

# 『川柳塔』850号記念大会

と き 平成10年3月6日(金) 午前10時開場  
ところ アウィーナ大阪(なにわ会館) 3階 葛城の間  
大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・772・1441  
(地下鉄谷町9丁目・近鉄上本町下車)

出句締切 正午(各題2句・欠席投句拝辞)

開 会 午後1時 披 講 午後2時

おはなし	川柳「塾」塾長	寺 尾 俊 平 氏
兼 題 「 門 」		木 本 朱 夏 選
「 賑 や か 」		野 口 節 子 選
「 腕 」		尼 れいじ 選
「 駅 」		両 川 洋 々 選
「 誘 う 」		田 辺 灸 六 選
「 会 議 」		波多野 五楽庵 選
「 さ く ら 」	ゲスト	時 実 新 子 選
「 丸 」	事前投句	橘 高 薫 風 選

閉 会 午後4時半予定

会 費 1500円

<懇親宴> 会費7000円(会席料理)

午後5時-7時半 アウィーナ大阪で開催

<宿 泊> アウィーナ大阪 8000円(朝食付)

<翌日観光> 文楽劇場・第6回民俗芸能公演

「ふるさとの人形芝居」(岐阜県恵那・新潟県佐渡)

3500円

◎事前投句及び懇親宴・宿泊・翌日観光の申込みは  
締切りましたが、大会には一人でも多くの方々の  
御出席をお待ち申し上げます。

# 感動をともに

## 橘 高 薫 風

二月七日の第十八回オリンピック冬季競技大会開会式では、伊藤みどり扮する能の衣裳をつけた卑弥呼が聖火台に点火した。南長野運動公園に一瞬の感動が走った。

また、小澤征爾が棒を振って、五大陸のメーソンの都市をつなぎ、ベートーベンの第九を演奏、歓喜の歌のグローバルな大合唱で世界へ感動のうねりを送った。

イベントの成功は、演技者と観客一人一人の情熱の盛り上がりによるものである。

三月六日の川柳塔八百五十号の大会は、すでに聖火台に点火、各部門の指揮を担当する役割りも決まっているが、一人でも多くの参加者が、熱い情熱で応えて下さることを心からお願ひする。

長野をアウイーナ大阪に移して、大勢の皆さんと大きい感動を交わしたい。私が主幹として開催する最初で最後の誌寿記念大会へのご支援を、重ねてお願い申し上げます。



病妻に花買う晩年の明かり

葉牡丹も自問自答の渦の中

豆の数昭和も遠くなりけり(節分)

ああ平和卑弥呼アテネの火をともし(オリンピック)



座右の句

水の精覚め森の精まだ眠し

(薫風)

私の句

大空に富士からも手が届かない

櫻庭順風

## 川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 感動をともし  
たおる

川柳塔 (同人吟)

自選集

大空のころろ (86)

川柳の群像 鈴木可香

古川柳歳時記 『出替』

水煙抄

秀句鑑賞 [同人吟  
水煙抄]

渺湖抄

茴香の花

橘高薫風 … (1)

安藤寿美子 … (2)

橘高薫風選 … (4)

橘高薫風 … (50)

東野大八 … (53)

清博美 … (54)

西田柳宏子選 … (56)

政岡日枝子 … (60)

野村京子 … (85)

八木千代選 … (86)

宮西弥生選 … (86)

た  
お  
る

安藤 寿美子



今一番心配なのはほけることである。川柳やってたら大丈夫なんてのは、あまりあてにはならない。今のことを忘れる、探している

のは何やったか、何しに二階へ上がって来たのか、それが解らないのは、今に始まったことではない。御飯をよそおうとお釜の蓋をとつたら水と米だった事は、過去四十年に何回もあった。それをつい先週末やつた。いよいよはじめてかきとギョツとした。

それはさておき、今のことは抜けてしまふのに大昔の記憶がふいに浮かび上がって来て驚く事が最近あった。デパートで日本手ぬぐいの展示即売があった。私は自分の名前にちなんで、洗い朱に百寿と百福を白抜きした一枚を買った。それを手にした途端、不意に脳みその底からつき上げるように思い出したことがある。それは私が四歳か五歳の頃だったと思うがだれかに連れられて、難波新地近くの空地に仮設舞台を組んで多分そのへんの芸者らしい人達が踊っていたのを見た時の事だ。私と連れの誰かはしばらく立止まって見

「シオン」	指宿千枝子選	(88)
一路集「約」	山海友照選	(88)
「和」	岩本笑子選	(89)
初歩教室「座」	吐田公一	(90)
おしどり同人の一筆(2)		(92)
林 荒介・中原諷 人・高杉鬼遊・村上剛	治・河内天笑	
エッセー 川柳の目	瑞枝 千歩	吉川 寿美
みさ子	ミツ子	月子
二月本社句会		(95)
各地柳壇(佳句地十選/福井桂香)		(96)
兄 森川拔智を偲ぶ	栗谷 春子	(100)
柳界展望		(113)
三月各地句会案内		(114)
■編集後記		(116)

座右の句

私の句  
次の世があつたら妻よまた逢おう

(耕花)

熟年の妙薬 歩くだけ歩く

福原悦子

ていた。歌の文句が否応なしに私の耳に届いた。なにがなんとかで『花を手折るはこころのままよ』ふーんなんてやろ、私は横の誰かに聞いた。『あの人ら日本手ぬぐい持って踊ってはるのになんで「たおる」ゆうてはるの?』その誰かはなんとも答えなかつた。た。ろ。う。学齡前の女の子にこの場合の「手折る」の意味を説明出来るはずはない。私は頭を小突かれたかなんかで、さつさと引つ張って行かれたことだろう。その歌のリフレインまではつきり思い出した。「ナンチナニワノイロノサト」売春防止法施行のはるかに以前の事である。その私の疑問は連れの誰かに黙殺されたらしい。恐らく道草がばれるとも思つたのか。そうでなければ家族中の笑いをとつて私の記憶にも残っていたはずである。幼い頃の私の言動にけつこう大人たちは関心を持っていたからだ。そして私自身もそんな事はけろりと忘れていたのである。

「花街の花を手折る」も「手活けの花」なんて言葉も今や死語であるが、広辞苑には「手活けの花」はちゃんと出ている。六十数年前のことを思いだしたからといって、ほけない保証にはならぬだろう。ガンならきつちり死ぬるが、ほけて死ぬのをわすれたら困る。数年前から私はガン検診を止めた。どうしても惚けるのならばなるべく可愛く品よく物静かにほけたきものだと思つのである。



橘 高 薫 風 選

弘前市 櫻庭順風

和歌山市 牛尾緑良

お山見て出勤お山みて帰宅

岩木山晴れる日きりりタイ締まる

岩木山曇る日重い靴を履く

充ちた日の帰路見るお山美しく

故郷に四季黙示するお山ある

目の限り岩木の彩が我が浄土

弘前市 高瀬霜石

龍老いて星と話をして暮らす

芽がでたらあととは見て見ぬふりをする

鱈にはイワシの理屈金がない

生きることに死ぬことに花に教わりぬ

恥ずかしながら遺産は臓器だけである

父さんが逝き母さんが逝き 平和

曼陀羅絵私の席がありますか

旅人とみてか優しい北の風

やがて娘につなぐであろう雑煮椀

奇を衒うものなし石臼の重さ

向日葵が咲いたあたりへ陽が沈む

母に書く手紙余白が増えてくる

神戸市 中村ゆきを

受験生丘の向こうにチューリップ

全快の菜の花道を帰り来る

男女女男サイクリングにすれちがう

食堂車とりわけ婦人楽しそう

子が生まれ春が息づく空の下

散骨もいいなあ空には飛行雲

島根県 堀江正朗

元旦の酒のうまさよ胸溢れ(八十七歳)

半世紀の闇に馴れると呆けそうな

聞き違い夫婦漫才かも知れぬ

文明の世を手さぐりで生きる策

失明に欲と言う字ももう忘れ

禅を組むときも地球は回ってる

堺市 桑原道夫

初芝居鷺より白き玉三郎

時の止まるは美しきかな氷り滝

風邪ひいてますます胡散臭い彼奴

かたつむり流し目をして転びけり

少し悲しく生まじめに食う竹輪

橋からの眺め納得して帰る

生駒市 麻生アート

税務署を出れば柳が青かった

代替休ウツカリしてた俺無職

正直に嘆く夜もあり劫とかや

ソロバンのあう人生を終りたし

軒貸して母屋盗られるAPPEC

支障なし蒟蒻という字忘れても

高槻市 川島 颯云児

最後までノーと言いつい通した自信

水たまり跳んでよろける瘦せ蛙

相手見て尾の振り方を考える

死にたくも生きたくもない余命表

濡れぎぬが晴れても白い眼が刺さる

檜山の道にも播こう花の種

鳥取県 新家完司

金平糖がバラバラと降るクリスマス

最後までゴソゴソ動く蟹の足

一家心中の記事きつちりと十二行

目にゴミが入ったまんまお元日

ビール 酒 ワインも飲んだお元日

赤い薔薇死にたくなつたときに買う

弘前市 浅田隆樹

かたわらの一升びんに銘がある

つけものが酔っぱいと言う冬の雨

倦怠期 毎日蟹を食べている

日本地図逆さにひろげ上京し

スーパーで毎日ゴミも買ってくる

騒乱が起きたのだからか首都の雪

大阪市 田中節子

シヤネル5のひそかに燃えて年流る

初夢は不老長寿の旅だった

夕映えに黒いオブジェの冬木立

竹林で風がさわさわ歩くよう  
風紋は風神の吐く吐息かも  
やさしさに泣けてくる嘘演じきる

米子市

田中亜弥

身の内の蜜に霧を吹いてやる

昔を入れた箱がなかなか捨てられぬ

わたくしを刻む大きな組板だ

シクラメンの機嫌とるのは難しい

ポストの中へ素直に落ちる手紙たち

子守り唄でまぶたを瞑るうちのポチ

富山市

舟渡杏花

長い返事が欲しくて長い手紙書く

牛は牛連れ 見事実証してみせる

帝王学のあい間あいまに読むマンガ

銭湯の鏡に恨みたんとあり

なで肩が切る責任のない風を

捨て印も押してあります離縁状

和歌山市

川上富湖

誰とでも合うよう骨は抜いてある

手拍子が揃うぐずぐずしておれぬ

信管を抜いて男を掌に

傷癒えぬ土足厳禁願います

転がらぬように踏んばる夫婦箸

鎮痛剤有める事に長けている

利口ではないので枠の外にいる

利口な足で疲れてくると動かない

程々の利口で友が多くある

桃太郎の本を利口そうに読む

人になる速さアイウエオが言える

お利口さんと母は毎日言っている

羽曳野市

榎本吐来

まだ他人らしいと測る二人の背

あれからの男振り聞く通夜の席

敷居跨ぐまではあれこれ老妻想う

まだ好きな女を探している六十路

肝腎のところを暈すのが政治

しがらみの夜明けと思う屠蘇の膳

茨木市

藤井正雄

いい夢の端っこ孫に起こされる

戦争を語り出す父止める祖父

奥さんが灯油補給にくる夜なべ

足跡のない雪道を里帰り

長電話冬を温め合う仲間

親子酒世代は問わぬ琥珀色

鳥取県

岩崎みさ江

ピリオドの子感 峠を越えるとき

反骨の夫をあやす酒を酌ぐ

混沌の壺から澄んだひとしづく  
パンのみに生きた日もある敗戦記  
エルニーニョ働き過ぎの蟻を見た  
ばたん雪ながい睫に来てとまり

出雲市 園山 多賀子

おめでとう今朝は息子も威儀正し  
下戸の贅虎の茶碗で初の釜  
花道に咲かせておこう返り花  
頑固さが倅せになり惚けさせぬ  
政治戯画声を上げては嗤えない  
掌の裏を返せば暗い過去がある

守口市 森川 まさお

八十歳余生は今のままでよい  
新年の机の上に何も無い  
空瓶の薄汚れして三日過ぎ  
むさくても酒さえあればおらが新春  
洗いの浸けたままなる大晦日  
年の夜に買うものないが商店街

奈良市 米田 恭昌

三浪の机励ます鏡餅  
年ごとに聖天さんのきつい坂  
ファミコンゲーム孫の司会で幕が開く  
何か良い事があったかいい返事

鬼は外 嫁のトーンに棘がある  
二度の職求めて父の若づくり

愚問かな伊丹十三なぜ自殺

別姓と離婚女性の解放か

激しさを丸さに変える歳悲し

信念と頑固の違い紙一重

波の花お湯に浸かれば日本海

祭り済む安堵と空虚長野県

米子市 澤田 千春

アンテナをのばして進むかたつむり

吹きだまり人の噂が渦を巻く

ポイントをおさえた母の嫉糸

変装し神も悪魔もノックする

神の掌に呼ばれて群をぬけひとり

封きれば友の笑顔がこぼれたす

大阪府 榎山 隆盛

老いてなお春の息吹をしかと受け

名物に家紋を入れる城下町

板べいの鳥居ちらつと犬も避け

地方版記事に小さく逝った人

職安の帰りに買ったジャンボくじ

お住まいはどちら阪急神戸線

砂川市 大橋政良

ジャンプする形で運を掴みたい

鏡から見知らぬ人が去ってゆく

シャボン玉のように野心がわいてくる

売り切れは目玉商品だけでした

離農あと夢のかげらが散っていた

青森県 西谷大吾

小吉を喜ぶ妻の初詣で

雪洞で寝酒を喰らう雪女郎

濁流に父は意固地に杭を打つ

一筋に生きる男の孤独感

落日の海にあしたの彩を溶く

青森県 諏訪柳々

足で学び背で教えて絆かな

元旦に雪降る里は澄めりけり

北風をまともに仏の顔は朽ち

仔犬からちぎれるほどの愛をうけ

行く人が行って淋しき空コップ

十和田市 阿部進

名案も予算がなくて宙に浮き

手さぐりの人生でした古希夫婦

見る人に安らぎくれる庭づくり

赤い花心の中へ咲かそうよ

嫁姑互いに痛みわかち合い

弘前市 岡本花匠

雪片付け瘦せたいひとの出番くる

春光の笑顔をくれた猫柳

梅便り北のまほろば雪の中

日々新たな木の芽が息吹く散歩道

金太豆蔵 笑劇熟し津軽弁

弘前市 蒔苗果林

雪こんこん霞こんこん友が来る

吹雪から民謡聴くようなほかむり

ほほかむりあねさんかむり雪夫婦

ひとりぼっちほほかむりして眠る冬

世界こんとん世紀の師走もう来てる

弘前市 一戸ツネ

戯れ言に胡椒きかせるのれん酒

自縄自縛身内をはしる関の声

無為無策背中であう鬼がいる

空の猪口吸っています虚しくて

散骨に儂い女うらみ節

弘前市 高橋岳水

サイホンのコーヒーたぎる吹雪の夜

春立てり海には海の風情あり

点滴の音なき音に抗えぬ

一粒の麦になり切るポランテア

氷柱から春の擬音が雫する

妥協案鉛筆書きの自己主張

弘前市 相馬銀波

続編の紙幅余命を問うている

続投の朝は靴紐締め直す

地団駄を踏めど休耕田加算

りんご豊作不景気リンク売れ残る

弘前市 中山雅城

一月の基石の音は睦ましい

一番は教育ママの好きな数

一言が長くつまらぬ披露宴

一匹の犬も家族に入れてある

一城に誇りをもった津軽弁

弘前市 佐治千加子

夫が逝き日が沈みまた日が昇る

振りむいて仮面をはずすおつきあい

雪の中角巻き姿あれは亡母

猫のひげ真冬日ぴんと光りあり

気休めの言葉ぼつりとみかんむく

弘前市 斉藤 焔

この黒い土に頂くいのちとや

観光立県これはいけます立佞武多

地吹雪の街で聖火を送るなり

感謝状手に嬉しくも寂しくも

花言葉この頃少し浮く妻よ

三月は愛しい亡妻の三回忌

月命日墓とお話して帰る

涙してこれが人間という姿

想い出は豊かな乳と元氣良さ

年賀状妻のこと書いたの師独り

黒石市 相馬一花

危険物扱いをする餅の味

生真面目な和尚はやはり子沢山

方言を忘れたふりをする少女

小刻みに足踏みをする黄信号

根回しをされて正論まで不発

町田市 竹内紫鏑

歯科で祝われ金婚の顔が出来

焼け跡を思い金婚ささやかに

金婚の写真ピントが合はずきた

スコアブック野球で始め棋譜に継ぐ

詰将棋作った人も黙考派

横浜市 菱田満秋

痒み止め塗ると周りが痒くなる

山頂を仰いで麓目もくれず

寒気団富士を我が家に見せてくれ

腕を組むのが憚られ手を繋ぎ

気魄だけではジャンケンも勝てません

横浜市 清水潮華

身勝手な話持ち出す大晦日

用心の雑煮でひとつ年をとり

寒の入り猫がベッドへ入り込む

処分した長靴悔やむ雪の朝

贈られたリング一箱もて余す

横浜市 菊地政勝

留守録の母を何度も聞いている

年が明け昨日のことを去年といひ

寅歳でまだ六十と言つてやる

定年後口争いは止めにする

やわらかいみかんを取つてくれる妻

横浜市 後藤早智

ひた走り釧路ナンバー息子の帰省

宅配になますを添えて節の膳

和に中華合わせ子と取る新春の膳

一期一会 人の出会いに生かされる

昏迷の真つ只中を初出社

静岡市 安本晃授

農に生き節働き地を嘗める

火の玉になつても火星にはなれず

喪の友へ言葉の重い朝の靴

歯車がさっぱり合わず身を責める

戦争に尽くした老いは今が花

富士宮市 渥美弧秀

ああ雪だふわり静かに白の界

晩年を肩組む友の遠くなり

鬱の日に口ずさむ「アカシヤの雨」

寡黙な暮し「笑点」を妻と視る

終章を飾るピアノと詩も錯びて

静岡県 蘭田 蓼 杏

賑やかに絆固める里帰り

初窯の皿を贈らん孫成人

爺婆も顔ゆるませて里帰り

里帰りの孫のしぐさに初笑い

眼を丸くして爺の民話に輪になる子

富山市 酒井 輝

友が欲し死後も頼れる友一人

仮の世と信じて嘘に耐えている

ハイテクの小部屋に神を忘れ棲む

今日を訊き明日へ囁く仏の灯

欠点を晒し秘策をさとらせぬ 富山市 島 ひかる

やわらかい日射しへ春の声で鳴き

水仙の香りを亡母と分かちあい

受話器から赤ちゃんことば飛び跳ねる

想い出に慰められて湧く勇氣

石段に百名山の夢があり

羽中市 三宅ろ亭

京都市 大河未佐子

謹呈の次に言葉がかけぬ歳  
カラスの会話にも低い声高い声  
政治とは相手の隙を衝く勝負  
かぶらずし名物にして老舗立て  
とりあげてよく褒めてわが路郎師を(美瓜露氏北国誌上)

大山市 早川盛夫

そんな目で私を見るな冷凍魚  
堂々とやるから悪事には見えぬ  
まずまずというから出来は良いのだろ  
大きい方をとる癖が直らない  
憎らしい人の下着を洗いだす

京都市 都倉求芽

初詣で晴着に出逢わぬまま帰る  
漁夫の利を得る者もない不況  
寄りし大樹にカネの実がならぬ  
お互いの足掻きが悲しビッグバン  
健康をたずねる賀状多くなり

京都市 山海友熙

淋しさよわたしは女雛春を待つ  
一人住むひな人形も淋しけれ  
甘酒を供えて亡夫と乾杯す  
哲学の道の樹々にも春近し  
春だ春青蓮院の門も春

おけら火を回し戻れば初春の鐘  
初春を花びら餅が連れてくる  
簪も福玉もゆれ先斗町  
指先のお伽噺か鉛細工  
こう成ろうああは成るまい老いの会

京都市 稲葉冬葉

大王松今年も活けて春を待つ  
振り袖に負けている百人一首  
銀行がどうあれ知ったことできなし  
美容師がアツプに鏡持つてくる  
張子の虎とひととき遊ぶ春炬燵

奈良市 宮口笛生

旧姓に還るふる里いいところ  
贅沢の限り正月有り難し  
麻酔から覚めて生きていたんだな  
何遍も死にぞこないの手術跡  
退院がこんなに嬉し有難し

奈良市 天正千梢

大きい秋つかまえました永源寺  
少年A母の秘密を垣間見た  
永田町小細工しすぎやおまへんか  
声をあげない子供の声をとりあげる  
縄のれん課長の首の軽いこと

生駒市 北山悟郎

初参りパワーしこたま授かりて

おめでとう腹の底からしほり出す

新雪が心真白にしてくれる

根性は汲めば汲むほど湧いてくる

自分に克つ力給えと祈ってる

大和郡山市 坊農柳弘

草餅は母手作りのひなまつり

お松明男ロマンの二月堂

沖繩へ春先取りのエメラルド

腹割って話せる友と縄のれん

蟹漁の終わりを告げるお水取り

大和郡山市 榊原慧心

コップ酒部下は上司を選べない

実力も運もないから子に期待

仲悪い兄弟なのに風邪うつる

うれしそう風をつかんだもみじの手

大声の人には秘密話さない

大和高田市 岸本豊平次

思出し笑いと向かい終電車

思ひ出に出てくる人の名が出ない

街角を曲ってまがって来た噂

屠蘇を酌む途切れた賀状気にしつづ

実は全部小鳥啄み庭に春

奈良県 長谷川春蘭

老夫婦添木のように生きる愛

毎日の何処か老けゆく若い二人

鈴なりの絵馬の中から運盗む

絵馬に見る母の祈りと子の願い

二月堂僧の足音春はそこ

和歌山市 堀端三男

カラオケが健康法と言う卒寿

応援する気だから嫌なことも言う

居座りは御免寒波と不景気と

甘辛しゃんで私の朝が動き出す

ブーム去ったので失楽園を読もうかな

和歌山市 木本朱夏

中宮寺出て現し世の返り花

古本の蠟紙冷ゆる菜の花忌

電子音ばかりが溜まる冬の部屋

愛憎の剝那紙ヒコキがひらり

屑籠に反古を残して去年今年

和歌山市 桜井千秀

ここで愚痴こぼせば負けと意識する

凧の糸切れて一気に風に乗る

通リゃんせ鬼が居眠りしてござる

馬券買う勇氣はないが競馬好き

懇親会人目盗んで消化剤

和歌山市 池 永 正 匍

さぞや苦勞したであろうな丸い石

完走へ明るい顔の最後尾

戦国と変らぬほどの敵がいる

何気ない小石一つが出す波紋

潮風が恋風になる島育ち

和歌山市 福 本 英 子

耳に穴あけて静かに地べタリアン

止まりたくない指おいでおいでする

気紛れにしては時間が合いすぎる

受話器から風邪を頂くお人好し

手を叩く役にカラオケ誘われる

和歌山市 堀 畑 靖 子

相棒とドライになってきた会話

キムタクの作った料理食べたいな

雨あがりのびやかな樹々鳥の声

風になれる心わたしにくれる森

人は水の子やがて私も帰る海

和歌山市 福 井 桂 香

天狼を泛かべ七草粥すすする

この着い地球はきつと音の星

沈黙は銀なら雄弁はダイヤ

日本の歌を迷わず選べない

愛に疲れカサブランカ・グッバイを唄う

和歌山市 細 川 稚 代

反骨もとほけまなこも我が同志

信頼感 株価だんだん冷えてくる

癒るともなおらないとも春の風邪

不揃いのミカンにぬくい里の味

新しいベッドでつつむ春の夢

和歌山市 田 中 み ね

火の無い場所に煙が立ってからの乱

福々しい顔でどえらい事なざる

「おしん」が何だ思った日々が今宝

夫が大事扶養家族であるかぎり

判るだろ無理に納得させられる

和歌山市 川 上 大 輪

句読点呼吸が乱れないように

折れるまで天狗の鼻を見ていよう

暦だけ替えて我が家のお正月

幸せを探しています迷い箸

ふる里と比べてしまふ旅の町

和歌山市 木 村 初 子

人間賛歌夢まぼろしと生きて喜寿(喜寿 3句)

まつすぐな道メルヘンの野に続く

老いの点晴薄い口紅そつと引く

紅がめつきり映えた秋の彩

コミカルな風に浮かれて赤とんぼ

和歌山市 山口 三千子

臘梅の淡き香りを風運ぶ

通院の日は真つ直ぐに帰らない

息子達来れば夫は客になる

頂点が崩れスタート切り直す(息子達涙米)

ピカチューを抱いて喜ぶ孫の顔

和歌山市 榎原 公子

老犬よおまえも食欲は立派

内需拡大胃腸が疲れすぎている

寝ることも食べるも仕事プロの道

離合集散 椅子を取るにもまわり道

どこそこの嫁さんが行く田舎道

和歌山市 宮口 克子

ええやんけ そんなお方もおりますわ

友達は赤児わたしは子猫抱き

あの時の空気をつめたままの箱

人生はシューシューゲーム 続きます

箱庭のように空中からの家

和歌山市 岩本 美智子

車のうねり海鳴りのこと暮れの街道みち

ニューイヤーズインターネットで知る日の出

パッハの日の出聴いて迎える雨の初春

お年玉夫にコンペイトーをあげ

秀吉の茶筌の音す金茶碗

海南市 三宅 保州

風呂敷に勝るものなし省資源

文部省推せんだから母と観る

年寄りが増える私もその一人

面白いことがないかと言う男

何もないなんでもないと泣いている

大阪市 西出 楓 楽

夫逝くどこかで癌の嘲う声

闘病は長く短い二年半

心経を少し覚えて忌明けする

大いなる遺産子がいる孫がいる

向き合えば遺影表情和らげる

大阪市 河井 庸 佑

諺の表と裏に思索する

故里の水温む頃懐かしむ

目が覚めてさて何するか日曜日

孫だから憎まれ口も許される

目に見えぬ努力知ってる人がいる

大阪市 神夏 磯 典 子

妻や子の命が点るルミナリエ

初めからきれいな丸は書けません

生返事だけど相槌打ってくれ

冬の雨夫婦で聞けばのどかなり

カタカナ語分ったふりをする演技

大阪市 本間 満津子

年賀状差し上げ戴き恙なし

茜色すこし残して八十路

巢立つ子の翼見守る祈りの目

風花へ病む友思ふ春近く

もういいかいそつと覗いたすぎなの子

大阪市 町田 達子

久し振り冬の火花に逢えました(神戸)

新年の墓参カラフルな花かかえ

樹上から烏の物色がおもしろい

厳冬のテントを思ふ寝ずの番(黒塚古墳)

人生の輝きうたっている歌手よ

大阪市 稲本 凡子

受験がせまり親子の会話遠ざかる

不景気に忘年会の派手なこと

盆暮れに行くふるさととは皆他人

風呂場から食卓へ来た体重計

頭だけ老化をふせぐ本を読む

大阪市 梶本 落児

美術展手で見える人もいるんだな

薬屋根の空気が甘い風景画

宛先のない手紙です今日も書く

絵の中に画家の背中がでんとある

信州へわざわざ蕎麦の花を見に

大阪市 板東 倫子

豊年の饗宴 大吟醸とこしひかり

年賀状美辞と麗句を取り交わし

旧き良き人でありたしそれでよし

捨てないで良かった亡母のじんべさん

こだわりと知りつつ老いの自己主張

大阪市 川端 一步

疲れたら貧しい言葉出てしまふ

酒一本なんでもOKしてしまふ

難民を救うあまりの無力なり

団欒の余韻が残る鍋洗う

盲導犬キミは恋愛しないのか

大阪市 辻川 慶子

袋帯目出度く姪の披露宴

ひきしまる心も新た雑煮箸

ことしまだ来ない年賀を待っている

やわらかに言えばやさしい顔がくる

満ちたりた日につけているイヤリング

大阪市 小糸 昭子

未来からそして過去から茜雲

茜雲ザックザックと軍歌征く

茜雲造花の色は負けている

餅花の色気が欲しい時がある

スピードの女王はダイヤばかり取る

女心ゆれておかずの味加減

大阪市 大塚節子

鯛の鯛出して見せてる猫またぎ

甘辛しゃん有馬で買うて帰る馬鹿

お雑煮も出た病院のお正月

乗り込めば派手なブザーのエレベーター

大阪市 井上白峰

清濁を呑んで流れに逆らわず

石橋を叩き続けていた不覚

一呼吸おけば誤解がとけてくる

様ざまなドラマ視ている花時計

雑踏の中で自分を見失う

大阪市 渡部さと美

春の陽へ背のびをしよう背が伸びる

生まれ来てつくづく思う神のわざ

下手にでるコツを覚えたいうちの鬼

また同じはなし相槌要るお酒

電話口クロンじやないか娘と孫と

大阪市 清水絹子

今日だけに降ればいいのよ雪のイブ

ワインより熱燗供えクリスマス

異国の子時差に合わせておめでとう

門松のとるやとらずに歯科眼科

自己嫌悪生きる術ありつるし柿

むなしくて風は時々向きを変え

引き出しに遠い余興のつけばくろ

幸運のホクロと母は暗示かけ

旭屋でほくろの本をチョット読み

光年をきらめく星は忘れさせ

大阪市 川久保睦子

亡母の辞書感謝の文字が詰ってる

陽のあたる所歩けと言うた亡母

青ビーマン恋の苦みと知りました

ほんわかと恋に溺れた黄ビーマン

別れたと赤ビーマンが啖呵きる

大阪市 奥田良子

老い一人負けてられない風邪に負け

結納の整う座敷父は亡く

父逝きて里の炬燵の広いこと

井の中の蛙まだまだ夢がある

奥さんの秘密飼ひ猫知っている

大阪市 川原章久

一日に一度は妻と意見に差

死際の彩は只今模索中

ためろうて白い色紙に書けぬ嘘

正月は遂に日の丸見ずじまい

二人三脚何度越えたか水溜り

大阪市 小林周信

灯台のスケッチも入れ年賀状

際どくてテレビが裁く大相撲

比翼連理妻にその気はないらしい

山小屋の風呂から仰ぐ星の数

画龍点睛ほくろも入れて自画像に

堺市 板尾岳人

出刃包丁研いでいるので抱きしめる

摩訶般若一萬本のバラを売る

鉛筆がこのごろ折れることがない

正直な奴っちゃと伊丹十三様

思いあまって母の乳房を噛みくだく

堺市 吉本菁風

将来の計より票に動かされ

生むうまん胎児は物と扱われ

いつまでも振袖姿の演歌歌手

何事もそつなく頼る気になれず

司馬さんのあと塩野七生に魅せられて

堺市 柿花紀美女

朝のホーム今日のいくさの中に入る

落葉掃き言いたい事のひとり言

枯菊を焚いて残り香ひとり住む

傷心の孫をいたわる言葉選る

ホームごたつで今日のけじめの一句書き

堺市 楊井二南

片意地に他人行儀を押し通す

高年期遠慮会釈もなく喋る

謙遜はするが自信は堅持する

節電の部屋で名案浮かばない

早春の気配短気な衣替え

堺市 近藤豊子

はなれ住む子とともにありお正月

寅どしの十二歳と初もうで

還暦のまだまだ迷子の気分です

参詣の足なみそろう杉木立

獲物得てあとはしずかな虎である

堺市 志田千代

老斑とホクロないませ六十歳

祭りの子ホクロもつけて出してやる

ホクロ一つつけたら鬱が逃げました

見返り美人あれはたしかに泣きボクロ

泣きボクロ男心がゆれます

堺市 山本半銭

自画像に白いえのぐは面映い

忙中閑ニニ・ロツソー染み渡る

おたやんの飴なつかしい宵えびす

日も風も梅に厳しい巡り合い

春うらら月は昇るのを忘れ

頑固さも威厳も消えた父の背な  
高石市 浅野 房子

ダイレクトメールばかり入っているポスト

脆いなあ骨も心も限界だ(腰背骨折)

やさしさを期待はしない他人さま

発つ友へもう帰る日を聞いている

豊中市 安藤 寿美子

鋭角に切って都会の夕茜

蟹気楼でもいいあの町が見たい

私にはやっぱり古い歌がいい

正月もどうやら過ぎてまたひとり

まがりなりにも日がすぎて小豆粥

豊中市 田中正坊

焼酎のお湯割りにする寒の入り

この一年どう過ごそうか梅開く

古代鏡が出土春を呼ぶニュース

合算し百四十歳となる夫婦

百歳の僧が三線さんせんかき鳴らす

豊中市 井上直次

足音をしのばせたけど妻の耳

昭和史に足音高いときがあり

起きぬけの具合で今日のプランたて

早起きにいつもと違う街の顔

コーナーでにらみをきかす実力者

平成十年の年の始めの顔でなし  
豊中市 吉田 あずき

育ちゆくものの力よ初日の出

何か来る身辺整理ビッグバン

初詣で神へ責任転嫁する

やすらぎの色で七草粥あつし

豊中市 湯浅 馬洗

復興の時を刻めよ大時計(子午線大時計動く)

喜寿の夢明石大橋マラソンで

老妻は猪鹿蝶の札に酔う

雪だるま贈るバックは夢融けず

上と下のぞき見上げるモノレール

豊中市 江口 明光

採算が合わず人間捨てられる

証券街マルサの鬼が移動する

愛してる大安売りの広告欄

ときどきは泣き顔見せに来いと言う

眠りまだ浅い古墳を暴かれる

豊中市 板山 まみ子

歌好きの喜寿を祝ってシューベルト

達筆が弱音を吐いた文くれる

贈ったり贈られたりでつなぐ縁

先ぼそる太平楽の二十年

苗植えて光の春を待つ小寒

箕面市 岩 津 ようじ

心経をゆつくりあげる喜寿の初春

温暖化万物の長 天に唾

夜叉となり菩薩となるも樹の運命

別離とも俱会一処とも思う旅

サッカーに少うし嫉妬ラガーメン

箕面市 椎 江 清 芳

失敗を明日に残さぬ手を洗う

もう後へ引けぬ纜解いてある

苦勞した頃がよかつた夫婦仲

金もない兄貴がいつも利口ぶる

一二回見合いはすべてリハーサル

池田市 金 崎 峰 子

今年こそ今年こそはと年重ね

願いこめうつ柏手のひびくこと

噛み合わぬお喋り空しさだけ残り

杯がとなりまできて落ちつかず

朝早くジョギングしてた頃の靴

池田市 栗 田 久 子

生きている証 賀状が持つてくる

倒の字は倒し奮起の年にする

初夢の続きあしたに残し置く

雪吊りはつばめた蛇の目月明かり

いにしえの鏡に映る死生観

吹田市 山 本 希久子

トンネルの先にぼんやり新世紀

本音聞かそう冬の窓開け放つ

茜雲遠く近くの死の影よ

いい顔で心経をよむ母孕寿

ゴキブリ一匹かく生きかく死せり

吹田市 栗 谷 春 子

日の光もう春の色すがりつき

ろう梅は葉も花びらもレモン色

告別に思わずふれた兄の頬

亡き兄の笑うた顔にはげまされ

正月も終り障子のうららかさ

吹田市 茂 見 よ志子

感慨もない初春に陽の豊か

転移なし病院帰り空の青

片隅という安らぎが好き茶房

貸し渋る利は出し渋る得手勝手

平凡はうれし揃って朝のトースト

吹田市 古 川 喜美子

雪の夜を眠れば繭に包まれる

嫁がせて番茶しみじみ美味しい夜

指切りを横目で見てくるくすり指

マスクして考えたこと話せない

狂うかも知れぬイルカのショーみてる

吹田市 石原靖巳

初笑い枝雀の芸に酔うて来る

あの世から来た親友の年賀状

松取れてイエローカード出る目方

お祭りだ暫し長野に目を向ける

群雄割拠雲行き計る雨宿り

茨木市 井上森生

この広い宇宙に一つわが生命

句でつなぐところで創る新世紀

繁栄の夢に隠れた落とし穴

通貨危機アジアのところに帰れよと

ありがとう今日一日のしめくくり

茨木市 堀良江

初光もう一足の新世紀

枝高くおみくじ結ぶ初詣で

東京は雪国という寒に入り

通り過ぎる子にも地ぞうの瞳が温い

結晶キラリ三十年の梅の壺

茨木市 島元ふみ

家族と居てもものけ者ですと老いばつり

嫁の電話あるだけましの聖子姥

ばあちゃんのはめ言葉ならお世辞ぬき

哀れでもまだ捨てられぬ老い化粧

川柳誌遠い友へのメッセージ

高槻市 芦田静江

宝恵かごホイ大阪人の盛る景気

梅花祭足手まといに京暮れる

見返りぼとけ肩のあたりに京の福(水観堂)

も一人の私見付けて赤を着る

柿右衛門正月飾る小さい皿

高槻市 井上照子

梅鉢の香今日も花屋で足とめる

虎の年今まで吼えずよく堪えた

娘の年を聞くと吾が老い気にかかり

月冴えて尺八の父影みえる

勝つ為に○・一秒重かりし(箱根駅伝)

高槻市 傍島克治

半信半疑だがうまそうな話です

そのうちに誰かがすると知らぬふり

お隣の庭借景に写真撮る

かいつまむ話が長い話下手

勤行の唱和春告ぐ二月堂

守口市 結城君子

はんなりとワルツを踊るシクラメン

悪だくみしている海の鉛いろ

痛ましいほどに隙なき冬薔薇

菟集癖に手を焼いている妻の顔

外出をあきらめている冬牡丹

ひとり言大阪弁の生なまし

寝屋川市

柴田 英壬子

ひとり言むかいの犬が返事する

顎上げてらくだ怒っているのです

菜の花もやはり野に置き野の黄色

うるめ干し近衛士官の如く在り

寝屋川市

江口 度

トラ年もクイズオタクでいくとする

新春は妻の着せかえ人形に

日溜りへ花もメダカも出してやる

一ミリも離れたくない好きな女

そこから中箱を落としていく晴着

寝屋川市

堀江 光子

淑やかに目を見張らせる飲みっぷり

入院に寡黙な父の慈愛知る

春を待ち逢う友のある幸せよ

その音を聞いた気ので落ち椿

幕引きの合図あるやら無いのやら

寝屋川市

岸野 あやめ

読み初めに手相の本を見ています

泰山の如しと云うて何もせず

臨終にお礼も言えぬパイプ攻め

わが影を踏んでお通夜に行く寒さ

この国に公約守る総理出ず

鯉節削る勢い日が昇る

寝屋川市

坂上 高栄

腹決めた気迫は有無を言わさない

UFOの客が来るかも宇宙船

観覧車ゆつくり回る小宇宙

陰膳の茶碗に向かい合う夕餉

寝屋川市

太田 とし子

何らかに挑戦せんと負けそうな

生きる構え十指動かす二三分

野良猫を追うた手が抱くうちの猫

店頭の花に汚職の影がない

齢なんて構うもんかい縁日だ

寝屋川市

北岡 波留吉

別れた母の祝電届く誕生日

孫誕生治った夫の臍曲がり

帯供え孫誕生の礼まいり

ワンカップ一味違う誕生日

誕生日に砲火交えた暗い青春

寝屋川市

森 茜

回数券落ちこんでいる暇がない

蟹がでて宴会の間がしんとなる

ドミノ倒しの放置自転車吹きさらし

口紅を下さるまさか面映い

叱る娘のあれは紛れもないわたし

寝屋川市 籠島恵子

元旦の高速道路スーイスイ  
十五夜を見直して寝る午前二時  
北風小僧が元氣なくしたエルニーニョ  
桜咲くころにと思ふ露天風呂  
ちよつと北海道と玄関でいう紙袋

寝屋川市 酒井勇太朗

何もかも満ち足りていて空虚感  
座右の銘「贈る言葉」から選ぶ  
じーじーと呼ばれ愕然 俺のこと  
今年こそリタイアしたい遊びたい  
お年玉古希を過ぎてても渡す側

枚方市 海老池洋

よく耐えた葦一本の風百句  
命綱 妻が握つていてくれる  
東京着 朝風呂浴びた若かった  
食欲に生きかまきりの枯れた顔  
儂さは老斑どつと出たバナナ

枚方市 八田敏

虎老いて狐も孫もそっぽ向く  
賀状にも国を憂うる文字を見る  
若き日を重ねて孫と「天つ風」  
盆正月だけ若い声おらが街  
的はずれの返事も交え老いふたり

枚方市 前 たもつ

平成十年欲を捨てると書く抱負  
七草も庭に続いてわが住処  
生きてるか神が無言の電話くれ  
乱気流なくてわが家の炬燵かな  
格好よい爺を演じる軍資金

交野市 福崎しげお

ワープロを横目に筆で書く年賀  
新年会酒量落ちたのばかりなり  
隔世遺伝似ている孫が居て楽し  
正月に増えた体重もどらな  
鈍行の旅人生のファイナーレ

東大阪市 森下愛論

旅先の地酒喜ぶ喉仏  
ワイングラスどう握つても飲み干して  
盃のやりとり言葉のうらおもて  
路地裏の雑魚は雑魚なり住み慣れる  
町内も春の流れに副う話題

東大阪市 指宿千枝子

冬の旅はよし鈍行に温まる  
蜂一匹朝の電車のミステリー  
まぶしげに小父さん族が見る小ギヤル  
二月堂に立ち金色の陽に感謝  
せんべいを持つ子を鹿が囲み居り

松原市 小池 しげお

虎穴からベツト一匹連れて出る

寺にあるそれより古いふるい井戸

ちよつとした情けに脆い涙壺

仏さま今から橋を渡ります

どうしようもなかったのです爪を切る

松原市 玉置 重人

妻と子の笑顔が僕の身を削る

ふりむけば妻に言えない影ひとつ

人間のエゴ世渡りのむつかしさ

この街で飲むコーヒーの店がある

野党支離滅裂与党恵比須顔

藤井寺市 吉岡 美房

初詣で孫も大きくなりました

抱き寄せて胸の谷間でとける雪

老松の冬を奏でる風の音

飯の世の命と思う風に会う

日本人居ないとそっけないニュース

藤井寺市 高田 美代子

雑音へこちらも返す雑音で

節分の鬼を寒空へと放つ

テリトリー私がわたしであるために

靴ひもぎゅつと上り坂下り坂

マネキンのヌード「ドキッ」とさせてくれ

藤井寺市 中島 志洋

普段着の舞妓さらさら海苔茶漬

ほろ酔いの時は気前のよい男

千鳥足貸したお金は覚えてる

有るところへ金が集まる世の習い

有難いお経に欠伸噛み殺す

羽曳野市 吉川 寿美

火も水もくぐり手にしたものは何

釉薬をかけてわたしを光らせる

置き場所に困る他人の忘れ傘

もう何も恐いものなし冬木立

毒舌の横が案外温かい

羽曳野市 福田 満州

預け替えるほど虎の子持っていない

エヘン虫紅茶のうがいしたら逃げ

サングラスかけてる訳をまた聞かれ

サングラス岡田嘉子と段違い

目のせいにして不器用を棚に上げ

羽曳野市 酒井 一壺

風邪により二階と下で寝ています

その時の都合によって風邪を引き

お互いに風邪に用心年の暮れ

宇宙からカードが届くクリスマス

失業へ開き直ってクリスマス

八尾市 内海幸生  
真つ直ぐに画こうとするから歪むのさ

父の忌や花屋に世界の花ずらり  
古墳発掘何すんねんなど聞えそつ  
神具買ひ値切る人がありますか  
国家予算超す寄付で建つタイの寺

八尾市 宮西弥生

さざん花が真つ赤に咲いて母の冬

大切な手紙が届く茜雲

一善を果たした順から福笑い

華やいだ日の年輪だけが光り

六十歳 結婚 戸籍はバラの花 (親友結婚)

八尾市 高橋夕花

茜さす額田の君の恋や佳し

コケシの中の一人が熱い目をくれる

矢印に何が待っているのやら

プライドを捨てたアクビが滑稽だ

早春賦昔を今に口ずさむ

八尾市 高杉千歩

屈せずに生きよう春の辞書膝に

ばあちゃんの紙ヒコキが風に乗る

フロップー春のプランが呼び出され

忠魂碑若い命の名を惜しむ

出不精な鬼と朝からにらめっこ

八尾市 宮崎シマ子  
割りこまれた方が小さく座ってる  
誤診とは言わずお薬変えましよう  
家族会議母の持論でしめくくる  
引いた身へ尾鰭をつけている噂  
賞味期限妻の才覚が動く

八尾市 吉村一風  
定年で楽しさ知ったピクニック  
朝の水全身の血と会話する  
だんだんと望み小さくなる背なか  
言い訳のうまさ自分であきれはて  
法事の顔みて確かめるいい絆

八尾市 吉村一風

折々に歴史の風よ城下町

子の無事を祈るかたちに老母の椅子

ラジオからひるのいこいを聞くのどか

湯上がりの臍 亡母さんをふと想う

追い風を待つてチャンス翔ぶつもり

八尾市 大内朝子

元旦の雨は今年の力水

美術館と間違えましたか一心寺

仏教で禁じる酒を墓にかかけ

結婚が二つ年金早パンク

根切虫仁王になって踏みつぶす

八尾市 神原まさと

神原まさと

神原まさと

神原まさと

神原まさと

神原まさと

八尾市 生 嶋 ますみ

こんなにも若者多い初詣で  
三ヶ日終えてせつせと鍋磨く  
毛糸編む指は休めることしらず  
ひとり居に焼餅こげている匂い  
長らえていつかひとりになる二人

八尾市 篠原 いつふみ

丁寧な言葉嫁はん怒ってる  
飛び着いたところで切れた電話ベル  
煩惱に自分の歳を言い聞かす  
留守番に地酒一本無理をする  
あれそれで話通じる老いふたり

岸和田市 原 さよ子

じいちゃんの和服が重み出すお屠蘇  
初詣で鈴は春呼ぶ音でなる  
ルミナリエ打ち上げ花火のおまけつき  
女の旅食べて喋って忙しい  
お財布も私も疲れ旅終る

岸和田市 古 野 ひで

少しずつ臆病になる老いの坂  
わだかまり捨てて賀状書いてます  
老いひとり哀しいさのひとり言  
ふりむけばはがゆい許り我が人生  
老木も楽しく芽吹く春を待つ

岸和田市 岩 佐 ダン吉

銀行が弱者なのかとふと思う  
目が笑うやっぱり負けていたらしい  
補聴器のガードマン風の中に立つ  
飾らないひとことだったありがたい  
酔うたびにふる里僕に語りかけ

岸和田市 高須賀 金 太

今年も虎の尾を踏む年になりそうだ  
風邪引きが怖くて花園へ行かず  
一月に雨すこし降り過ぎではないか  
気まぐれな男が酒を注ぎこぼす  
まだ妻の誕生石を知りません

岸和田市 長谷川 呂 万

予想それ隣すいすいレジの列  
冷蔵庫底つく頃に妻帰国  
旅日記写真片手に書き上げる  
料金所ゲート選びの勘忒える  
予告して行ったが茶菓子ボンチ揚

岸和田市 田 中 文 時

旅人がマント放さぬ不況風  
方便のうそが余りに多過ぎる  
名刺には載せきれぬほど党を替え  
多数決より少数を採る政治  
六十を老婆と紙面極め付ける

岸和田市 井 齋 一 齋

蛍の光半分塾で唄いたい  
寒の入り無理するミニの脚線美  
携帯電話普及で消えた告知板  
遺産分け横から迫る嫁同士  
顔ぶれの緊急会議読めてます

貝塚市 池 田 寿美子

無為無策あしたに払う保険料  
一長一短いずこに住むも心得る  
仏様ハーブの香り如何でしょう  
かすみ草になってほのかな夢を見る  
たのしみはまだこれからの好奇心

富田林市 池 森 子

どん底を見た刃物の切っ先  
化けるのを待って一蓮托生に  
奔放な流れ許さぬ河の幅  
夢ひとつ追うて繕うことばかり  
三日ほど行方知れずの影法師

富田林市 片 岡 智恵子

死と向い合い地球儀がよくまわる  
過去すこし捨てて明日を考える  
小吉のみくじで迷いまた深む  
からくりを知らずに四季の花開く  
少女まだ風の優しさ気づかない

富田林市 松 本 今日子

美容院自分の為にいそいそと  
初詣で和服姿に会わぬまま  
七草もわからぬままに粥が炊け  
湯豆腐をつついて欲のない話  
無念無想で観覧車に身を任せ

河内長野市 植 村 喜代

明けまして三月八日二女華式  
一抜けて二がまた抜けた春淋し(長女二女結婚)  
そんなこともあろうかと買い置きし  
道草は小さい時にしておこう  
毎日が納得出来ず過ぎて行く

和泉市 西 岡 洛 醉

太陽の温もりがある春の季語  
二の足を踏む古里は遠い影  
理想論掲げて古希の坂登る  
エプロンに妻の戦は日々続く  
チクタクと振り子人生七十年

和泉市 岡 井 やすお

三が日休んでおれぬ百貨店  
政治家の語るに落ちた数合わせ  
喜寿傘寿ふたり揃って一セット  
二人三脚で到頭金婚日  
青山に雑草生やし長生きす

大阪府 八十田 洞庵

吊り橋を渡ったままで帰らない  
あれからの音沙汰風が持つてくる  
剥げ落ちた石仏にも史実あり  
時効でもおのが仮面ははがせない  
石積み悲し風吹くかざ車

神戸市 山口 美穂

寒牡丹の前で思わず背を伸ばす  
パンジーはうつむき加減で夢をみる  
バーゲンで少ししあわせ買うて来る  
震災をくぐった茶碗への思い  
一年の計今年も年金だけ頼り

尼崎市 春城 武庫坊

三回忌母との距離が遠くなる  
マスクして風邪いつまでも抱いている  
寒に入り枕並べて二人寝る  
二人いるから気楽に餅を焼いている  
冬嫌い風は嫌いと妻の帽子

尼崎市 春城 年代

霜のはなしをキラキラとする温暖化  
母の歳とうに越えても七草や  
小豆がゆ孫成人となるあした  
ピアノ 敲く男の指は銀鱗のごと  
大吉がうす気味わるい年始め

尼崎市 長浜 澄子

遠い所へひと声かけて箸を割る  
二度おいしい話そうあるものでない  
父方の血も充分に娘は自立  
ひとりでは寂し冬陽の回転木馬  
鳩尾にゆっくり滲みてくる第九

西宮市 門谷 たず子

命ふたつぬくめて渡る川の幅  
半券が手元に残る夢の跡  
父の里鏡出てからかしましい  
汲み置きの水に祈りの三とせ過ぎ  
こころ許せばポトリと落ちる寒椿

西宮市 林 はつ絵

白薔薇の孤独いさかいはかり聞く  
本能か媚態か猫のひげ動く  
加護があり老婆は雲の上あるく  
年の功接着剤を使い分け  
八十路来てこれポチだった人生か

西宮市 奥田 みつ子

年新た机に「無我」の絵を飾る  
年賀状吐き出しポストほつとする  
陽の恵み水の尊さ森は寂  
熱の子に何回も読むシンデレラ  
義兄葬送るパイプオルガンきれいすぎ

西宮市 山本義子

面つけるとその気になつて踊りだす

雑学をいっぱい仕入れ蓄える

吃水線ぎりぎりだけど空がある

反骨も少しもつて二番手で

氷河期の後輩に春あれかしと

西宮市 牧 渕 富喜子

九十四を筆頭一年始まりぬ

三ヶ日家もお餅も膨張す

宵戎雪雲真上通過中

松の内ずらし逆縁告げる友

政治家が小さく見えるスイッチポン

西宮市 秋 元 てる

裸木の美事さしばし霜の道

新しい靴が「信号無視はいや」

目交ぜだけで幸せでした村の駅

遠目には詩人に見えた黒ベレー

エレベーター互いに聞かぬ振りをする

西宮市 菊 池 トミエ

雪吊りの兼六園で会う詩人

詩人行く長い土堀に木守柿

じぐざぐの難所を越えて海に出る

外は雪おでんぐつぐつ輪になつて

あとわずかひと筋道を越えて行く

西宮市 亀 岡 哲 子

箸置きの鶴買い足してお元日

ころころと笑うお箸へお箸置き

元日もジーンズで良し一輪車

看板もないが馴染が寄つてくる

防災の日の巡り来て山青し

西宮市 刈 田 泰 司

凡人の書架にお灸の壺の本

点滴はうれし涙の素かもね

むかしなら女が泣いて幕となる

煙幕を張つてひとまず逃げしておく

顔さえも思い出せぬに出す賀状

宝塚市 吉 田 笑 女

丸く済む話へ角を立てたがり

街角でばつたり出あう話ずき

恵まれた日々へ感謝の手を合わせ

朝夕に忘れず仏に手を合わせ

我慢した涙あふれる夢の中

宝塚市 嵯 峨 根 保 子

ひとり初春たつぷりと観た鏡獅子

孝夫襲名先々代を知っている

キャンドルの向こうに不確かな未来

滅私奉公まごを二晩あずかった

わたしにはどこ吹く風よ株下落

伊丹市 山崎君子  
切り干しに里の匂いよ亡母もいる  
甘口も辛口もないひとり酒

樂しさを詩人のように旅日記  
福笹の大判小判紙の音

オサンドンまだ出来そうだ寒の菊

川西市 氏林洋敏

繩のれん大きな声で迎えられ

一日を大事にしてる仕舞い風呂

一病息災糖尿病は甘くない

仕事では遅くならない深夜バス

足袋はいて妻よそいきの顔をする

川西市 松本ただし

孤独死が此所にも居った冬の蠅

笑う目の奥にもうひとつ鋭い眼

好きだけと思えぬ冬のゴルフ場

病室の曇り窓から冬の雲

すぐ落ちる紙ヒコーキを折っている

加古川市 吐田公一

一徹な父を動かす母の鍵

三ページだけでこと足る日記帳

金塊にして床下に貯蓄する

戎さんに英語で願かけロスの孫

福笹をロスへ土産に持ち帰り

人間の顔で挨拶できた朝

道具箱使いもしない錆びた釘

湯豆腐の崩れをつつく老いの背

コップ酒底に映っているドラマ

本当に独りになったひとり言

相生市 中塚礎石

内科菌科へ外科も加えたカブで事故

夢はもう追えない老いの物忘れ

近づけば消える虹にて終る夢

可も不可もないままきょうも暮れてゆく

明け方がよく眠れると老い会話

岡山市 井上柳五郎

為になるお話どうも眠くなり

昔はねーではじまる言葉もうよそ

ノスタルジー父が母がの石の下

立ち止まった人よ時間よアリガトウ

もの知りの夫も現代語に弱い

岡山市 川端柳子

なるようになって今年が明けました

天気よし屠蘇よし笑顔さらによし

虎の子を抱いてひっそり喜寿の春

何事も笑って済ます喜寿の計

押して引く処世の技が身に付かぬ

倉敷市 田辺灸六

倉敷市 小野 克枝

大輪を咲かず犠牲の枝でよし  
肩書きを捨てると軽くなる空気  
薬包紙いくつ折っても翔べぬ鶴  
日めくりの一枚重き鬨病よ  
駅の灯よやがては母に辿りつく

倉敷市 井上 富子

松風の音もリツチな切り柄杓  
傘になる運命気丈な姉娘  
学校と違いうれしい塾カバン  
伴せ薄い少女が描くクレヨン画  
片道切符で行動開始する若さ

岡山県 二宗 吟平

源泉の岩で漉された味をもち  
手品師のようにカードで金を出し  
杯のたつた一杯字が生きる  
毎朝のリズム崩さぬ三千歩  
自転車ブレーキ犬が声残し

岡山県 富坂 志重

今日の坂登れば明日に手がとどく  
辞書開き愛を告げたい字を探す  
争わず蓄は開く時を待つ  
むつまじい灯を消したすきま風  
無意識の言葉が生んだ仲違い

岡山県 荻野 鮫虎狼

数珠玉の一つに隠す過去の罪  
借用証書く墨だけは持っている  
せかせかと先進国で日銭追う  
下り坂自分の影の後を追う  
御来光雲の割れるを信じきり

岡山県 小林 妻子

意思表示せずによかった事もある  
木の株稲株外に深入りなどしない  
蘭らんランと蘭の葉だけを見えています  
スピーチを指名されそうまだ呑めぬ  
線引きをするなら僕もボヘミアン

岡山県 山本 玉恵

大ボラを吹き合い屈託ない仲間  
子の舵へ家運あずけて高枕  
なるようになるさと思ふ賽を振る  
仏様と向き合うて居る長い冬  
好きだった人思い出す箸袋

岡山県 矢内 寿恵子

年賀状一人ひとりの面影に  
火の政治平成十年波高し  
混沌の世相火を産み風を産む  
崩え出する命よ天地おだやかに  
少子化の中で老齡化のひとり

岡山県 福原悦子

雪が降るこの世の罪を消すように

登山靴親に逆らう山がある

気取らない心美人で丸い鼻

丁寧な言葉の中に骨がある

許しつづけてやがて陽気な母でいる

岡山県 福原辰江

苦労など口にしませぬ座りだこ

母の忌へ余情つものつて雪が舞う

裸木がじつと脚光待っている

オーイ春リズムしっかり乗ってこい

細長く生きて脚光夢のゆめ

岡山県 江口有一朗

感動がシャッターチャンス句作にも

環境ホルモンまたまた怖い新語増え

貿易の黒字の付けを米が負い

農は国の大本忘れている政治

洪水に早魃厳寒エルニーニョ

広島市 森田文

初詣で夜明けのうたを口ずさむ

二十一世紀へ飛び立つ構え子の闘志

大海を知れと育てた子の渡米

平和祈願歌声にして響かせる

ライブルという語がいやなヤジロベエ

呉市 横田英詩

目覚めれば消えてる夢のストーリー

生きるって大変ですな仏さま

後編入り定年以後のわがドラマ

喝采は無用労り合う夫婦

陽が沈みすつかり老人めいてくる

廿日市市 林野甦光

新年の誤算初日に雨が降り

栄光と涙長野の空が燃え

年賀状今年は息子が俺を抜き

剣が峰男の渡る橋がある

政党も不倫付いたり離れたり

竹原市 小島蘭幸

てんとう虫が翼広げている宇宙

お年玉の前借りをしたヨーヨーか

コースの中に小さな帽子店がある

朝刊はいつも長女が先に読む

東京に雪降る妹を想う

竹原市 岩本笑子

もち二つ夫婦の昼が溶けている

三代の寅のたづなを握る妻

人を差す指です爪を丸く切り

流れ星小指が寒い女です

兵馬備未来信じている眼

竹原市 森井菁居

冬眠の振りをするのも辛いなり

日本のけじめ謝罪をすれば済み

砂船が消えメルヘンが戻る海

不景気に責任はない戎さま

コンピニのポルノに慣れてくる恐さ

竹原市 三宅不朽

滝を背に父はカメラを睨みつけ

つづくのが不思議つづいている夫婦

幾重にも女人たゆたう周防塔

ヌード集野菊のごときとはむかし

花の名を問われアチャラ語でしてな

竹原市 時広一路

愛いくつ重ねて出来たバラの芯

旅二人せかさされているせかしてる

そう腹を立てるな風よ花芽吹く

透明な硝子が好きで欲がない

春がもう近くて絵の具補充する

竹原市 石原淑子

元旦に白梅一輪咲き初める

不景気なニュースせつせと花の世話

凍てついた畑白菜花を抱く

初釜の心を洗う湯のたぎり

子ばなれの出来ぬ老母の重さかな

広島県 藤解静風

丑どしの男に辛い年が逝き

温暖化チンチン電車に揺られよう

殺し文句は片耳だけで聞いておく

黄ばんだ脳をときどき晒さねば

北浜の場立ちが消える寒い朝

美祿市 安平次 弘道

評論家はきらい結果で物を言い

札東に溺れたとこで夢がさめ

骨のない男が増える世紀末

処方箋医薬分業して儲け

ひっそりと咲いてもやはりバラはバラ

柳井市 弘津柳慶

座禅終えおかゆの湯気で生き返り

おじいちゃんまたテレビ見て泣いている

たばこ一本つけて課題へ挑戦し

空の事故ニュースへ旅の子を案じ

キヤーキヤーワー歌はどうでもいいファン

宇部市 平田実男

温暖化まだまだ他人事のように

年金があるから薄くならぬ影

駅伝のタスキが重い重い坂

願うより誓うへ味方したい神

そつと出る杭も見逃さない妬心

下関市 石川 侃流洞

政官財荒れびつくり箱がしまらない

気分爽快狐が虎の背から落ち

少し興奮して方言を丸出しに

路地裏へとつてもうまいタコ焼屋

寒桜へ花見の宴の前倒し

鳥取市 両川 洋々

金積むと聞こえる天の声でした

風向きを読むと中立しかないな

温暖化地球よ君は沈むのか

風を抱く火を抱くおんな乱を抱く

雪おんな命を削る風に逢い

鳥取市 西村 黙光

激痛へ日日葉のモルモット

肉体に悪魔打ち込む五寸釘

心身を八つ裂きにする夜の病魔

心の窓酒の布巾で拭き浄め

酒飲めるただそれだけでほっとする

鳥取市 武田 帆雀

代参講一番くじを引いて春

五人とも皆吞める口伊勢詣で

飾り絢う藁に置かれし町報紙

目の黒い間は無事な松飾り

松飾り一世風靡細ぼそる

鳥取市 春木 圭一郎

自分には出来ないことを訓示する

私の簿外債務も増えて春

泣き言を言わぬロボット気に入らぬ

七人の敵へ家族で立ち向かう

リサイクルされた自分を売りに出す

鳥取市 岩原 喬水

退院しやはり我が家の床が良い

安眠の麩を居間にひびかせる

禁酒禁煙病気がさせた大殊勲

養生の気配り妻に感謝する

乾盃にチョツと淋しい白ワイン

鳥取市 坂田 和歌子

鬼才だと言われたからが強くなり

竹藪を抜けると亡母の墓がある

水溜り墜ちた椿に薄水

虎の尾をやんわり踏んだ古女房

五色糸姑は召されて元旦に

鳥取市 倉益 一瑤

初日の出いい顔見せたまま沈み

散り様の見事さ姑の心意気

嫁姑そんな戦のない誇り

漬物石姑の残した重さかも

仏だんに幾万遍のありがとう

鳥取市 石上悦子

カニ用のスプーン試すカニを買う

先生の研修に組むバナナ売り

多忙ですゆうべの夢もサスペンス

隣席のいびき他人でございませす

整形のミスだと気づき出す地球

倉吉市 野口節子

人生さまざま吊り橋丸太橋

名人と言われ世事にはからつきし

追い風に乗リやあ峠の二つ三つ

万策が尽きて灯明あげている

無為徒食爪が勝手に伸びて行く

倉吉市 淡路ゆり子

除夜の鐘合掌の中聞き終る

故郷の老母から届く年賀状

一病を抱いて虎の尾踏むおもしろい

姑が逝く明日に生きる灯がゆらぐ

有頂天年甲斐もなく恥をかか

倉吉市 野中御前

病む人の心がわかる病んでから

ふとん干せ傘の用意とテレビから

コーヒーの香りが誘うはめになり

深過ぎる帽子にマスクあやしまれ

嬉しいと口から先にくずれだす

倉吉市 松本よしえ

やじろべえ揺れが容易に止まらない

しっかりと根を張り花の刻を待つ

いろいろに揺れては見たが元の鞘

嫁さんが流れを少しづつ変える

仙人のような眼をしてホームレス

倉吉市 山本玲子

悪友にしたりされたりできる仲

山椒は芽吹く鯛だんごもうまくなる

妙薬と聞けば八方走ります

ありがたい日陰のすみれ一つ咲く

忘れ癖なんて素敵な芸でしよう

米子市 林荒介

ハードルは自分で作る山である

パソコンの沼にはまってゆくノート

キーボード答えは用意されていた

下駄箱に帰らぬ人の靴がある

乗り換えた車に今を積み替えた

米子市 林瑞枝

流れ藻の根っこ脈打っている古典

未知数の花芽を恕す子の自立

百頭の馬いなないた葬の列

凜と咲く野花を鉢に閉じ込める

大津絵の鬼もくしゃみのキム子漬

米子市 青戸田鶴

おだやかな冬日にペダル踏んでいる  
脇道の楽しさペダル知っている

容赦なく老いをはこんでくる魔物  
わが影に叱られながら背をのばす  
孫たちもみなポケベルを持っている

米子市 木村富美子

食べぬかも知れぬリンゴの皮をむく  
なじむまでなぞり続ける仏の名

泣く時は独りの時と決めている

こんな時どうしたらいいお父さん  
逢いたい地球上にはない住所

米子市 野坂なみ

喜寿の初春 拝は自ずと深くなる  
お祭りに連綿として笛太鼓

やぶれ傘なおそれなりに影つくる

九条の破れ繕う余地がない  
肝を冷やす風が周りに吹いている

米子市 光井玲子

ナツメロを唄って夫と響き合う  
父の轍補いながら子は歩く

世紀末人のこころも褪せてきた  
通せんぼされてもフアイト失わぬ

木洩れ陽を味方ひっそりやぶ椿

米子市 中井ゆき

舞い上がって落ちないように尻尾だす  
冬銀河だれにも言えぬこと話す

進め進め絶対のらぬその手には  
花萼のごちそうになる花をつむ  
男女不明椿を忘れて街をゆく

米子市 鷲見正子

嫁さんに貰ってからの実はなあ  
卵買う列に夫も並ばせる

戦争を知らぬギターと会話する

両親が揃うあなたはまだ子供  
春や春 娘が嫁に行くと言う

米子市 永井三津子

もう一度変わってみたい愛されて  
それぞれの穴から覗く世紀末

また明日もあなたと生きる捻子を巻く  
しっかりと大地踏みしめ春を待つ

無記名でも母だとわかる字の温み

米子市 石垣花子

汁かけ飯もらう幸せ知らぬ大  
客をまた逃がすお世辞のすぎる店

朽ち果てるまでカマキリは身構える  
玄関のチェーンはずさず独り住む

人間のエゴたしなめる土石流

鳥取県 津村 八重子

若鳥のようにさえざる娘の帰省

雑学に老いもたのしい夢を抱く

病み上がり嫁の一言杖となる

孫の絵に一家団らんういている

老いの坂時にけわしい崖もあり

鳥取県 土橋 睦子

雪おんな恋の道草したら駄目

誕生日黙って花を活け替える

歎異抄読んで涙が止まらない

曖昧なことはを嫌う青い空

うろちよろとするから流れ弾丸にあう

鳥取県 土橋 螢

幸福の小さい方をふとところに

佳いことが積もりつもって雪こんこ

甘辛しゃんと寅の威を借りる

極楽の高い会員券を買う

深呼吸して美しい女と会う

鳥取県 土橋 はるお

父さんの日記も大分疲れたな

野良猫がにんまり口を拭いている

西方へ流れる水は静かなり

呑み助と言われないようナマンガブ

ぎしぎしと鳴る父さんの土性骨

鳥取県 林 露杖

仕来りも追々に減り去年今年

寒菊の未だ萎れず小正月

鮫鱈の顔を醜に切身買う

日々に無為せめて心に雪月花

捨てた夢捨て得ぬ夢と煩惱と

鳥取県 田村 きみ子

恋の秘話ところに抱くは卑怯かな

落椿なんてきれいなままだろう

七十路わたしの友はタマゴツチ

雪景色虎もこたつで仮眠取る

ラーメン好きで大きな音をさせる父

鳥取県 乾 隆風

喪服にもにんげん臭さ包み込む

伴奏に歌がちぐはぐして困る

相槌を打った分だけ負わされる

数珠という手錠わすれて晩酌か

お浄土の門はいつでも開けてある

鳥取県 埜 寛子

敵はもういないよラッパ吹きなはれ

本日も待合室の名医たち

凍てついた空は言い訳などさせぬ

CO2出してくれるなよスイッチオン

ゴミも党も分別ちゃんとしなくては

鳥取県 鈴木公弘

正座して初春の陽を待っている

金持ちも我が家も今日は元旦だ

神前にあなた任せの手を合わす

街道をサイコロ一つ抱いて行く

何はともあれ目が覚めておめでとう

鳥取県 谷口次男

家計にも一つはほしい徳儀

一俵を軽々担ぐ戦中派

青臭い話に妙に味がある

山道を歩いて行くは山頭火

願かけは一つがよかろう神様よ

鳥取県 西原艶子

新春の机に届く影いくつ

けんかした相手が不足だとわかり

掌を返されてから登り坂

ペアルック着たいあなたは他人です

雑文といわれる底に愛があり

鳥取県 上田俊路

はみ出してごらんよ空が澄んでいる

最後まで付いてきたのは犬だった

ぬるま湯で無策の首を浮かばせる

見栄捨ててからの余生の長いこと

ゴンドラの唄の気分で乾杯す

鳥取県 黒田くに子

こだわりも吸って風船ふくらまず

ぎこちない字だが情熱だけはある

ぎこちないわたしにあった花の過去

たそがれて人の好意が身にしてみる

髪洗い今日のドラマをしめくり

鳥取県 石尾かつ乃

春を待つところを白く白くして

掛軸の虎を脊にしてお屠蘇

人生の春おぼろげに古希迎え

一人来てまた一人来て春匂う

絵日記の祖母はいつでも春の顔

鳥取県 幸家單車

追加した言葉の裏に刺がある

特別に話はないが会いたくて

割れ鍋に閉じ蓋余熱残してる

ひたむきに拝むと神も見捨てまい

御無沙汰の挨拶愚痴も追加する

鳥取県 橋本多哥由

泥舟に札束ばかり乗せている

老いてなお樹の太さには兜ぬぐ

羨望の的になりたい古希の坂

末娘が眩しい客をつれて来る

やがて咲く蕾は不足なんかない

兄弟の個性出ている預金帳

松江市 舟木 与根一

暖冬でめりはりもなし穀倉地

仏壇へ先ず報告をする晴れ着

忠魂碑いうのが孫に分からない

前ふれかむかし話を繰り返す

松江市 安食 友子

追う夢は分相応をわきまえて

悠然とナンバーワンがするポーズ

キューピッド軌道はずれて泣いている

赤字でもブランド志向ひるまない

ルーージュ塗るホームの恋に罪がない

松江市 川本 畔

年の暮れ父の墓石を光らせる

大小の罪の足跡消す落葉

夢さめてまた夢ひとつみえてくる

涙拭いた紙 折鶴にして飛ばす

春を待つ庭でわたしも待っている

出雲市 吉岡 きみえ

ストレスのたまった服を吊っておく

家中の音を集める母の耳

じたばたは止めるわたしの正念場

自問自答三文価値のないわたし

夢買いに長蛇の列の中にいる

台所で私も妻に似た仕種

出雲市 竹治 ちかし

幸せは以下同文という暮らし

国のため尽した老いに寒い風

駄目なのは駄目だと言える父で居る

元旦も父には父の朝があり

出雲市 久谷 まこと

強がりを言ってもすでに底が見え

も一つの顔を知ってる水鏡

きれぎれの噂つないで春を待つ

手の平に書いては見るが判らぬ字

三重唱明日定年のタクト振る

出雲市 石倉 芙佐子

なごり雪音なく積る寒い朝

そろそろと新旧交替ひな人形

この橋を渡ると決めた木瓜の花

恙無く二人三脚ひきつがれ

かつきりと彼岸桜は咲き初める

出雲市 小白金 房子

駅伝の声援テレビで見ると平和

いい新春だ綴る日記の字があふれ

松過ぎて揃う現場も新春の音

老母の声あの娘この娘の名がもつれ

早朝の湯宿雀におこされる

借金の責は自分で負う庶民

島根県

森 茂美

その人に伝え安心して忘れ

喜寿と古稀二つ並んだ夫婦みち

酒よりも水が旨いと僕の世辞

雪が降る明日が見えないように降る

島根県

松 本文子

蔵のある家から娘出て行った

心にもパンソーコーを貼っておく

鍋を磨いて嫁さんに嫌われる

山の鴉よ母を探しに行きましよう

ネックレスの一つは本物の真珠

島根県

伊 藤 寿 美

読みかえず雁 鷗外の坂がある

幕合間班女はなびの柄とすれ違う

逆ろうてきた生き方が変えられず

窓際のバラが聞いている春の嘘

妹に負けて泣く孫とまたカルタ

島根県

小 砂 白 汀

トラトラトラ虎もすっかり疲れたよ

風ぐるま止ってくれない北の風

七千万せせら笑って総会屋

カビの出たうどんを貰うこともある

外人を嫁さん吃驚させました

鏡開きゆっくり母の茹で小豆

島根県

榎 原 秀 子

耳かきのこけし私のお友だち

夫の字にいつか似てきたなと気付き

おしゃべりが沢山出来てたのしい日

山の四季眺めて暮す山が好き

島根県

堀 江 芳 子

ことしも元気で夫のおでこにチューひとつ

息子と夫の手拍子よろししげさ節

足踏みをしながら明日に光抱く

土手桜ふくらむ如く雪ふわり

一筋の道の苦勞に射す光

島根県

佐々木 芳 正

声低く蓋を閉めさず納棺夫

寅年の賀状へ一句虎放つ

堪忍の緒が切れそうな袋縫う

お年玉テレビの前で開かれる

足跡の長さよ何を残したか

島根県

藤 原 鈴 江

夜更けて正月祝うのも独り

猫抱いて眠るわが子の愛しさよ

病名が付かず不安な日が続き

チラシまたチラシで今日も責められる

生活のリズム狂わす雪不足

老兵の宴軍歌で暮となり

香川県 木村 あきら

荒波に揉まれて丸くまるくなる

七彩の虹追っかけている傘寿

北風に耐え地藏さんにある笑顔

竹光に切られ大きな怪我をする

香川県 工藤 吟笑

四海波イト穏やかに宝船

喝采はないが一日昏れてゆく

お金では買えぬ九十の此の生命

左遷地の地酒に生氣取り戻す

寺の梵鐘宗派関係なく響く

香川県 川崎 ひかり

こぼれ種大地しっかりうけとめる

寒椿哀しいまでの自己主張

四面楚歌愛にかわいている私

いつからか賀状も来なくなった友

騙されたふりして回る母の独楽

香川県 成重 放任

初孫にやつとわが家も春が来た

乾杯を繁栄祈るとしめくくり

末っ子もやつと十五の世の栄え

それなりに写る写真を憎まれず

留守番に仕事一つを置いてゆき

清貧に甘んじ月を賞でる会

香川県 池内 かおり

花時計阿波へお嫁に行くそうな

光栄な事に陛下と同年

落慶式見栄を包んで来たお布施

餡餅で祝う雑煮も我が家流

松山市 宮尾 みのり

歯車が時どき軋む凡人で

流れ矢で消えた雑兵にも妻子

参考にしますといってそれっきり

俗っぽくなって大人になりました

イミテーション開き直ったよう光り

松山市 丹下 美津子

真っ白い布巾も初春の台所

金毘羅さんへ今年も夫婦初詣で

深追いはよそうしゅうともつらい嘘

嫌味だとしばらくたつてから分かり

母の足跡拾って娘にも伝えよう

今治市 越智 一水

孫と寝て心に緑の種を蒔く

酒飲まぬ婿で気抜きの三ヶ日

元旦も雀やっぱり早く起き

人生の財産それは絆かな

用はないけど死ねません日向ぼこ

今治市 矢野佳雲

唐津市 久保正剣

細雪君が好きだと言ひ易い  
じつとして黙っている石が言う

大寒に耐えてる瘦せた肋骨

大丈夫か会社三連休に入る

寒稽古面を取つたら女の子

高知市 北川竹萌

永らえる限り楽しい恋心

祖父の杖石ころ除けてよろこばれ

甘塩も燻製もきた鮭の色

贈られた帽子冠った目がまるい

電話側薔薇一輪がある十日

高知県 小澤幸泉

理由はなくただ一列に並ばされ

黙々と独りでのぼる夜の坂

血糖値やつとけんたい期をむかえ

歩き疲れて御国の春は遠すぎる

今日ひと日あと一日と生きている

唐津市 田口虹汀

元旦祈祷確と卒寿の袍をとる

初舞台鬘に稲穂がつけてある

寅年の運氣示すかドンドの炎

ニュース見ながら妻の七草たたく音

紐銭が揺らぐ曾孫の宮詣り

行革に座つたままの族議員

思惑と違ふ減り方するポトル

自由恋愛援助しているのは女

厚顔無恥な新婚さんいらっしやい

一瞬入婚産休宣言歌手安室

唐津市 仁部四郎

有名になりたいそれはいいことだ

漆喰になるはずもなく昼の酒

煙草の火ナビゲーターになることも

夜更けまでテレビ程度の本を読み

減反のなかにそびえる准尉の碑

唐津市 山口高明

問い詰めてみても所詮は他人さま

眉かかぬ顔を覗いちゃ困ります

夫と子を忘れエステでリフレッシュ

寢室の手形は何時反故にされ

雲海を眺め只今孫悟空

唐津市 山門幸夫

尾を踏まれ振り向きもせず老虎ゆく

千里翔け特攻の虎帰還せず

人生の終焉丸くあらんかな

団欒の故郷の御節の母心

抹消の朱線で埋まる年賀帳

唐津市 山門タミ

一年を虎に追われて走らんか  
虎の子を抱いて老人雲に乗る  
長男の張子の虎も四十八  
ああ人生虎も兎もいて楽し  
大トラが吠え出す頃にそつと抜け

唐津市 市丸晴翠

しきたりを大事に過ごす松の内  
あかぎれの踵で負うた子も巢立ち  
天狗の鼻へし折って来たベン拵  
夢芝居今年はどんな幕になる  
次世代の海岸線が消えて行く

熊本市 永田俊子

真実一路是非々つらぬく水車  
学校近く挨拶通りと書いてある  
じゃんけんていつも小石のわたし負け  
ストーリーを曲げて言葉を探してる  
補聴器がうわさ話を聞きたがる

熊本市 岩切康子

親切にされて気がつく薔薇の棘  
物持ちの心の乾き癒せない  
愛想の良さの裏には戦拳戦  
買えばいいに抵抗しているお造り  
暖冬へ小鉢の木瓜は咲きつづけ

弘前市 小寺花峯

テーブルの蟹を睨んで皆無口  
切れ過ぎる包丁があり妻は来ぬ  
回転の椅子に震えている野心  
ドアを蹴る娘も母になるつもり

弘前市 肥後和香子

雪積もった心ブルンブルン犬になる  
革命ぞ銀のマニキア落とさねば  
落ちついてきた心以外何もなく  
食べて寝て豚になりたい真ピンクの

弘前市 今生恵子

凜々と三寒に居て春を待ち  
雪一色眩しきまでのピラカンサ  
むんむんとかた雪融かす露の臺  
変身のマスクを買いに旅に出る

十和田市 小笠原敏人

元旦は遅れた列車に娘の迎え  
子宝を秘める神社で初詣で  
富士の山手に取れそうな側に居る  
病棟で見る人皆明日はわが身

仙台市 川村映輝

算盤塾何時とはなしに消え去れり  
雪の無い長野へ雪降れ雪が降る  
テトラポット普段は波と遊んでる  
嫁入りの娘の部屋は元のまま

富山県 増田 紗弓

伝統の気が漲ってくる山路  
比叡まで来られた幸へ手を合わす  
長浜の殿の気分でみる湖水  
面影が彩を添えてるひとり旅

和歌山市 青枝 鉄治

省エネへアイドリングを止めにする  
政治屋の正体見たり私利私欲  
汚職したとは書いてない顕彰碑  
父さんが夕餉の膳に居る不況

和歌山市 古久保 和子

祭り好きに巴を走らせる  
他人から笑われながらたから物  
シブールは明日へ光る銀の道  
怪獣になって怪獣描いている

和歌山市 玉置 当代

紀の川の風が身に沁む初日の出  
願い事たと並べた初詣で  
凶と出たみくじ初心を省みる  
道草もするから友の輪も出来る

和歌山市 山根 めぐみ

意地なんか張ると損だよ木守柿  
右往左往して虎の子が落ちつかず  
一天の凧になろうと気ばっても  
魂がやせて冷たい魚になる

大阪市 津守 柳伸

信号機無視上海のいきいき  
幼児に戻る外国 旗の下  
温泉が恋しい姑のパスポート  
身轟頂で終る中国五日旅

大阪市 北 勝美

二度聞いて心とがめる三回目  
三山を眠くさせてる春かすみ  
三輪山のやさしい姿と厳しさと  
花束を絵筆に残し飾る部屋

大阪市 寺井 東雲

熟れている柿に小さい穴がある  
道頓堀暮れてネオンの花盛り  
氏神の玉砂利心澄んでくる  
ハイチーズ女自分の角度向け

大阪市 清水 利武

俄か雪犬もオーバー着て転ぶ  
天国と地獄が載っている新聞  
浴衣着た関取がゆく戎橋  
嬉しいな弥生の月で日が長い

大阪市 松尾 柳右子

人前も怒鳴られているフルムーン  
牛さんに命あずけて由布の島  
胃ぐすりにシッブ目薬旅カバン  
卒業と一緒にタバコ止めました

大阪市 藤田 頂留子

エートエート片っぱしから小引出し  
お茶だけの仲へずかずかカメラマン  
群衆の中でとつぷり孤独感  
自尊心なら誰にもひけはとらないよ

大阪市 川内 呷笑

お目出度う言える新年有難や  
青い星オアシスのまま残したい  
目薬で何故口開ける油断する  
私より会社の健康気にかかる

大阪市 中田 あい子

喜寿なかば恙なけれと初詣で  
ゆず風呂で無口な友の話す過去  
餅花にロビー華やぐ初春興行  
ルミナリエ鎮魂祈る灯が冴える

大阪市 玉置 英子

偉大なる人の長子である運命  
子の一家猫のこまちと共にくる  
孫去んで睡りつづけた十五時間  
皮剥けばどれが玉林どれがふじ

大阪市 黒崎 恭子

友の声孫の話で若くなる  
おだやかに恵まれますよう寅の年  
暖冬に冬を忘れた雀たち  
ウインドにうつる姿はお年寄り

堺市 黒田 真砂

虎吼図に病める夫の癒え願う  
人生に似て笹舟の行く所  
お年玉目当ての孫の良い笑顔  
逝きし君の玉句が今もまな裏に(習子様に)

堺市 宮本 かりん

献血車もう入れない齢となり  
溶け合えぬ色も夫婦のえのぐ皿  
やんわりと妻が寄り切る土俵際  
席立つと邪論になってしまえそう

豊中市 滝北 博史

風邪ごち庭のキンカン食べてみる  
健康も運勢も実力のうち  
寒椿三船や伊丹星も逝く  
キャンパスに粉雪が舞い不合格

豊中市 松岡 久留美

ご自慢の息子の裏が見えぬ親  
悪友と知りつつなぜか逆らえず  
足音にやっとな堵の妻の顔  
睦まじい空気の中で育つ子等

池田市 岡本 吉太郎

人生の古強者の旅楽し  
海一つ渡っただけで旅気分  
老いた今捨てた故郷夢に見る  
マイナスの二乗がプラスまだ解せぬ

池田市 藤井計光

証券マン言葉か細く名刺出す  
限定品 日付け変れば積まれてる  
あいりんで旦那社長と拜まれる  
寅年だフアンは優勝待っている

寝屋川市 平松かすみ

お土産にコピーをもらう通知表  
かさこそと年金渴く音がする  
普段着で話せる友が居てくれる  
娘にも言えぬ心配聞いてくれ

寝屋川市 富山ルイ子

ニコニコと笑顔絶やさず自己保身  
続き柄問えぬ雰囲気持つ二人  
遠く離れた今も電話に長い文  
泣いて泣いて白寿の母の別れ際

枚方市 二宮山久

幸せな暮れへ今年も聞く寝息  
不景気へ心のひもをしめなおす  
ローン終え家財道具へ出るお金  
お年頃隣の娘に春がくる

枚方市 森本節子

寒空にもうご出勤カラス二羽  
重い荷も軽く感じてゆく余生  
やすらかな顔にたむける菊一輪  
朝の祈り兄の戒名一つ増え

(抜智兄遠く二句)

東大阪市 安永暁子

初笑い若さ溢れる姥ざくら  
丁度よい二泊三日が気ばらしだ  
きようと通過水了軒の紐をとく  
大井川わたるとレンズ顔を出す

藤井寺市 福元みのる

除幕式長老順に並び分け  
手のこんだ話に膝の向きを変え  
人も地球も今は浄化の新时代  
飲めぬ者同士で食べて駄べる宴

藤井寺市 鴨谷瑠美子

焰立つガスの白さにシクラメン  
神さまに尾行されてるような風  
貞節を誓って脆くなりそうな  
鶴の群オーケストラで冬の旅

八尾市 村上剛治

深い井戸中を覗いてみたくなる  
ありがとうよく働いている十指  
奥の手がまだふところにあるゆとり  
白い杖情けの風を帆にはらむ

八尾市 村上ミツ子

初詣で張り子の寅に迎えられ  
ちよつといい話だまっていられない  
トンネルに車窓の景色奪われる  
強く回ればまわるほど独楽静かなり

岸和田市 芳地狸村

福笹がおいでおいでと戎さん

吹き抜きに度肝抜かれるコンコース(京都駅 二句)

階段が恋の花咲く新名所

優しいが姑のとげが見え隠れ

岸和田市 寺田甚一

初詣で神社仏閣みな立派

下半身さき上半身いま老いる

一寸先は闇だと思ふ妻のけが

二人三脚しみじみ思ふ妻と生き

岸和田市 藪野けい子

初詣で駐車場さがす時間長し

しめ飾りつけても事故がやってくる

福まきに股をくぐって取るお餅

若さに年忘れてしまう五十歳

河内長野市 井上喜醉

隠しても老いは他人によく見える

天国は面接なんかしないそう

遊歩道風と枯葉がかくれんぼ

ほっとする場所やすらぎの風が抜け

神戸市 池田善守

祝い膳出して去年を偲んでる

お掃除は朝の連ドラ済んでから

過去に足つかまれないつもがく妻

絵葉書で旅の眺めのお裾分け

西宮市 西口いわゑ

ポストから初春のよろこび溢れる

苦も楽も神に頂く一ページ

あてのない旅のプランに浮かれる

死ぬことも美しきかな椿の朱

西宮市 久保まさお

初夢やローズの句集寒椿

花つかぬ泰山木や寒椿

暗然とクレール見おろす甲山

訃報しきり余命を照らす月凍る

芦屋市 黒田能子

振り返り危ない橋であつたらし

風に背を押されて一歩踏み出した

つじつまが合ったか風は風いでくる

一つぐらい弱いところもあつてよし

姫路市 古川奮水

歴史など究めず未来を立てる無知

欠席の意義に深い理由を知る

点滴をカクテルにして目が覚める

当然の事が世代で否決され

岡山県 大石あすなろ

長男も次男も渡つて行つた橋

バラ一輪壺と波長が合いました

封印を破る覚悟は出来ている

岩田帯命のバトン刻む音

竹原市 古谷節夫

時刻表見ると遠出がしたくなる

ブロックサイン相槌だけは打っておく

寝たふりが上手になって共白髪

立春へネジ巻き直す万歩計

鳥取市 前田一枝

初鏡拭いて今年の顔覗く

裏町でばったり出合う酒の友

宇宙から記者会見も見茶の間

城下町宴に乗って娘は嫁ぐ

鳥取市 美田旋風

ここしかない居場所をきめた墓洗う

下戸の子と手酌で新春祝う酒

幸多かれといなばに麒麟獅子が舞う

少子化に逆らい連子凧揚げ

鳥取市 杉本孝男

策略に溺れて相手見失う

嘘つかぬ土恋人にして生きる

追伸へ愛が溢れる風邪引くな

的すこしずらすと狙いよく当る

鳥取市 植田一京

ほどほどと言うのがとても難しい

どしゃ降りに耐えた傘です陽に当てる

にこやかに笑いバツサリ斬り捨てる

打ち込める仕事まだあり古稀の春

倉吉市 米田幸子

くすりにも毒にもならぬ夫と居る

ともしびが点くと人恋鳥になる

ふたり仲良く入る穴なら掘ってある

愛したら花が答えてくれました

倉吉市 最上和枝

平坦な道になるほど畏がある

席蹴って出たが行き場にあてが無い

腹蹴られまだ見ぬ吾子と話す

板子一枚賭けて大漁旗なびく

米子市 茂理高代

雪しんしんふる里恋し亡母こいし

花を恋い旅の終りのささえにす

茜雲きれいに去って行くつもり

ピンセット恋の炎をつつかないで

米子市 白根ふみ

元旦の一日だけが初々し

いくたびのおもいゼロからにして新春

芳恩の数えきれない年を繰る

冬の海底いきれない浪の花

米子市 木村春枝

褒められて舞いをやめない奴風

春の音のぞみ溢れて新入生

一人居の寓居に人を恋い続け

プロポーズ逃げ道フルに空けておく

雪不足タルマ山から降りられぬ  
鳥取県 羽津川 公乃

赤い実の越年鳥も飽食か

出不精に拍車のかかる遠い耳

天に唾あれから重い罪を曳く

鳥取県 西川 和子

陰口を言えば隣がクシャミする

飲めぬとも言えぬ美人が酌をする

まだ六十路明日も夢を追いかける

ピリオドの後に退けない戸が締る

鳥取県 さえき や え

せめてものなくさめ眠るように逝く

短歌づくり続けなされよ筆と紙

教え子の校歌でおくる棺かな

惜別の弔辞みごとな雪が舞う

鳥取県 太田 幸枝

浮いた噂あつた昔が花だった

お話が弾み湯豆腐浮いて来る

水鏡軽い私が浮いている

露天風呂旅の疲れが浮いている

鳥取県 乾 喜与志

釈尊のお慈悲が待っていらっしやる

か細くなった手を合わせナマンダブツ

山茶花よもう春です春です春です

煙が白うなつて気持ち落ちついた

どつきりとさせられたのは仕掛人  
鳥取県 石谷 美恵子

佳い報せ父が一本追加する

中立の椅子で暫く貝になる

背伸びしたツケであちこち綻びる

松江市 佐野木 みえ

帰省の子とビールつぎ合う幸せな

水仙の気高くピンと背を伸ばし

友は今孤独と言つた電話口

寒牡丹一期一会の彩を賞で

出雲市 板垣 夢酔

農機具が出たいと春を呼んでいる

峰打ちで改心すれば儲けもの

酒注ぎが話しかけよが蟹させる

満月が去つてくれない露天風呂

出雲市 岸 桂子

二度三度読む気にさせたい句集

空瓶も花一輪に生かされる

諍えば視野いっぱい抱く孤独

少しずつ老いる頭を揉みほぐす

出雲市 小玉 満江

相槌を打てば終りの無い話

人形は寝言の事はしゃべらない

世話好きで我が家の事は後まわし

きんかんが熟れて帰らぬ友惚ぶ

出雲市 富田 蘭水

未整理の心師走が叱咤する  
幸せになる暦なら信じます  
座禪して出る待合の肉料理  
若水を汲んで幸せ引きしめる

島根県 西村 早苗

花便り出雲憎らし小雪舞う  
年甲斐もなくわたくしも買ったチョコ売場  
耳打ちの以来とまらぬ胸さわぎ  
冬囲いほどこう春の陽をあてよう

香川県 山地 マツエ

松活けて先ずは一献屠蘇祝う  
目を病んで少し人間甘くなる  
子がくれた旅のんびりとフルムーン  
古い傷また思い出す寒月夜

香川県 永峰 伽名子

有為転変私の地球を守らねば  
シンビジューム存在感を誇張して  
初恋を秘めているのかシクラメン  
遙か彼方呵吽の呼吸母娘草

西条市 片上 明水

酒代になる鉢巻を父は締め  
冬の色隅に残して春の色  
ふたありで飲むと多少は多くなる  
知らぬ間に歩調が合って春の道

今治市 野村 京子

丸腰になって日の出に手を合わす  
子の彩を深い思いで溶く絵皿  
ふるふきの大根ははをまだ越せぬ  
傷心へ夕陽ストーンと落ちてゆく

高知県 赤川 菊野

ハチキンのきつい言葉にある情け  
日銭追う暮しの中の文学書  
上弦の月も夕日もエトランゼ  
オタヤンが仮面をつけて通夜の席

北九州市 梅田 宣司

一つまみの塩に命を計られる  
笑い袋あけっぱなしの家族です  
うっかりを孫の小指が許さない  
仏様によく似た魔女になりおわす

熊本県 高野 宵草

悔しいがテレビに負ける居間の本  
村八分されそな嫁に牛耳られ  
口下手の好意もごもご出す土産  
歳月や孫が去ってく別世界

大阪川柳の会

と き 4月2日(木)17時開場 ところ サンケイビ  
ル本館322号室 題と選者 譲る・浅雛美智子△は  
ればれ・久保田半蔵門△意気・宮口笛生△洗う・磯野  
いさむ 各題二句 席題なし 500円 18時締切

# 自選集

黒川紫香

まつかさを拾い古里話す妻  
朝粥の熱さを妻と眼で笑う  
朝の靴みんな揃えて妻忙し  
一姫二姫三も太郎を産めず逝く  
雪の道踏みしめながら亡妻を恋う

奥谷弘朗

自分から藪医者と言うお人好し  
日記こそ気力の糧として生きる  
奥様はやっぱりちがう裾さばき  
シベリアの苦勞をいやす銀盃だ  
総理からうけた銀盃酒うまい

松川杜的

おめでとうさん言うて大福買うて来る  
本物の獅子舞に逢う街の角  
シーソーは知らぬアンタ達夫婦なの  
大福は仏さんに上げてから  
其処に出来た京都駅まだ知らぬ

恒松町紅

運がいいのか青空になってきた  
お舅が達者で柴をしています  
同い年がハツバをかける白髪首  
お調子に乗って老骨喋りすぎ  
いい知恵が浮かんでやっとな眼鏡拭く

阿萬萬的

年金暮し空転に似た日々つづく  
物忘れを互いに笑う老夫婦  
嘘も方便その嘘さえも底をつき  
すぐ調子合わす男でうすい影  
ご近所は妻にまかせて日々平和

藤井明朗

正月も過疎 車だけ動く  
降りつもる雪見の句座へ酒が出る  
遠く近くとしよりの元氣見透かされ  
さくら名所句会楽しと便り来る  
のんびりとしていて雑務溜めている

高杉 鬼遊

食べて寝て金が力と思わない  
酒やめてからのごはんを出し遅れ  
不景気の坂だ笑って転げよう  
馬鹿な男と莫迦な女の星回り  
十二月いくさの傷に血が流れ

小林 由多香

除夜の鐘聞きつつ賀状書き終える  
下手でよし賀状手書きに決めている  
南から北から賀状おめでとう  
特撰のお酒ちびちび賀状読む  
猫に似た賀状の虎へ初笑い

西田 柳宏子

大雪に新春の決意がもう崩れ  
福笹にいっぱい欲をぶら下げる  
成人式天の試練か雪や雨  
ドカ雪に冬季五輪もホッとす  
祝日に国旗の見えぬ都市砂漠

野田 素身郎

杖ついていても転ぶときは転ぶ  
日記では気丈な妻が泣いている  
プラスマイナスゼロでどうにか年を越し  
寅年の今年は違うぞタイガース  
寝たきりの明けて九十八の母

野村 太茂津

景気上向け俺は前向き一歩二歩  
老妻の背が丸いぞ去年より  
人生を悟ったように呆け始め  
くたばってたまるか戦友よ生き残り  
目標は卒寿へ祈る初詣で

遠山 可住

部屋割りへ又ひと苦勞女旅  
六十の手習い先生孫のよう  
かけっこのピリが孫まで遺伝する  
美しい花美しい籠で咲く  
食糧は輸入と恐いことを言う

金井 文秋

ファッションショーのつもりかシクラメン  
傘寿ぐらいじゃ長生きやおまへんで  
体調を気にしながらも生きる鬱  
動けなくなる日を思うのが怖い  
元同業のこの店も閉めたのか

月原 宵明

握手してあつと驚く固い胼胝  
騙されてやるのは一枚役者上  
赤いもの着たら揉み手はもうしない  
まだやる気ずらり手帳に外来語  
眼鏡越し侮蔑が先の初対面

正本水客

柿の實の赤が軒端の壁を冬にする  
おおきにおおきにと感謝している顔でなし  
多情多恨しみじみ自分の手を見る  
頼もしい人だと影がついてくる  
わけあってわび住いしているわけではない

小西雄々

瓢瓢と生きたい虎と棲んでいる  
余生みち角を曲ると明日が見え  
新春のシナリオひとつ懐に  
脳味噌を詰め替えドラマ編みなおす  
雪女お節料理も食はず消え

辻白溪子

浮気なぞ先ず心配のない内気  
子のおもちゃになって猫が逃げ回る  
フルーツが出るまで下戸は待っている  
門たたく閉めて汚職の匂いする  
期待した嫁の自由になる子供

波多野五楽庵

苛立ちの一人芝居がせつなすぎ  
明日なんてだれも知らない雪の闇  
あらかたの嘘は慈悲だと信じよう  
冬ごもり小さな回顧抱きしめる  
しよぼしよぼと涙の味がする津軽

藤村 女

四代を生きて悔いない座りだこ  
古都慕情吉井勇の歌碑に佇つ  
真如堂去來の墓の寒々と  
無に還るそんな言葉が解りかけ  
捨てるもの捨てたつもりがまだ悩み

八木千代

硝子戸を鳴らすは冬か援軍か  
吊つてあるだけで打たねば鳴らぬ鐘  
椿落つ渾身の愛響かせて  
今はそつと雪の下から響いている  
地響きとなつて味方が現れる

河内天笑

ぬくぬくのごはんにうにのてんこ盛り  
朝起きて顔を洗つてストレッチ  
また肥えたねエとはやばなご挨拶  
もうちよつと賢なつてとぼやかれる  
しんみりと聞けば説教すぐ終わり

御芳志御礼

桶高薫風主幹・堀江正朗氏・北野久子さん・結城  
明玄さん・北畑金治氏・林荒介氏・匿名氏二方から  
協力金として金一封を拝受いたしました。厚く御礼  
申し上げます。

麻生路郎の作品とその周辺

# 大字の、、、ろ

(86)

## 橘高薫風

しなさだめ 全一冊 M 27年12月22日  
東京神田鍋町井口松之助発行、菊版八十  
頁、日清戦争の狂句

へなづち集 全一冊 M 34年12月13日  
東京神田新声社発行、阪井久良岐著

川柳梗概 全一冊 M 36年9月22日  
東京日本橋区金港堂発行、阪井久良岐著

電報新聞川柳欄創設 M 37年4月29日  
選者阪井久良岐、新柳樽と命名

日本新聞川柳欄創設 M 37年7月3日  
選者井上劍花坊、新題柳樽という

読売新聞川柳欄創設 M 37年  
選者朴山人田能村梅士

新編柳樽 第一 M 38年4月  
大阪小島六厘坊発行、『矢車』第三号に  
齋藤松窓記す、未調

新風俗詩五月鯉 第一号 M 38年5月5日  
東京麴町川柳久良岐社発行、四十四年三  
の五で終り

川柳 第一号 M 38年11月3日  
東京神田駿河台柳樽寺川柳会発行、四十  
年十月廿三号で終、大正六年大正川柳を  
出す

葉柳 第一号 M 39年6月  
大阪西柳樽寺発行、新編柳樽の改題、四  
十二年五月号にて終

明治以後の川柳年表 (柳誌柳書)

西島 ○ 丸

柳の庭 (書名・誌名) (発行年月日) (発行所その他)  
全一冊 明治4年3月  
辛未歲旦会出版、中本和紙狂句、六代目  
川柳序及選

柳廼栄 全三冊 同末冬  
東京錦耕堂版、五世川柳追福会、中本和  
紙狂句

柳風狂句家内喜梅 全一冊 明治5年7月  
六世川柳評、和紙中本、蘭溪の序あり  
新選川柳点絵草紙 全一冊 明治6年  
小信画、時雨堂閑人序、大阪版

團圓 珍聞 第一号 明治10年3月24日  
東京神田雉子町團圓社発行、毎土曜発行、  
川柳欄を置く

(当時は未だ狂句の時代、表題で内容が推  
測出来る。以下に時代相の著しいのを記す)

月とスッポンチ 第一号 明治11年10月  
東京神田興聚社発行、月二回、狂句

古今川柳一萬集 (東洋文芸全書) M 24年  
東京日本橋博文館発行、骨皮道人編

へその宿替 全一冊 M 15年6月  
横浜辨天通小出留五郎版、川柳の部とい  
うのを先に置く

大日本全国風雅の友 全一冊 M 19年7月  
東京神田花田町耕文社発行、前島和橋元  
祖川柳の図を描く

花たら誌 ひと枝 M 21年6月30日  
東京、京橋中橋和泉町文友舎発行、狂句、  
毎月一回、後いろいろは新誌となる

吾孺布里 第一 M 23年11月15日  
東京神田連雀町紫紅会発行、菊版、川柳  
云々の文字多し

新風俗詩五月鯉 第一号 M 38年5月5日  
東京麴町川柳久良岐社発行、四十四年三  
の五で終り

川柳 第一号 M 38年11月3日  
東京神田駿河台柳樽寺川柳会発行、四十  
年十月廿三号で終、大正六年大正川柳を  
出す

葉柳 第一号 M 39年6月  
大阪西柳樽寺発行、新編柳樽の改題、四  
十二年五月号にて終

# 鈴木可香

東野大八

全国各柳誌々上でおなじみの一名、機関銃の鈴木可香のことをこれから書く。

晩年顔を合わせた川上三太郎いわく。

「名古屋の可香君はキミ、三十余年間に七万句を作っているそうだよ。それをきいて内心ギョツとしたぜ。これじゃあ、江戸時代の大矢数奉納にも出られる。柳界の大名物というより、忌憚なく言えば奇人に属する」

「もし、川柳の無形文化財が選ばれるとしたなら、私はちゆうちよなく、可香さんがその第一号を飾って下さることを信じたい」

(『川柳なごや』No.三六四・新海吐平)

何さま大正八年、十五歳にして川柳を手がけてござったのだから大変な超大先輩である。

「句は今もって下手です。後世に遺す句はありませんが、競吟会で一時間に百二十四句

作ったのが最高です。『鯨鏝』の隆昌な頃だ

が、句数は無制限で、席につくと係りが私の

顔を見て、黙って三、四十枚の句箋用紙を置

いてくれるが、本誌の副主幹だった大曾根大

吉氏は、あんたは機関銃だから、皆さんの三

人分ぐらい置いておくというのが常だった」

昭和44年8月刊の『川柳なごや』に可香執

筆の『私を語る』の以下そこから平成2年

8月刊の鈴木可香句集のあとがきの要約

可香の本名は實三。明治37年4月20日、岐

阜県中津川市生れとあつて、恵那山麓人の別

号をはじめ、曾我あり平、銀嶺莊、鈴木みの

る、現在書信には『瓦全房』を用いている。

歳父は奥村久吉、海産物青果商の顔役で、

俗に『夕立ち久さん』で通るサツパリした気

性の持主。その六人兄弟の二男で、生後一年

半後に鈴木家の養子となる。現在、名古屋市のタケハラ株式会社で、庶務課長十余年というベテラン。平凡なサラリーマンで、八人の子を育てたが、現在、それぞれに巣立ちを果たし、手許には一人もいない。

大正八年、15歳で『文章倶楽部』や『新愛

知新聞』『恵那タイムス』に投書をはじめた。

大正九年春から、川柳へなぶり、もの付けにも手を染めたが、当時の川柳は滑稽味の勝つ

たものが喜ばれ、短文学中一番下級なものと

され、歌人や俳人は川柳を低くみていたのは

事実である。

このため自分も川柳の作句を手がけたもの

の、公表を憚って、みゆる、あり平、麓人の

別号を用いて地元新聞や中央の雑誌などへし

きりに投句した。

欲深な大家中風で弱りこみ

などが初入選の句としてなつかしい。

趣味の短文学は川柳一本の道にしぼって、

鯨鏝の例会へは大正十四年から精勤した。当

時、若手の一人として先輩にももまれたが、

はかま羽織で句会へ出るのは私一人で、昭和

九年に長男の生まれるまで私服で通した。人

呼んで袴の可香、大島の可香のニックネーム

がついた。

昭和3年にキング連載の『悲願千人斬』にヒントを得て、一日百句を三年志し、それが満五年続いた。作品のはげ口を考えて、全国の柳誌にじゃんじゃん句を送った。毎月、五十七誌へ七年間続けた。袴の可香に先だって機関銃の名は満州から台湾にまで伝わった。

昭和5年には日本百作家に推薦され、私の作句欲は止まることを知らなかった。吉村半弥・清水美江と共に多作家として柳人間の話題の人となった。

昭和2年12月2日、私が24歳、家内が18歳で結婚した。結婚三日目のこと、妻と次のような誓約をした。

「僕は今川柳を作句しているが、これからもずっと続けるつもりだ。エライ先生になろうとは思っていないが、全国どこへ行っても可香といえは、名古屋の川柳家として名の通るまで続けたい。これから先、川柳に金を使っても、句会に出て徹夜したり、川柳遊行で数日家を空けるようなことがあっても愚痴を言わないことだ」

そして僕がスランプになったり、ヘコたれたりしたらムチ打ってくれと頼んだ。このよな思い出からいつか川柳現役半世紀を越えられました。

活字になって残ってゆく作品が、句会の作

品を加えると一か月四百句から五百句になる。購読していない柳誌にも投句しているので、ノートに浄記も完全を期することが至難である。ままよ作りっぱなし主義で行くより手がないと思った。

平成元年4月、作句歴七十年記念に名古屋市の常光院に、良い句ではないが、人生のけじめに自筆で「富士泰然動いてはる春の雲」の句碑一基を残した。

この折に句集もということで、芸風書院のすすめで『日本現代川柳叢書』第16集のこの本を刊行することにした。

今回の句集には四百五十句必要とあり、二十誌の中から三千句浄記して、好きな句をここに収めた。

僕は五十の齢から、句会の席などで、自分は九十三歳の四月二十日午前二時二十五分まで絶対死なないと強調した。古い柳人は今でもこの言葉を覚えていてくれるはずだ。実は百歳までと強調したいところを七つ遠慮して右の齢にきめたのは、こう自分に暗示していると、かならず実践できると信じていたからだ。

嘘は言わない、約束を守る、人には親切にする。お陰で八十六歳の今まで健康で元気である。作句は生命ある限り続けたい。

こう生前、宣言した甲斐あつてか、平成九年7月19日、老衰で死去した。享年94歳とあるから、一年おまけである。

昭和3年「川柳紫会」を興し、昭和10年まで主幹を通し、昭和8年斎藤旭映・長谷川鮮山らと「名古屋川柳会」を創設、現在も続刊中の同社機関誌「川柳なごや」顧問。併せて愛知県教育振興会川柳部選者ならびに名鉄川柳年度賞選者をつとめている。

以下は鈴木可香句集(平成2年8月芸風書院刊)からの抜き書句抄。

寺町のこんなところが京の味

部屋までの廊下の長さ山の宿

慶賀の至りに候明治筆で書き

八十二もう校正のきかぬ齢

堂々と碑面に筆とる八十五

ホケましたなどと財布はしかと持ち

ホケてから何が神様仏さま

八十五 一日何もせず疲れ

とんちんかんの受け答えて八十五

八十六明治生れの意地で生き

#### ▼次号は「傍島 静馬」

訃報 中尾漢介氏(箕面市)は急性肺炎のため2月15日死去。81歳。好作家の死去を悼み葬儀には各柳社から多数参列した。

## 『出替』

清 博 美

へば、殊の外六箇敷く成て、奉公構て宿迄迷惑におよび、惣て男の奉公人少も悪事有か慮外すれば、家々にて手討にする。欠落すれば尋出させためし物にするゆへ、家々のためし物、爰かしこに一箇月に二三度づ、有レ之故、下々の作法もよく、刀脇差の刃の心見も調也」とあり、些か物騒な記述も見える。

また、『守貞漫稿』によれば、「……又三都ともに口入より年季奉公を媒あれども希にて多くは音音等に頼て仕へを需むる也。半季奉公は専ら口入の媒を以て奉公す。三月三日より九月朔に至り九月朔より三月三日に至るを半季とす。蓋京坂は九月を用ひず八月を期す。其期日を出替り時とす。……一年給金大略三両、是を下僕とす。……多くは飯炊のこと等を職とす」とあり、女の場合は、「江戸坊間の婢は専ら相模安房総州の者多し、是江戸の女は前に云る如く専ら武邸に奉公するが故也。因て京坂市民の婢には風姿野ならず往々美貌の女あり、江戸坊間の婢は自ら野のして美婦希也。江戸坊間の婢年大略金三両より二両に至る。上婢下婢二等あるのみ、上婢を中働きと云、中働き年給二両余、下婢を飯炊と云おまんまと訓す。年給三両家制により不レ同と謂ども江戸は飯炊の勞多きを以て年給上婢より貴し」とあつて、給金の高が知られる。

出替とは、下男女などの下級奉公人が、雇傭期限を終えて入れ替わることをいう。一年契約の出替り時は三月五日。中には雇用主に気に入られるなどの事情によつて、そのまま更に一年継続する場合もあるが、これを居なり、または重年といつた。

『東都歳事記』に、「○奉公人出替り 今日僕婢、舊主に仕ふ。江戸奉公人出代りの事は以前は二月二日なりしが、明暦三年丁酉正月十八日の大火によりて、其年三月五日に出代りすべきよし、公より御沙汰あり。夫より改りて三月五日になれりとぞ。」とあり、また『むかしく物語』に、「昔は家来春出代り二月二日也、寛文の年より三月五日に成、出代りの日奉公人の肝煎の宿来り、御家へ何様の御奉公人何人、御用に候やと承りに来、又

外のものも右之通申来る、幾人も可レ懸三御目一とて、男女四五人も召連来る、其内人柄氣に入候者有レ之候へば、宿何方大屋は誰、先ん主を尋切米の高取替、夏借等極め、男女共に食に附、一日召仕ひ色々奉公申付、女は縫物其外芸いたさせ、又早朝より参候様に申付返す、男女共に同前也、翌日も呼び終日召仕ひ、又明日も参候様に申付る、如レ斯五日十日も毎日召仕ひ、其内外にも能者も候へば、是と引替る事も有、五日も十日も呼候得ば、奉公人最早何日相勤候、願くば御請状被二仰付一被レ下候へと願ふ時、請状いたさせ、男は其晩に引越し、女は翌晩引越し、三十日も四十日も能勤候時、奉公人今迄はよく勤候、おのれは新参、七十日と申にてはなきか杯と油断不レ仕其頃の奉公人食に附てもはづし候

『続飛鳥川』には、宝曆・明和頃のこととして、小身の旗本では、「給金、茶の間は一兩三分ぐらい、端下は一兩一分位、右給金にて、茶の間は、裾模様白むく所持なくては、抱へざりし也、……予が父の物語りに、側に召遣ふ小女は、一兩位の給金にて、節句などの飾、振袖着用せし由、元文、享保の頃也」ともある。

さて、この奉公人の斡旋を業とする者を、俗にけいあん(桂庵・慶安・慶庵)・入口・口入・口入人・人宿・肝煎などと呼んだが、『近世事物考』などによれば、寛文年間、江戸木挽町に住んでいた医師大和慶安が、男女の縁談を医業よりも専らとしたことから、縁談や奉公人など人の仲介をする者を「けいあん」と呼ぶようになった、とある。

ところで、先に紹介した『むかしく物語』の記述にも見えるように、悪質なけいあん、奉公人も少なくなく、雇主に被害が輸出し、社会問題化し始めた。そこで幕府も放置できず、宝永年間に当時の人宿に組合をつくらせ、この組合が奉公人の身元保証人になり、また、奉公人が取逃げや逃亡をすると、雇主に給金の支払か代人の派遣をし、盗品は代金に見積もって七日以内に返済し、逃亡者を捜査させるなどのことを制度化したのであった。つまり、それまでは個々の人宿が、負担してい

た保証責任を組合が連帯して負担することになったのである。(『江戸学事典』)

「江戸時代文化」第二巻第三号には、原胤昭氏の文章として、「私共家庭の下女下男は、一季抱への奉公人、武家町家と云はない、下級奉公人は皆一季抱で、三月五日が出代りの極り日であった。妙な日に極めたものだ、年季ならば大晦日でありそうなるものを、それは何所でも越年は事が多いから、それで一ヶ月たつた二月の二日と極つて居た。所へ明暦三と云ふ年の正月十八日、本郷丸山本妙寺から出た火事で江戸町中が焼けた、奉公人の出代りも何もありはせない大騒動、漸く三月になつて奉公人の出代りが片付いた。其後は三月五日が一般に手代り日となつた。奉公人の桂庵、芳町のちづかやは前以て用否を聞き人数を尋ねに来る。当日はちづか屋の手代が三四人づ、連れ立ち男女奉公即ち求職者数名を連れて来る。此の人撰は主婦の大役目で、見ともなくないやうに、身元聞糺しも、智能測定も口頭試験でやるのだ。これは中々珍妙であつたので、私杯もそこらにちよこくして居て叱られたものでした。目見への人々は試験に及第すると、女は直ぐ泊り込み、男は十日通勤で、目見へ奉公をするを慣例とした。畢つて身元請証文となつて就職が確定するのであつた」と。

\* 九

出かわりに日和のよいも恥の内  
一 せめて涙雨でも降ってくれば。  
九 17

出代りの日ハにくひ程つくつて居 宝八・天  
一 化粧もしないで働いて来たが、今日だけ  
は念入り化粧。

出替りハ内義のくせをい、おくり 明六礼一  
一 家庭の状況や内儀の癖等を後任者に申し  
伝える。

出代りの乳母ハ寝顔にいとまごひ 四四 13  
一 寝ている子供を起こすのに忍びなく、寝  
顔へサヨナラをする。

出かハりて娘の恋のはしつか落 拾三 12  
一 恋人との連絡係りの下女が出替、さて、  
これからどうしたらよいのやら。

出替りの間は嫉もたまたすき 八〇 1  
一 嫁が替わっておさんとん。

出かはりの涙ハ敷居かぎりなり 明三 仁 3  
一 敷居をまたげば、まさに赤の他人、感傷  
などはない。

出替の泪タにしてハこぼしすぎ 明二 仁 3  
一 旦那が息子の手が付いたか。尋常な涙で  
はない。

出代りや明日何国の水を汲 一五三 32  
一 出替で感傷に浸っている間は無い。明日  
から又過酷な労働が始まるのである。

# 秀句鑑賞

同人吟 政岡 日枝子

— 2月号から

今、鳥取県では「一県民一文化」事業なるものを実施していて、川柳もその文化活動の中に組み込まれ毎月講習会があります。

折角のチャンスだから、講師の先生方の、貴重なお話を聞き洩らすまいと、メモしてますが、「川柳は人なり」と、どの先生も言われます。そして、見えぬ光、聞こえぬ音など、物の本質を解釈する事だと。

この度、同人諸氏三百六十八名の方の句を拝読しました。

ああ、矢張り川柳はむずかしいと思いましたが、川柳が好きだから、川柳を愛しているからこそ、こんなに沢山の句を読むことが出来たのだと思います。

それも、光が見えただか、音が聞こえたかと自問自答しながら…。

人は皆善なり目線合ったとき

園山 多賀子

人間はつきあう友人のよしあしで、善人にも悪人にもなると言われています。

心に疚しいものがない場合は、堂々と顔を

上げて、目線が合わせられるものですが、その反対に目線をさげたり、気にしたり、合わせないようにしたりという、哀しいシナリオもある現実です。

微光るきのうや今日のものでない

小池 しげお

定退後に市民農園など畑地を借りて汗を流しておられる方が近隣にいますが、父祖の代からずっと使われている、それらとの対比が面白く表現されています。

歎にかぎらず、きのうや今日のものでないという処に、そのものの、自信と誇りがみえます。

約束通りに生きてわたしも花の種

池 森子

種になるには、その前に素晴らしい花の刻があります。森子さんはどんな花でしょうね。思いがぐんぐん広がっていきます。

天はものを言わないけれど、きつと私達は神サマと約束をして、この世に生かされているんですね。

古い店次々消えてゆく流れ

青戸 田鶴

大木は風に折られ、古い友人も一人ずつ消えてゆき、全盛を誇った老舗も郊外の大形店へと客は移行。

これも世の常の事で、空しさを感じますが、長い目で見れば新しい大きな流れの兆しを感じます。

神様が私を捨てるはずがない

谷口 次男

神様が私を見捨てないように、始終ご縁がありますようにと、神サン参りの時のお賽銭は四十五円と決めています。少ないかなと思いつつも、この語路合わせを大切にしています。きつと神サンは見ていて下さいますよ。

何といつても出雲の神の国の近くに住んでいるんですけど。

ワルツを弾くと隣の犬がさわぎだす

白根 ふみ

おとなりときしきししない低い唄という句を発表されていますが、この唄の向こうにワルツ好きの隣の「ももちゃん」がちよんと座っています。

犬が吠えるのではなく、さわぎだすというのがこの句の命ですが、近所とのコミュニケーションの大切さを思わせる風景です。

有頂天バックミラーをみておらず

後藤 黎之助

運転のマナーの悪いのは女性だと言われな  
いように思いながら、ヘアスタイルや、我  
が顔などを、ルームミラーに映している私。  
何か有頂天になるような事があつたら、も  
つと危険です。

人間の心の弱さがよく出ています。

日向ぼっこ懺悔のはなしふつとでる

榎 山隆盛

日向ぼっこというホッコリ感に先ず惹かれ  
ました。人は何も言う事がない時は、悪口を  
言うか、人の不幸に興味を持つものだと言わ  
れますが、あたたかい陽に包まれて、身に纏  
っている物一つずつ捨てて、まるで仏様のよ  
うな心になって……。何とも言えぬいい光景で  
すね。私もこういう類の人間になりたく思  
います。

寝たきりの母耐え給う目を閉じて

中村 ゆきを

「目を閉じて」に思わず目頭があつくなり  
ました。目を閉じて身体と心の痛みに自分で  
耐えるか、私の姑のように、この時だけ呆け  
を装うしかないのです。哀しい事です。

そして、私達も近い将来そうなるのです。  
心ゆくまでのご介抱を。

風邪の床きらめく塵を見て飽かず

桑原道夫

オヤお宅もそうですか。眼の手術をされた  
方が今までチリなど無い家だと思つていたの  
に、急に廊下や部屋チリが目につきだした  
と言われます。私もきらめく塵の中で堂々と  
生きています。

一番怖いのは神様のスケジュール

長浜澄子

神様のスケジュール表の中には、ごほうび  
を下さるページもあるかも知れませんよ。

しかし、一番知りたい事は、いただきたい命  
をお返しする日、怖いと思つと怖いことがお  
こります。神様の予定表を覗いてみたい、い  
や知らない方がいい。複雑ですね。

ちよびりの嘘を転がす喉仏

小寺花峯

嘘から出た実とか、嘘も方便ということも  
ありますが、きつと心の痛む嘘、つかざるを  
得なかつた嘘だったのでしょ。

嘘を転がした喉仏に酒を流して、己れを責  
めている姿がみえます。

しかし、生きていく上で何よりむずかしい  
ことは、嘘をつかずに生きるという事だそ  
うです。外からは判らない女性の喉仏も、嘘を  
転がした痛みを感じていると思えますよ。

老人の武器は怖いぞまだら呆け

舟渡杏花

暮らしには余裕が生まれてくる一方、豊か  
な高齢期の生活が出来るという保障もないで  
すが、呆けを武器とせず、川柳でも楽しんで  
愛される老人になりたいものです。

人間不信 回転ドアが出られない

岸 桂子

同じ発表句の中に、過去みんな水に流せば  
揃う足と詠んでおられます。回転ドアを抜け  
る時のコツは、足を揃えてからが勝負です。  
人間不信は人生を不愉快にします。明日は  
何をしようかと考える方が幸せです

投げる気はないが心に持つ小石

川島 颯云児

片手に幸福の冠を、もう片方には苦痛を、  
そして心には礫となる小石を持って、真剣に  
生きているという風に解釈していいでしょ  
うか。投げる気はないがと、大人の心も見せて  
頂きました。

泣ける時笑う夫と見るドラマ

亀岡 哲子

今はもう人類愛という夫婦

奥田 みつ子

頼りない腕でも組むと倍になる

清水 潮華

# 水煙抄

## 西田柳宏子選

河内長野市 大西文次

観客の拍手ラストの車椅子  
甘い顔した渋柿に騙される

漢方薬ごとこと土鍋煮こぼれる

虎飼育係が妻に飼育され

襖絵の虎に一瞬ぎよっとする

高槻市 江原秀夫

仕事から趣味に移ってゆく賀状

三ヶ日祝いを仕切る老妻元氣

暮しには触れずに親子屠蘇の酔い

三ヶ日酒にもあきてコココーラ

古い二人甘い屠蘇くむ家族の輪

今治市 野村清美

転げ落ちちびーポーに乗る不甲斐なさ

点滴を静かに受ける助け舟

労られながら感謝の寝正月

骨折も無く良かったと今思う

感無量水平線の陽を拝む

秋田県 湊修水

不景気に濡れ手で粟の助成金

もらうものもろうて策はあとまわし

不覚にももののけ姫に涙する

神さまに聞えるように鈴を振る

いつまでも待ちつづけます青い鳥

今治市 塩路よしみ

鈴振れば素直になれる初詣で

但し書きめがねにルーベ重ね読む

あっち向いてホイ いつもパー出す嘘がある

虎落笛背に聞く母は豆を煮る

さり気なく脱いで表情みせる足袋

伊丹市 樫谷郁子

茶髪の子パート張り切る十二月

玩具箱 会う日待ってる象キリン

独楽回し父さん威信取り戻し

幸を呼ぶ摘んだ四つ葉もセピア色

時よ止れ亡夫の手の跡硯箱

羽曳野市 芦田 絢子

内緒だと知らない友の留守電話

約束に触れずに届く年賀状

鬼の手の温さ失意をなぐさめる

便利なな車 不便だな車

振り袖の足もやっぱり外またで

大阪市 立 蔵 信 子

初対面もらわれてきた猫になる

首振ってさえぬ頭で考える

ハッピーな幕切ればかりつまらない

むきになる顔つき自分でもこわい

六百円豆腐と思うから高い

大阪市 一 本 勇 太

人生にだって切り取り線がある

原色に染まるものあり老いの無垢

みくびった雑魚にも骨のある強さ

晦日そば啜り第九聞いている

手袋の中で多情なくすり指

鳥取県 西 垣 美 知 子

家の窓心の窓も風通す

せいっぱい生きる両手を陽にかざす

塩分を気にして箸が迷いだす

忠告が妙菜となる母の釘

帰省の子客同様にもてなされ

尼崎市 森 安 夢之助

裏町の人情もろてひとり住む

心境の変化か嫁と手を結ぶ

将棋をさす時の素顔が面白い

流れ出る汗が本音を知っている

何方かなとんと名前が出てこない

海南省 谷 口 義 男

二枚舌うまい奴ほど出世する

川柳に老いの生きざま顔を出す

正論を置き去りにする多数決

出る杭を待ってましたと打ちに来る

遺書代り本音を綴る日記帳

尼崎市 田 辺 鹿 太

適量の酒はわたしの常備薬

黄昏れて脳の退化を自覚する

父ちゃんに夢を託している子供

実家より婚家がいと出来た嫁

長い目で見てくれという杉菜の子

横浜市 田 中 笑 子

フルムーン笑われてもと手を繋ぐ

クリームを塗るだけでよい母の艶

癌という友の笑顔に助けられ

夕食もチンチンチンと母は留守

それぞれに願いを変え七福神

大阪市 三浦千津子

嬉しさがつい喋らせる子の自慢

肩書がふと軽くなる酒を注ぎ

優しさは心を飾る光りもの

継ぎはぎで集めた夢も年をとり

受け売りの知恵でまさかを潜り抜け

岸和田市 亀井皎月

禿げ白髪ばかり大正クラス会

長らえて悲喜こもももの古希路行く

若者に翼がほしい時のあろ

ライバルに酒なら来いと何時も言え

妻が病み飯炊き洗濯皆覚え

唐津市 樋口輝夫

へソクリを可愛い口がママに告げ

単身赴任妻がスパイを差し向ける

親の出た方が泣き出す子の喧嘩

右顧左眄回し団扇で離党する

揚げ足を妻に取られて貝になる

富田林市 中井アキ

鉛筆を丸く削って待つ明日

腕組めば恋人らしい顔になる

つまずいた石にしっかりはげまされ

齢ひとつ重たくなって女坂

受話器からへっぴり腰が見えかくれ

和歌山市 松本良

この日本今さえ良けりやいい国か

同感の愚痴へ相槌高くなる

物分かり良すぎて疑念湧いてくる

銀行の危ない噂通夜の席

毛並みなど気にせず遊ぶ犬の群れ

鍋つつく十本の箸温い家 倉敷市 家守政子

初風呂がひとりぼっちで別府の湯

亡夫いつも心の中に住んでいる

これからが私の余生趣味の道

二十一世紀孫の行方をきつと見る

妻の目に怒られている電話口 京都府 前上英一

招待の席に踏み絵が置いてある

子へ繋ぐ亡父の語録を朱で囲む

雑魚は雑魚なりの意気地で今日も生き

肩の荷を下ろししまなざし丸くなる

羽曳野市 川田晋

投書欄出しても載ったことがない

税務署に行けば弱者の顔になる

土産屋で長い休憩バスツアー

脅しだと見くびった妻戻らない

預金から虎の子移す貸金庫

堺市 矢倉五月

横浜市 秋元可

一杯目だけは酌をしてあげる  
不器量な猫が私を離れない

高いびきかいてリモコン放さない  
もし仮にもしも仮にの話だけ

やけくそのように夜回り火の用心

鳥取市 岸本宏章

好き嫌いはつきりさせて敵つくり

線引きをするたび弱者締め出され

お祝いの包み本家の意地も入れ

顔を見てほっとするより腹が立ち

くつろいだ脳がコーヒー恋しがる

尼崎市 軸丸勝巳

脱皮する孫の賀状を読む炬燵

駅伝のドラマに酔った三ヶ日

加齢したほかは変らず年新た

老妻のお節ひと品新メニュー

虎の尾を踏まねば戻らない景気

富田林市 大橋鐘造

しとしとと雨の私語聞く昼下が

保護色で輪の中にあるアカンタレ

約束の小指がだんだん重くなる

柔らかな日差しにはずむ立話

過疎になり山紫水明蘇る

宇宙への夢はらませて奴唄

気安さの裏に重荷がついて来る

いい夢を見たくて枕買い替える

雪の降る子報へ少し買ひ溜める

雪道を綱渡りするハイヒール

大阪市 尾崎黄紅

雪の日に赤い服着て写ってる

落書の癖字自白をしてるよう

饒舌なおんなの好きないなり鱈

涎掛け赤い地藏に首がない

老いてなお賀状のふえるありがたし

岡山県 国米きくゑ

バブル消え神話の森に雪積る

愛と憎背負うて登る女坂

合掌は心の扉開く鍵

心の窓開けて初春の風を入れ

挨拶の印見栄を上乗せし

兵庫県 西山八重子

人は皆やさしきものよ夕焼ける

窓ガラス拭けば償い晴れるかも

満ち足りぬひととき謀叛考える

吐く息の白さに今日も生きている

愛の糸もつれて解けぬわだかまり

寢屋川市 井上 すみれ

交通の守り札だけみやげにす

言い負けて今日は安らぎ床につく

おしゃべりが俄かに変わる失語症

明治の灯また一つ消え椿落つ

鳥取市 近藤 佳子

あすなろの夢は天まで伸びてゆく

野仏に涙あずけて明日に賭け

極楽は信じる友と無駄話

寅の威を少し借りたい気の細り

米子市 小塩 智加恵

本年も妻の舵とる船に乗る

愛してる聞けずに終るこの一生

ありったけ小銭を投げる孫入試

週刊誌五冊枕に寝正月

宝塚市 飯西 ミサヲ

仏にも鬼にも会って年暮れる

簡単に死んでたまるか百までは

真剣に怒ってくれる友がいて

道しるべ倒れてなおも天を指す

横浜市 生坂 サト子

寒空につばみ寄り添う沈丁花

初詣で祈願残しを思い出す

根気よく値切った盆栽持て余し

少しずつずれが気になる世間並

鳥根県 福岡 博利

山茶花の暴れ狂ったように散り

まだ死ぬと思わないからケンカする

胸襟を開けっぱなしの同窓会

男です朝大股でゴミを出し

横浜市 川島 良子

息子から初めてもらう年賀状

地酒提げ息子赴任地から戻る

心配のタネがあるから頑張れる

絵手紙を日記代りに書いてます

鳥根県 武島 ちよえ

新しい茶碗に替えて誕生日

ハミングが背なの荷物を軽くする

あちら立てこちらも立てたい痩せ蛙

そのあげく国民の金当てにする

横浜市 三村 八重子

出勤の鎧へアイロン効かしく

縄梯子登りきつたら降りられぬ

掛時計退屈そうに三時うつ

帰りには甘酒のんで初詣で

尼崎市 古川 正子

若水やひとりに慣れて雑煮餅

旅の帰途街のあかりにほっとする

若さ漲る鏡獅子舞う勘九郎

松島屋声がとびます襲名披露

安売りの大根抱え乗るタクシ— 高槻市 左右田 泰 雄

一袋七十円の草津の湯

しきたりが欠伸している寝正月

しわしわの手でも握れば若返る

鳴門市 八 木 芳 水

終点のある旅だから前をゆく

やさしさの裏にも鬼の面があり

初荷から港の四季が動きだす

ハイテクの街に雲水の托鉢

泉佐野市 稲 葉 洋

停年と呼ぼう遺影は若いまま

一条の轍となった夫婦道

余ったり足らなかつたり寡夫の家事

何処という取柄もないが気が合つて

唐津市 井 上 勝 視

喜んでいいはずなのに子の巣立ち

天衣無縫どこも死角が見当らぬ

五体満足この幸せは棚にあげ

ブランドに弱く偽物ばかり買い

倉吉市 大 下 智 子

乾杯をしたが訳など知らぬまま

やんちゃな子 仏の前で手を合わす

手を握り深い喜び確かめる

母さんに今日の出来事全部言う

招かざる客が座って弾む宴

雪に耐え蝶が羽化する春一番

銅鏡に輝く文字が喋りだし

分娩室門出を祝う呱呱の声

伊丹市 延寿庵 野 鶴

さくら咲く頃に死ねたらなと思つ

我が儘が一人歩きをする余生

この歳でまだ衰えぬ好奇心

犬にまでチャンチャコ着せている過保護

愛媛県 安 野 案山子

計算の出来る男に落し穴

荒れ狂う海へ休まぬ渡海船

親友に貰った風邪で年を越す

友達が沢山できた医者通い

札幌市 三 浦 強 一

黒い金摺んだことのないこの手

孫の顔見て母が折れ父が折れ

病院も寺も歩いて行ける距離

北海道を食べようというバスツアー

今治市 越 智 青 園

直筆の賀状がぬくい顔をする

伸び切った輪ゴム弱味をさらけ出し

エンジンがすぐにかからぬ寝正月

生き下手で人の後ろへついて行く

愛媛県 黒田茂代

月冴えて昼間の傷が疼き出す  
友禅の小物を土産加賀の旅  
海岸線バスと一緒に島も駆け  
土とただ対話無心に土を捏ね

岸和田市 不破仁緑

病気せず怪我せず除夜の鐘を聞く

願い事聞えぬ神に掌を合わす

寝て起きて飲んで正月はや三日

冷水が何より旨い初仕事

尼崎市 的場十四郎

任しなと親を励ます子の温み

たっぷりと貯めた男は喋らない

七転び八起きで人情深さしる

定年のあてない朝も髭は剃り

静岡市 増田扶美

後悔を一気に流す水を飲む

行革へ熱い願いの年あける

ランドセル母の願いの鈴ひびく

少しならよいと名医の良い台詞

高知県 百田幸

先生と呼ばれ何かが欠けている

半分の器に無理に詰めたとして

せつがちでエスカレーター駆けあがる

激流も幾度かあった夫婦舟

堺市 梶本哲平

呼び水に屠蘇解禁の祝い酒  
喜寿傘寿卒寿小朝に会うまでは  
虎の尾を踏む思いして凍てる坂  
第一番大吉を引く初詣で

尾張旭市 三浦きぬ

一人居にも正月が来る気忙しき

寺の子もプレゼント待つクリスマス

掃き溜めに鶴と言われた嫁が去り

銀行もタンス預金か貸し渋り

東大阪市 北村賢子

わが人生わたくしだけは褒めてやる

憤り胸におさめて貝になる

声聞けば再び燃えてくる火種

故郷は同じ顔した山や川

八尾市 山本宏

血圧も若いナースに和まされ

寂しきは年毎ふえる喪のハガキ

ふりかえる通った道は花ざかり

不器用な母さんの針愛をぬう

和泉市 横山捷也

定年の手帳空白うまらない

父が逝く米寿の子定たててから

送別の酌に無言のぐちをつぐ

早朝のベンチ私の指定席

松江市 山根邦代

東大阪市 今岡真人

新世帯案ずることもないらしい  
別居して心静かで恙無い

新党が生まれて消えてまた生まれ

東京は動きのとれぬ雪が降る

羽曳野市 西村りつえ

こころ開くように蕾が笑いだし

ライバルに隠れて研いだ爪が折れ

万国のグルメに勝るさげ茶漬

日陰でも大きく咲くと炎えている

東京都 清原悦子

逆らわぬ妻で結婚二十年

物も増え庭木もふえて老いの家

人の事言ってる内は元気です

パスポート持たぬ私は趣味で生き

兵庫県 仲井素水

何よりの妻の遺産の独りっ子

お鏡も小き目にする独りぼち

明けましてお芽出たいやら寂しやら

願いごと山ほど賽銭出し惜しみ

兵庫県 倉垣恵美

大相撲和服の麗人ばかり見る

てくてくと腕章付けてごみ拾い

医科大の表示が効いた風邪ぐすり

自画自賛腰はまがったまががいい

労いの言葉をかけて夕餉の膳

聴き上手愚痴を寝言と聞いてやる

墓洗い尽くせなかつた詫びを言う

みな何か競い合ってる十二月

大阪市 榎本日出子

おちよこから次々本音こぼれ出す

鬼瓦時々こちら見て笑う

割勘のなべにわり箸絡み合う

鍋囲み湯気の中から聞く本音

綾部市 藤田芳郎

院長が元の頑固にしてくれる

票になる田へ引く水は涸らさない

群れに居て弥陀の言葉を聞き漏らす

詳しくは知らぬが夜に引越車

今治市 渡辺南奉

神様に僕の誠意が届かない

暦繰るああ悲しい日楽しい日

健康へ感謝熟睡からさめる

ない袖を振ってとにかくお正月

羽曳野市 森田四三郎

寝正月窓に差し込む陽が憎し

よい事もきつとあるよと千支の寅

不況かと問えば首振る張子寅

香港の風邪まで旅のおみやげに

富田林市 藤田泰子

道連れも進入禁止の道が好き

藁摺む思いで据える千年灸

愛憎を風化させつつ千支巡る

温暖化雪は尊いものとなる

河内長野市 水谷笙子

正月のテレビ歌舞伎の棧敷席

誕生日パーのママだけ覚えてた

福娘母子二代も微笑まし

肝心の話忘れた長電話

和歌山市 水田秀男

自画像を描けぬままに五十代

日本を不安げに見る冬の月

温暖化真冬につつじ咲いている

気がつくと曲っています腰と背

米子市 門脇晶子

炊きたたのご飯がうまい働ける

大陸をつなぐ神話の持つ流れ

堀をして隣と隙間出来てくる

終焉を楽にと思う冬の暮れ

島根県 松本聖子

運勢欄見てから今日も靴を履く

泣きそうな時は夫の胸を借り

古里へ戻った息子の高いびき

花瓶からぼとりと落ちた花ざかり

横浜市 岡田芳江

留守電に一人芝居の声届く

初雪にハハハと笑う靴の跡

コンビニの近くへ子供自立する

年輪に積んだ苦勞が刻まれる

出雲市 川島和歌子

貰い物賞味期限を追ってる目

初土俵目と目が合って闘志燃え

歳の暮れ蟹サボテンの赤い花

馬拉ソンに意地と誇りを賭けた春

日立市 加藤権悟

誓詞いま愛がひとつになる門出

馬齢なお回り続ける夫婦独楽

大鳥居そこから春の風になる

この先も走り続ける縄電車

和歌山市 上地忍

定年後家事一切を引き受ける

下り坂めつきり増えたメモ用紙

不用品捨てれば広がるものを

ばあちゃんは帰りそびれた蚊と遊ぶ

八尾市 井尻民子

うつろいの豊かな自然深呼吸

集団に属することのむずかしさ

消しゴムで消したい悔いの過去ばかり

意地悪に三倍返し考える

八尾市 平川幸枝

神妙にお供の犬も拝んでる  
ほどほどに元気な人とウマが合う

爽やかに病振り切る鈴鳴らす  
片頬に飴のとけゆく除夜の鐘

香川県 向山治延

後や先蝶も道づれ春遍路

借景をこわして通る高速道

家の内気持豊かに丸く住む

海峡を車で渡る御世となり

鳥取市 山本崇

寅年の運を試して福袋

大杯を一気に呑んで黒田節

時々に戦地の夢に起される

初日燃え今年いい事ありそうな

大阪市 岡本久峰

頭でつかちひ弱な孫をはがゆがり

太鼓橋足が震えて回り道

パソコンに憑かれた女医の年賀状

ひとかどの世事を論じて帰る孫

和歌山市 森口美羽

定位置で母が結んでいる絆

本音吐くたびわたくしを脱いでいく

新聞を開くと朝が動き出す

集まれば酒のさかなにされている

鳥取県 近藤春恵

米びつを満たして主婦の座をゆずる  
定退へ老化がしのび足で来る

下積みの夫を励ます靴みがく  
古稀迎え女を捨てぬ紅をひく

京都市 勝山美千代

なりふりを構わず駆けて喜寿の坂

辛抱の棒と仲よく家平和

托鉢の素足の僧に寒い朝

七草のぬくもり残し春を待つ

鳥取市 富山雄幸

母の背を拝む子育て和が弾む

やさしくて無口が魅力妻に酔う

綻びた袋に妻が夢詰める

共白髪この温もりで福と棲む

兵庫県 安達厚

うるさいが慣らされてきた五十年

良田にコスモス香る農寂し

豊作の取入れ終えて離農する

飛びぬけた芸はないけど多趣味です

横浜市 長島亜希子

登り坂三步遅れてついていく

どこにでもある土産が買ってくる

遺影にも使える写真撮っておく

公的融資やはり大樹の陰に寄る

池田市 木村一 笛  
人妻が羽ばたいているクラス会

腹割って話した積り無視される

初夢を二度見たというお爺ちゃん

高槻市 小林一 閑

四十七回今年も続く戦友会

冬期五輪皇后様が寒かろう

再発するまでの平穏楽しもう

和歌山市 吉村さち子

二十一世紀の地震らしい震度三(元且和歌山地震)

好感をもてば仁王の目もやさし

明日という的に明かりを絶やささない

寝屋川市 角野仁 清

七転八倒スルメは無念そうに焼け

切り口をもう一度切る売れ残り

反抗はやめた親父の背がまるい

河内長野市 木太久 正 一

娘の書掛軸にして床の間に

窓硝子拭いて一年過ぎていき

元日の妻先に起き薄化粧

千葉県 大川 晩 翠

千円で奉納瓦名前書く

さあ今日も怪我はなかった仕事した

水性のペンキで心青く塗る

東大阪市 松山 隆  
一坪の湯加減嬉し桃源郷

糞虫の器用に生きる家づくり

色褪せたカーペットの染み過去一つ

横浜市 福田 由美子

神様に数歩近づくと初詣で

パソコンがうてますという年賀状

黒豆のしわも許せる母の味

羽曳野市 山本 たけし

飢えた過去忘れ豊かな今日の愚痴

軍事費を削る事なく伐る福祉

生きのびる手立て求めて医者通い

和歌山市 上地 登美代

朝一番今日どこ痛いかと聞かれ

鼻歌が聞えて妻の目が笑う

静寂を荒らして回る猫の恋

高知市 桑名 知華子

丸くなれ丸くなつてと阿弥陀の目

許すことばかりの母の丸い背よ

失敗を今日も庇うてくれる声

愛媛県 宮本 末子

春愁や時々不整脈も打つ

男には無邪気になれる酒がある

この町も女ばかりが生き残る

神戸市 船津 とみ子

小さい欲で火傷せぬよう珈琲飲む

ストーブが温いはがきを書いている

真夜中の読書となつて灯消す

横浜市 金森 徳三

外面が良過ぎ内づらしぶい国

寝過ぎして元日夕日に手を合わす

暮れのうち手品覚えておくつもり

鳥取市 近藤 秋星

降る雪はみんな長野へ贈りたし

追っ払うすべなき寒波に居座られ

寒中げいこ見ている方が震えてる

八尾市 田中 トシエ

朝刊がチラシを重く抱いている

辞書にない言葉勝手にやり出す

引越しをしたこと知らぬ庭の梅

大阪市 中澤 孝子

丁重な挨拶わたし苦手です

年齢少し若く言われて声弾む

新札はへソクリ用にとつておく

大阪市 平井 露芳

一円になるとも知らず買った株

ルミナリエ神戸の星をゼロにする

後ろ髪引かれる思いの髪がない

富田林市 山原 昭水

満天の星だ亡父いる亡母がいる

仲がよすぎときどき派手に喧嘩する

幼稚園兎も亀もお友達

八尾市 與田 明

夢を追い鉄砲玉はいつたきり

買ったまま読まず聴かないまま忘れ

まだ続く弱者いじめの低金利

糧原市 西本 保夫

痛む足杖はつかない初詣で

おみくじも眼鏡忘れて来て読めぬ

出店みななのぞいてうれし初詣で

兵庫県 大谷 幸次郎

先のこと傘寿祝つてからにする

寒に雪降つて世間がうろたえる

明け残る月が清楚に見える朝

八尾市 鷺見 章

たいくつでおんなじ歌をくり返す

老人が幼児になつて子に甘え

辛抱とがまんに涙あふれでる

和歌山市 木村 親路

誕生石妻には買ったことがない

相続は遺産と介護抱きあわせ

妻の客余計な知恵を置いていき

横濱市 荒井広和  
洗脳をテレビにされるグルメ族

反抗の独楽が頭を振り続け  
貯めた金上手に使う子に育て

八王子市 播本充子

善人の振りして歯切れ悪くなる  
生真面目に付いてつまらぬ役ばかり  
失言もない大臣で頼りない

高知市 細木子龍

直線でないから物が言い易い  
それぞれの知恵で生きてる井の蛙  
ストライクゾーンの中にある主張

大阪府 奥野義夫

舶来の何とか言う花が好き  
同姓でいいよと妻の割烹着  
赤とんぼ人の気配で飛んで秋

藤井寺市 岸本寿代

人恋し里恋し日々冬の夜  
藻にかくれじっと春待つ金魚たち  
畔道で春を見つけたつくしの子

香川県 神保坊太郎

正論を吐けば稚いなと言われ  
今にして棘を抜かれたのに気づき  
年金を齧る子ねずみ来て嬉し

鳥取県 山内芳江  
智恵を貸す親の心を煙たがる

不況風どこ吹く風とツアー客  
松風呂殿様気分旅の宿

西宮市 井上俊二

落葉ふむ足音ぬくし老い二人  
元日の電話にもろた初笑い  
それぞれの暮しがあつてしめ飾り

鳥取市 有沢せつ子

ぼた餅を囲み姉妹がよくしゃべる  
春の陽に人の挨拶軽くなる  
非常用リュックにちりが積りだす

横濱市 保田絹子

新米の母をかばうか無垢の笑み  
白銀の富士も応援駅伝日  
気負っても夕べ侘びしい妻の留守

横濱市 鈴江純子

茅葺きの屋根ふるさとも春を待つ  
留守電が知らぬお人の礼を受け  
春の陽を浴びようしゃんと背を伸ばし

大阪府 米澤俣子

中味より当り欲しさに買った飴  
鈴つけた猫がハントに出る夕べ  
糠床に馴染んで出来た家の味

賽銭箱の中も舞ってる不況風

米子市 猪森 スミエ

寄り添って枯れ葉ひそひそ無人駅  
舞い下りる幸せ止まれこの指に

島根県 菅田 かつ子

大あくびしてから虎は起きあがり

物置ききの芋をねずみがみんな食べ

伸びきってセーター疲れがもどらない

松江市 松浦 登志子

残された母の楽しみ娘の電話

大雪を静かな気持ちで受け入れる

伝えたい怠けることの大きさを

箕面市 出口 セツ子

不況増税耐えるだけしかない庶民

沖繩の悲しみ秘めて散る桜

強がり風呂場で独り吐く弱音

横浜市 近藤 道子

とろとろと豆煮るわたし幸せよ

定年の日から夫婦の散歩する

ユーモアの達者な友が逝って雪

愛媛県 中居 善信

と金にも成れず玉砕してしまっ

銀行に笑顔が消えたので不安

るんるんでうっかりしてた王手飛車

安定剤飲み初夢も見ず眠る

益田市 岡田 たけを

滾るもの抱いて焦らず生きている

屠蘇を酌む雨の伴奏聞きながら

尼崎市 野瀬 昌子

被災地へやっとな賀状が書けました

素顔では行けない家も二三軒

自由でしよたった一言茶髪の子

大阪市 杉澤 汀

飛びこえてみたい広さの水溜り

若人の汗と涙が散るトライ

タックルに火花散らした青春譜

尼崎市 清水 久美子

三が日開店休業した頭脳

いそいそと拾ったテレカ使用済み

福娘見たさに笹を買ってみる

尼崎市 立谷 勇次郎

平和の日続けと願う初日の出

七十五まだまだ若いと暗示かけ

一言でころりと変る単細胞

横浜市 福島 かつ子

三ヶ日やっぱりわたし主婦してる

夫より早く起きまい三ヶ日

正月は孫が侵略するわが家

鳥取県 岸 本 孝 子

寅年の息子にかける夢がある  
チヨコ二杯ごはんおいしくしてくれる

田舎でもおいしい水を買つてのみ

兵庫県 高 見 末 野

そわそわと年始に出て行く朝の靴

占いを信じてはずむお賽銭

耳鳴りと共に聞こえる春の音

鳥取市 福 田 登 美

七草粥はらわたに沁む老いの朝

文机に部厚い辞書は冬ごもり

細雪かぶり山茶花散り急ぐ

尼崎市 小 川 富 江

舞遊ぶ落葉シャンソン唄つてる

好景気なるまでしぶとく生きのびる

不景気に招き猫の手下げられず

北九州市 岡 田 幸 生

これからがラッキーセブン古希樂し

足裏の胼胝が拗ねてる万歩計

山紅葉眺めて茶髪赦す気に

鳥取市 山 本 益 子

野仏に軽い会釈を心がけ

ユニークな祝電を打つ独り言

照れ臭く笑う顔見るいい予感

横浜市 山 梨 雅 子

がん制覇した退院に湧く拍手  
主婦の座も定年ほしい台所

銀行で経済論をぶつてくる

兵庫県 井 上 信 子

お見合いの食うに困らぬ黒子あり

千里行く虎に負けずに歩きます

雑煮膳我が家の伝統守り継ぐ

尼崎市 河 津 正 治

鍵っ子の母待ちわびる路地の暮れ

内緒だとたつぷり愚痴を聞かされる

穏やかな顔でたつぷり小言いう

出雲市 岡 あ き ら

若水を汲んで今年が動きだす

元旦へ暮らしの染みた日章旗

切り干しの耐えた寒さを噛みしめる

尼崎市 内 田 美 也 子

凧揚げの父子と遊ぶ初春の風

ひとり往く道にも初日燦々と

日脚のび冬木も少し伸びをする

東京都 井 上 つ よ し

寅年の賀状は濃ゆくたく書く

かくしゃくと欲も希望もまだ捨てず

清貧と愚直気が合うなわのれん

年ごとに女の歩幅広くなる

京都市 高島 啓子

私もと思うとラッシュでも乗れる

初詣で夫婦それぞれ願い持ち

大阪市 小泉 久子

お土産の塩外国産という赤穂

肩書きの消えた名刺は忘れられ  
良く笑う人と道づればバス旅行

大阪府 団野 つね子

初夢に七福神の波の音

札入れは診察券が増えただけ

兵庫県 西川 一 繁

懸命に生きて八十路の波に乗り

お年寄りなどと敬語で老けさせる  
いじめにも耐えて少年卒業す

今治市 村上 久美子

ニンゲンは冷めて地球の温暖化

病める妻握るたんびに力でのる

香川県 松村 輝夫

正直な舌はそんなに滑らない

金遣い儲けの口は案ばかり

今治市 渡邊 伊津志

空まわりする優しさをもてあまし

勇敢な兄貴の分も余計生き

滋賀県 中 宗 明

反抗期過ぎると海も風いで来る

妻なんか恐くないよと虚勢張り  
カラオケは健康的と妻誘い

倉吉市 山中 康子

古稀迎えいろいろ苦楽なつかしむ

新春の雪東京をてこずらせ

過ちを許して虎落笛を聴く

横浜市 山下 省子

かけひきの下手な夫に人情味

ゴメンネと児の瞳には書いてある

和歌山市 武本 碧

味噌汁の具沢山にも安堵する

賞味期限を気付かぬ振りて料理する

横浜市 豊田 羊子

細くとも根を張る母の心意気

スーパーで七草摘んで粥を炊く

五歳児の群れの中にもある序列

雑踏の中で奇遇の人を止め  
都会では少々黒い雪だるま

鳥取県 加藤 公子  
捨て犬を飼って余生を散歩する

暖冬に梅満開し墓地飾る  
教え子の春輝きの便り読む

北海道 中里 つね一

連休の朝孫がふとんに潜って来

大胆な余生の構図いま八十路

大安を気にする妻の旅支度

豊中市 岸 田 知香子

遠く来て博多の宮でお神酒受け

独身の我が城気儘ごみの山

籠の鳥店の顔です二十年

島根県 加藤 要子

おはようと返す夫あり今日の幸

絵手紙がことりポストに春はこぶ

嫁姑どちらの肩も持てぬ僕

泉佐野市 大工 静子

岩田帯強さ弱さも母心

不意打ちに靈感じみた娘を信じ

冬至明け海老のほこほど日が延びる

和歌山市 岡 本 八重子

下草刈り根っから山の好きな父

熊野古道拾った栗の大きいこと

仏壇で先祖と会話一しきり

静岡市 中西 雅  
退院の朝がゆ何とうまいこと  
灯明にうつる遺影の明るすぎ  
先立つをわびつつ息子黄泉の旅

横浜市 明 渡 トヨ子

病室で生きたドラマを聞きました

労働が当然だった青春期

帰るはずないが気になる靴の音

兵庫県 植 村 雄太郎

ライトアップ地球が不眠症になる

休肝をするほど酒を飲んでない

倒産の続編があるビッグバン

新宮市 橋 爪 五 雄

私にも心臓がある動いている

席一つ遠慮し合って座られず

鏡置き二倍にみせる小商い

東大阪市 谷 口 義

銀行も危ない橋を渡ってる

冗談の通じぬ妻といるホテル

今日やめる会社の窓を拭いて出る

和歌山市 和 田 美寿子

善人の仮面を付けてうそを言う

口裏を合せて友と語る宵

趣味増えて年賀葉書を買ひ添える

横浜市 伊藤ふみ

百歳が電波に乗って夢をくれ

見つめられついに買い込む達磨市

山登りジグザグ道をのんびりと

島根県 槻谷 伸子

大根の煮染めも冬の風物詩

駐車場時代の流れに変わる町

冬越しの枯木芽を抱く春日和

和歌山県 坂東和代

シナリオがなくて演じた五十年

ツーカーで話通じる友がいる

起爆薬一つ位は持っている

羽曳野市 三好 専平

婆さんが一人打ってるパチンコ屋

べたべたとしない心が暖かい

消費税取らない店がよくはやり

藤井寺市 太田 扶美代

隅っこで一人よがりをしてしまう

大根コトコトとても上手に人を呼ぶ

人間の中で人間恋いつづけ

川崎市 和泉 見早子

押し鮎が出て女客座り替え

晴れた日は少しおどけた妻になり

売り家の庭で柿の実熟れている

和歌山県 中村 君枝

効果あり信じて飲んだ置き薬

夢の中しっかりせよと亡義母の顔

背丈だけ伸びて文化も洋風化

唐津市 宗 弘

ゆっくりと老いるに忙し世のテンポ

温暖化つららの朝が懐かしい

ほんやりと過した日にも三度食い

高知県 桑名 孝雄

日の丸がすっかりせよと不機嫌だ

さむらいの気質でうしろ振り向かぬ

正は正 邪は邪というて嫌われる

横浜市 北沢 街湖

日だまりで猫は朝から大欠伸

茎の背に春を待つ芽がしがみつ

程々の程がなかなか決められず

大阪市 星野 ひさ

長ばなし鍋の煙が呼びにくる

茶髪の子老いの手助けやるやんか

ゴキブリの冬眠さます大掃除

大阪市 中井 正秀

早死の父の分まで生きてやる

いか焼の美味しい臭いで後戻り

店繁じょう妻が支えた屋台骨

梅一枝手折り身近に春を置く  
冬の月橋行く人の上にある  
尼崎市 松下 比ろ志

葉書の字喜怒哀楽をもの語る  
尺八の第九を聞いた年の暮れ  
交野市 山川 日出子

カルタ取り本気で孫に敗けている  
あたたかい夢を見たくて布団干す  
羽曳野市 安芸田 泰子

便利だがカードに地獄みてしまう  
師走の街携帯電話闊歩する  
大阪府 澤田 和重

今さらに何故にこだわる傷の過去  
冷や飯を二人で分ける野良多忙  
和歌山県 村中 悦男

物申す方で可愛くない自分  
空港に来れば心は何時も春  
沖繩県 杉谷 カズエ

世界平和目指して聖火受け継がれ  
冴えわたる三日月に幸無事祈る  
鳥取県 高尾 京

雑踏の中で人情拾て来る  
あいまいに笑って負けぬ妻の知恵  
兵庫県 北川 とみ子

家計簿はまだ消費税妥協せず  
嫁の名もすらりと書いて祝う箸  
兵庫県 緒方 美津子

酔ってない一人ブツブツ千鳥足  
見送って駅にたたずむ小さい母  
大阪府 井上 千代子

鳶鷹の孫にちよっぴり期待する  
指さきも慈悲のかたちの百済仏  
寝屋川市 瀧本 八十八

思い出を辿り辿りの賀状書き  
手に汗を握る夫の試運転  
横浜市 平 達也

虎の子も低利子の世で太らない  
小旅行棚田きちんと管理され  
鳥取県 國森 武子

十センチの雪に都会の救急車  
携帯を貰うて困る通話料  
新潟県 高野 不二

自動ドア私に戻る風が舞う  
隅っこにそっと座って義理はたす  
吹田市 西岡 豊

背広着て靴音かるく子の帰省  
新世紀のぞく米寿へプラン練る  
福岡県 本田 忠男

八王子市 井上京一郎  
雑草の強さつくづく知る軍手  
はや飽きた健康器具の置きどころ

河内長野市 妹背 尽呂久

船頭が多くて舟が座礁する  
ペットの毛を丁寧に梳く無精髭

和歌山県 中後清史

振り返る節目節目の綱渡り  
子育ての頃は良かった風通し

米子市 大野蒼流

最後まで王手を見せぬふところ手  
どこまでが嘘か本音かボールペン

鳥取市 宮脇道子

早春賦軽く生きたく口ずさむ  
大寒に渴く老後をお洒落する

河内長野市 印藤智子

ゆず風呂に私の体まだ若い  
餅焼いて夫と二人の小正月

川西市 田中喜俊

賀状だけ交わして友をなつかしむ  
昔とったカルタ孫にはまだまけぬ

鳥取県 山本正光

善良な友達みなの手が温い  
引き出しの中でねていた夫婦愛

松江市 浦辺静江  
紅白のもくれんそつと頬笑んだ  
有意義に年金使う老い二人

豊中市 宇野義江

キモノ着て歩く姿に母を見る  
しあわせが春に来るか待ち侘びる

静岡市 大村正雄

体力のことは忘れた予定表  
ダイエット荷物も持てぬ娘をつくり

出雲市 加藤スズコ

松の内故郷を彩る雑煮餅  
宝籤家族十二の目が光る

枚方市 寺川弘一

温もると待つてましたと痒くなる  
保釈金聞いても一度憎くなる

高槻市 執行稲子

お舅の機嫌がわかる咳の数  
アニメの子夕焼けこやけなど知らぬ

岡山市 土居ひでの

築城四百年仲間意識の盛り上がり  
北へ向く雪解けを待つ鶴の舞い

兵庫県 森脇和子

糸切れて方向音痴になった風  
核家族昔ばなしが遠くなる

羽曳野市 徳山みつこ  
里芋がほっこり炊けた日のゆとり  
手洗いへ父が待ってる私の手

和歌山市 福重美子

お互いに我慢してます夫婦道  
餅焼いて訪う人もなしティータム

今治市 中村好恵

人の役に立つ幸せに気づかない  
勝利より平和を祈る母である

吹田市 有田加寿老

健康が大事と今日も吞んでいる

島根県 谷岡ふみ

終着駅に下りずに又も折返し  
春耕の鍬先カエル跳んで逃げ

横浜市 布山嘉信

年の暮れ手押車も走らされ  
建て前は内需拡大貸し渋る

岡山市 清水金太郎

不況だと思ってるゴミの収集車  
正月の休み明け待つ医者通い

唐津市 岩崎實

大寒の固い冬芽の雪かぶり  
即席の料理独身増やしゆく

鳥取県 橋谷静江  
何度でも行きたくなって古都の旅  
身に覚えあつて小声になる相談

三重県 佐々木森哉  
老いの身に頑固な骨はまだ達者  
僕の背を見守る神はまだ無言

尼崎市 中澤向西  
ご年始にもじもじしてるお年玉  
ありがたやシルバー席が空いている

尼崎市 尾宮弘治  
叱ったり褒めたり孫の滑り台  
妻が居て蛇口キッチンと締ってる

枚方市 大昇隆広  
何度でも起きるダルマに腹も立ち  
貧困に見える地の人いい笑顔

松江市 松本知恵子  
暖冬に慣れて慌てる雪の朝  
晴れのちくもり試行錯誤をくり返す

兵庫県 中野とよ子  
舌つづみ打ってゆっくり夫婦箸  
片田舎騒がれながら赤い服

鳥取県 藤山弘子  
ストレスをバーゲンセール忘れさせ  
保育所できねで餅つくもみじの手

死にたいと言って薬の買いあさり  
死ぬまでにもう何本の忘れ傘

八尾市 高橋明子

姫路市 服部一典

弱点を握った妻は武器にする  
ダム底へ叫べば応える村の声

鳥取県 原みさを

足組んでコメンテーターよく切れる  
窓ぎわの少し黄ばんだ生き字引

大阪狭山市 伊藤尚子

花びらを重ねて強し寒椿  
法話聞く神のお告げのように聞く

出雲市 梅ミツエ

山茶花のまっかな色に今朝の露  
ふるさとはいつも心の中にある

熊本県 増田一乗

死期近い祖母へお札の子守歌  
素人には億とは見えぬ骨董品

砂川市 武田正美

生き生きて長寿の日々の有難味  
明日の日へ楽しみを抱く趣味ひとつ

守口市 石森利昭

お茶済んで暇持て余す冬の午後  
ぬくぬくと大阪弁を交わす朝

シルバーマーク着けたぞイチヤモンつけるなよ  
ドライブに打ってつけなり作務衣着る

豊中市 みき わきみ  
吹田市 野下之男

黒子まで美しい顔引き立てる  
もう七十まだ七十で明日がある

米子市 池尾保子

靴下を穿かせる妻のおもいやり  
長男を呼べば二男が拗ねている

兵庫県 徳平毬子

寝つかれぬ夜は隣が高いびき  
おみくじの吉にかけたい初詣で

鳥取市 谷岡清子

明けまして年に一度のてれた顔  
元旦に土地なまり飛ぶ福笑い

枚方市 二宮紫鳳

初詣で神頼みして軽くなり  
正月はダイエットの字忘れとこ

生駒市 半澤無眼子

やっとこさ隠し文字を拾い上げ  
後八年ムシもケモノも頼濡らす

おことわり ■ 2月号 || P 58 (水煙抄) 上段1句目 「新世紀に

似合う仮面を彫っている」を本人の申し出により削除します。

# 沙湖抄

## 八木千代選

女には髪振り乱す髪がある

外出着するりとわたし入れかわる

石橋を叩いて石にだまされる

よんどころなく風に絮毛の旅つづく

サル山の猿ならもつと潔い

ここに石大きな音で打っておく

軸足をかえてずうつと立ったまま

むき合えばどちらかが持つ紙礫

冬野菜ほのかに甘し母はなし

仲よし小よし誰かが無理をしていぬか

悪人を自称一つの自惚れか

荒波よどこまで連れてゆくつもり

酒ちびり虎に寝返るのも芸だ

冬木立 裸になれば生き易い

風渡る枯野は平伏すばかりなり

ほどほどの不幸は神のおぼしめし

雑兵がぎっしり暖かいみかん箱

茹で卵あなたは何時の世も偉い

烏は黒 誰が変えたりするもんか

時々は老いにさからい火傷する

海南市 三宅 保州

東京都 佐藤 季穎

倉敷市 小野 克枝

米子市 林 瑞枝

和歌山市 川上 大輪

愛媛県 中居 善信

羽曳野市 徳山みつこ

米子市 政岡日枝子

和歌山市 木本 朱夏

島根県 松本 文子

砂川市 大橋 政良

米子市 茂理 高代

鳥取県 鈴木 公弘

河内長野市 水谷 笙子

米子市 林 荒介

藤井寺市 高田美代子

八尾市 高橋 夕花

和歌山市 川上 富湖

松原市 小池しげお

米子市 青戸 田鶴

響かせていたくて右往左往する

敢えて問う あじさい寺の雪景色

定型の暮らしの下五降り止まず

習慣か鎮静剤のペンを取る

絵日記の終わりに赤いハイヒール

早送り何時も私は無視される

なんてまたホテルの部屋にある聖書

大屋根が老けて疑い深くなる

味方から煽られている 襖

滝壺の深さと思う命とや

鼻にきこえた風の着い音

撃つ真似で死んでしまった恋人よ

幸せで少し窮屈 比翼塚

基礎体温つけた日もあり花暦

欠点を隠すとわたしでない私

発汗作用とめてみているラブシーン

無記名の危ない橋が掛けられる

つむじ風へ今は素直に礼を言う

薬一本掴みそこねてからの指

振り向けば広い原野に影も無い

少し慣れて見えない壁が見えて来た

妻は匠で大根を干に切る

包丁は母の奏でる楽器かも

風邪を引いて身の隅々が干涸びる

体温を比べあつてる老いふたり

針山が黙って針の愚痴を聞く

寝屋川市 森 茜

尼崎市 田辺 鹿太

西宮市 牧瀬富喜子

和歌山市 桜井 千秀

富田林市 池 森子

出雲市 園山多賀子

大阪市 榎本 落児

米子市 門脇 晶子

富田林市 中井 アキ

岡山県 小林 妻子

和歌山市 野々 圭子

川崎市 和泉見早子

西宮市 奥田みつ子

弘前市 肥後和香子

高槻市 川島諷云児

松江市 川本 畔

鳥取県 西川 和子

米子市 野坂 なみ

京都市 松川 杜的

弘前市 一戸 ツネ

大阪市 渡部さと美

吹田市 山本希久子

鳥取市 岸本 孝子

尼崎市 春城 年代

西宮市 門谷たず子

米子市 石垣 花子

空気にも限りがあるか深呼吸  
竹藪で風の戯言きいている

生返事 もう喧嘩にもならず

自由すぎて飛べなくなつて来た翼  
浄土行き特急座席指定券

実家が実家がと嫁の口癖胃に溜まる

これからの地図はだんだん狭くなる

心配はすまい春には春の花

句読点打とうよ息が続かない

水音がいつも枕にある実家

枕木もないとレールが敷かれぬ

紙ナイフ人の気配を感じとる

不器用に靴ひもなんか結ぶから

油断しているから爪が伸びて来る

特別と言う字に弱いおんなたち

夕焼けだ明日も喜び貰うだろう

湖に沈めた壺に入れた声

山茶花が散つても冬は終わらない

スクラムを組めばみーんなあたたかい

暗算が下手で陽気に生きている

大笑い涙流してまた笑い

冬草 本音かくして赤くなる

待ち惚けコーヒー缶を蹴つとばす

目立たないもの煎じる日まで生きのびる

この先の道はけわしくともひとり

善人のドラマたたくつしてしまふ

鳥取県 谷口 次男

鳥取市 坂田和歌子

八尾市 高杉 千歩

富田林市 藤田 泰子

鳥取県 土橋 螢

和歌山市 福本 英子

鳥取県 西原 艶子

米子市 木村富美子

大山市 早川 盛夫

寝屋川市 籠島 恵子

横浜市 菱田 満秋

大阪府 一本 勇太

弘前市 佐治千加子

美禰市 安平次弘道

鳥取県 石谷美恵子

米子市 光井 玲子

和歌山市 福井 桂香

倉吉市 松本よしえ

八尾市 大内 朝子

横浜市 清水 潮華

出雲市 竹治ちかし

奈良県 鍛原 千里

鳥取県 土橋はるお

米子市 白根 ふみ

鳥取県 さえきやえ

西宮市 西口いわゑ

右へならえで底なし沼へ続くみち

針さして血を吹く指がありがたい

大根の安さに男 気づかない

福俵かつぎ素通りして行つた

原点に幾度めかを立ちかえる

弱と弱共に依存のしゃぼん玉

いそいそと手帳に何か快復期

離婚届 白い封筒に入れてある

日記帳に無い道草の走馬灯

寄らば大樹もちよつと危なくなつてきた

骨のない話続けている喋り

再婚の通知に前の離婚知り

返事なんかしてやるものか磯さざえ

暖冬に開く梅なら観に行かぬ

僕の眠る箱が大きいのを頼む

鍋磨く忘れ上手になりたくて

私が病んで花芽の立たぬ蘭

握手した掌が これまでをひと息に

女が女に目覚めた服はクラシック

上を見た暮らしに嵌まる水たまり

ゆるやかな坂ゆつくりと結願寺

大切な人だ黙秘を続けよう

不意の風に解けてしもうた蝶結び

箆箱がガチャリ普段のごと元朝

不景気な年無造作に明けてゆく

無理を言う夫に老いたなと思ふ

今治市 中村 好恵

福岡県 本田 忠男

大阪市 北 勝美

倉吉市 野口 節子

米子市 木村 春枝

鳥取市 石上 悦子

唐津市 仁部 四郎

八尾市 宮崎シマ子

横浜市 保田 絹子

八尾市 村上ミツ子

高槻市 乙倉 武史

寝屋川市 岸野あやめ

和歌山市 山根めぐみ

守口市 結城 君子

大阪府 澤田 和重

羽曳野市 吉川 寿美

鳥取県 岩崎みさ江

尼崎市 長浜 澄子

和歌山市 榎原 公子

倉吉市 淡路ゆり子

松原市 玉置 重人

唐津市 久保 正剣

岡山県 矢内寿恵子

熊本県 高野 宵草

兵庫県 大谷幸次郎

大阪市 神夏磯典子

冬の薔薇つんと威厳を保っている  
 灰汁取れて旨味も抜けたシチューです  
 隠し味ほどの恋なら幾度もある  
 逢うてきた余韻をつつむ雪ゆきゆき  
 散りそうで散らぬ椿で憎まれる  
 膨らんでいま青春というサクラ  
 ひと刻を犯人にする時刻表  
 トマトの朱チューブにそんな色がない  
 尺取りの伸びる前だと慰める  
 虎の尾を踏んでみたいと思う齡  
 フリーズした本音を酒に解かされる  
 生前にわが追悼句欲しくなる  
 ご機嫌だから少し多めに ご飯盛る  
 春を待つ心は若者にも負けぬ  
 春が来た少し貧相消えたるか  
 健康管理にこけないことを入れている  
 七桁に慣れるほどにも手紙書く  
 時々は炎えて種火を絶やさない  
 さむざむと痛いところが泣く命  
 猫連れて私書箱を持つホームレス  
 本好きの目にはやさしい午後の雨  
 あせるなど逆に気合いをかけられる  
 検査待つ人黙り居り羅漢めき  
 信号が幾つ変わって渡り切り  
 夢のごと二人で登るダイヤ婚  
 時刻むように相槌打っておく

大阪市 町田 達子  
 西宮市 亀岡 哲子  
 大阪市 川原 章久  
 岡山県 山本 玉恵  
 出雲市 石倉美佐子  
 出雲市 板垣 夢酔  
 羽曳野市 芦田 絢子  
 東大阪市 松山 隆  
 唐津市 井上 勝視  
 唐津市 相葉 あき  
 唐津市 海老池 洋  
 箕面市 岩津ようじ  
 堺市 志田 千代  
 京都市 都倉 求芽  
 泉佐野市 稲葉 洋  
 神戸市 船津とみ子  
 鳥取市 春木圭一郎  
 綾部市 藤田 芳郎  
 吹田市 栗谷 春子  
 寝屋川市 平松かすみ  
 弘前市 高橋 岳水  
 枚方市 前 たもつ  
 堺市 梶本 哲平  
 河内長野市 植村 喜代  
 倉吉市 奥谷 弘朗  
 今治市 月原 宵明

晴読雨眠 週休七日という身分  
 のしいかを半時噛んで苦笑い  
 ありがとう 言える幸せありがとう  
 ライバル視されてはらはらしてしまふ  
 二度の職 妻のラッパが鳴りやまず  
 屋台骨写すカメラが欲しくなり  
 スリーサイズ気にして生きるのはやめた  
 違います楽しいことと楽なこと  
 ため息は止そう美人が傍に居る  
 無細工な飾りを纏って虎の陣  
 みな足りて暇になったら風邪を引く  
 算盤は達人だけのものとなる  
 ありのまま言えば火を吹く人がいる  
 セーターのパッドはずせば落ち着いた  
 傘寿の部屋はいつもコタツが温かい  
 寒いのは体だけでは不いらしい  
 あなたがいるだけで明るくなる空気

香川県 木村あきら  
 和歌山市 上地 忍  
 日立市 加藤 権悟  
 和歌山市 森口 美羽  
 岸和田市 井齋 一齋  
 枚方市 濱田 良知  
 大阪市 立蔵 信子  
 宇部市 平田 実男  
 倉吉市 米田 幸子  
 鳥取市 武田 帆雀  
 羽曳野市 酒井 一壺  
 仙台市 川村 映輝  
 吹田市 石原 靖巳  
 枚方市 森本 節子  
 鳥取県 乾 喜代治  
 横浜市 山下 省子  
 八尾市 生嶋ますみ

三宅保州さんの振り乱す髪には凄まじい迫力があります。何とも  
 おどろおどろしい女のなりふり構わぬときの執念みいたな図が浮か  
 んで、切り口が美しく鋭い作品です。よく読めば世の男性の内なる  
 哀しみや厳しさも書けているのです。さては当今流行のロングヘア  
 なども振り乱す髪を求めてかと妙に納得しました。佐藤季穎(とし  
 え)さんの外出着も面白いですね。女の子の遊びに着せ替え人形が  
 ありますが、この句はただの変身ではなくて身も心もみごとにす  
 りと早変わりですから、芸の極みです。小野克枝さんの石橋の物語  
 にはのめりこみます。予感があったに違いないけれど、まさかまさ  
 かと心の奥に縋るものが、石を信じた挙句だけにつらいのです。

# 秀句鑑賞

—2月号から

野村京子

許されてからの痛みが強くなり

増田扶美

扶美さんはいい人なのでしょうね。だから許してもらえたとし、心が痛むのでしょうか。痛みを感じない人がずい分多い世の中です。感動しました。

下絵からはみ出た色は欲だろ

藤田芳郎

人間欲のない人はいません。句の仕立が、とてもお上手です。それでいて、欲に嫌味がありません。他人さまに迷惑でなかったら、たくさんの欲を出して下さい。

丸顔の私にだつてある悩み

川島良子

可愛い丸顔、安心してお話が出来ますね。悩みを聞いてもらえそうなのがします。笑顔に悩みがあるなんて見えませんもの。お顔が目に見えてくるようです。

主人がなんと云いますやらと断わる気

石川勝

断われず考えとくという返事

傍島克治

日本人の悪い癖でイエス・ノーがはつきり言えない事です。また誤解もされます。でも私もそうです。後でいつも後悔をしています。勝さんの句のように、これからは主人を利用したいと思ひます。いいことを教えていただきました。

病名を付けてもらつてから安堵

安野案山子

昨日病名の分からない友を見舞つてきました。家族の方は知っているのかもわかりませんが、本当にお気の毒です。病名が分かればきっと良くなります。春はもうそこまで来てお互いに困つた時の友になる

井上すみれ

つかずはなれず、友達はいいですね。すみれさんのお人柄でしょう。これからもお友達を大切に過して下さい。

極寒の地は極寒の頃がいい

梶本哲平

本当ですね、北国に雪が降らなければ絵になりませんもの……

万事快調 つけ物梅の水あがる

徳山みつこ

毎年小さいビンに梅を漬けていますが、水があがるまで心配で、眺めたり、振つたりしています。それが樽ともなるとたいへんでしようね、よく分かります。そして漬かると、ご近所や子供さんにあげられるのでしよう。きつといい漬物でしようね。

外野から見れば努力が足りません

中井アキ

不平不満はきつちり言えるのに、努力をしないで人を羨ましがります。外野とは、うまいですね。結果はどうあれ一生懸命がんばつてほしいものです。

知つていて知らんふりする聞き上手

安芸田泰子

肩のこり欲を捨てたら治るかも

亀井円女

絵に描いた餅をネズミが引いてゆく

村上久美子

ポランティアする日私になる私

印藤智子

茶の間にはおふくろがいるそれでよし

谷口義

たくさんの立派な句の鑑賞をさせて頂きましてありがとございました。

## 尚香のむ

宮西弥生選

寒そうに客を待つてる招き猫  
ちぎれそうな釘過去をひとつ消す  
裏方に徹して居ます足の裏  
徘徊の祖母を叱っている涙  
譲り合い美味い酔味増になりました  
虎の威は借りぬ本音で勝負する  
七人の中のふたりには勝てる  
幸せの続篇を書く丸いペン  
少し欠けてからは大事にする器  
本物になるまで遊べ青リンド  
美しい罫が静かに茶を立てる  
馬鹿さ加減を涙流して笑ってる  
新しい冒険さがす白い地図  
しあわせは手放し不幸にはフタを  
広辞苑わたしの半身かも知れぬ  
骨の髄抜いてしまった付けばくろ  
退院の一羽ずつ飛ぶ千羽鶴  
初心者と言いつてできる昨日今日  
筋書きのように男はたばこ吸う

和歌山市 木本 朱夏  
吹田市 山本希久子  
岡山県 土居ひでの  
寝屋川市 森 茜  
和歌山市 川上 富湖  
大阪市 稲本 凡子  
米子市 政岡日枝子  
倉敷市 小野 克枝  
大阪市 神夏磯典子  
西宮市 西口いわゑ  
兵庫県 北川とみ子  
富田林市 藤田 泰子  
西宮市 奥田みつ子  
岡山市 川端 柳子  
八尾市 高橋 夕花  
米子市 石垣 花子  
米子市 林 瑞枝  
堺市 志田 千代  
弘前市 佐治千加子

男の弱さ女の強さどこか変  
山の事山の若木にまかせよう  
これからも女でありたい羽づくろい  
菜の花も天使と愛に戯れる  
予報にはなかった淡き光さす  
自力本願匠は修業おこたらず  
ひび割れの指まだ主婦という有難さ  
ポックリのようなシューズに睨まれる  
笑い袋いっぱいにして今日をいく  
老人の群れにわたしがいる明日  
青汁を飲む笑声の渦の中  
見て見ないふりした良心が疼く  
おとぼけで過すことが多くなる  
尾緒つく噂を母の火消し壺  
乱世の魔除け卑弥呼の神獸鏡  
年頭一打運勢表の黒い星  
白旗を振らずに済んだ温い朝  
タイムング渡り損ねた虹の橋  
核家族そのまま客に来て帰り  
知らぬ花ばかり並んでいる花屋  
点滴の夫と白い刻をもつ  
ほんとうは今でも欲しい博多帯  
たとう紙の女家紋が喋りだす  
大好きと言わせてみせる吊し柿  
うめさくら つつじへつづく集印帳

藤井寺市 高田美代子  
米子市 木村富美子  
奈良県 鍛原 千里  
和歌山市 福井 桂香  
西宮市 牧瀬富喜子  
大阪市 本間満津子  
西宮市 門谷たず子  
横浜市 清水 潮華  
横浜市 近藤 道子  
和歌山市 榎原 公子  
尼崎市 長浜 澄子  
東大阪市 北村 賢子  
八尾市 高杉 千歩  
大阪市 三浦千津子  
大阪市 板東 倫子  
大阪市 日阪 秋子  
八尾市 村上ミツ子  
芦屋市 黒田 能子  
大阪市 渡部さと美  
和歌山市 福本 英子  
羽曳野市 吉川 寿美  
尼崎市 春城 年代  
大阪市 川久保睦子  
和歌山市 古久保和子  
堺市 桜沢あかり

青空を覚えてくれた水たまり

忘れること覚えることも生き甲斐に

燃え尽きた男はきつと舞い戻る

経本を抱いて見ようか落ちつかぬ

プレセント尊い汗をありがとう

さようならいつでも軽く言える愛

ジャンケンをして負けたまま生きて

私の時計たのしいときはよく進み

パーゲンに群れて軍の顔になる

労りの言葉に響き合う茶碗

それぞれのおしゃれ哲学女磨く

一瞬の若さそれからながい橋

人一人救うこんなエネルギー

再会に賭けるものありイヤリング

さようならは劇的台詞吐いてから

花つけぬ草で生きるも潔い

かがり火で松は情念たぎらせる

自分史に少し化粧をしておこう

冬花火枯れた心に春を呼ぶ

美しい川が自慢の過疎に住む

黒豆の艶はまだまだ姑のもの

淋しい影を持つひとが好き水鏡

垣根とるとすぐばらばらになる家族

張り子の虎春になれば首ふらず

境界線はさみ野草の運不運

喜屋川市 籠島 恵子

貝塚市 池田寿美子

今治市 村上久美子

鳥取県 田村きみ子

喜屋川市 平松かすみ

米子市 小塩智加恵

松江市 川本 晔

喜屋川市 井上すみれ

八尾市 大内 朝子

喜屋川市 坂上 高栄

鳥取市 山本 益子

米子市 白根 ふみ

和歌山市 宮口 克子

羽曳野市 徳山みつこ

鳥取県 西原 艶子

堺市 矢倉 五月

和歌山市 桜井 千秀

岡山県 大石あすなろ

大阪市 町田 達子

鳥取県 山内 芳江

出雲市 園山多賀子

愛媛県 黒田 茂代

米子市 青戸 田鶴

豊中市 宇野 義江

羽曳野市 芦田 絢子

仲直りみかんが二つあったので

かぎっ子の記憶にだれもいない部屋

何もかも許せる幸せな余熱

寄せ鍋にぐちも自慢も煮こまれて

母の味海より深いエトセトラ

花形人參作って主婦だけで終る

サボテンの成長にみる大器晩成

一病を縁と元氣賀状くる

車椅子の視野にいっぱい学ぶこと

顔にすぐ喜びごとは隠せない

亡母の年越えて元氣を貰います

藤井寺市 太田扶美代

川崎市 和泉見早子

鳥取県 石谷美恵子

八尾市 生嶋ますみ

鳥取県 坂田和歌子

熊本市 永田 俊子

横浜市 後藤 早智

和泉市 中川 楓

倉吉市 野口 節子

大阪市 藤田頂留子

松江市 佐野木みえ

朱夏さんの句―何とも着想が面白い。新しい年こそよい年でありたいもの。招き猫は、縁起物として、昨今の経済低迷では人気を集めている。右手を上げると金運、左手を上げると人を集めるといふ。「寒そうに」上句が非常にこの句を活かしている。希久子さんの句―釘のつけ違い云々はしばしば引用されるが、取れそうな釘よりちぎれそうな釘とは又意味が変わる。後者の方が人間の真情が通うので深くなる。何時までも過去にこだわらず、深く、前向きにということであろう。歯切れのよい句である。ひでのさんの句―謙虚な人柄であるが、人間の動静をしっかりと凝視。人は調子づくると歯車を狂わせ、自分中心で動く機関車みたいなもの。眼をつぶって避けるよりも意欲的に身体から真正面にあぶつかる姿に共鳴する。茜さんの句―私たちの身のまわりにある現実を真正面から射止めた実感句であろうか。家族の温かさ、日常の動静、主人公に接する忍耐を最後の「涙」でしめられたところが一層胸に迫るものを感じる。

シーン

指宿千枝子選



夕焼けのシーンに見とれ今日も過ぎ  
 ラブシーン見ているだけになりました (安)  
 ガラス越しのキスに国中沸いた頃  
 ラブシーンすこしななめに見てしまっ  
 キスシーン目をらんらんとする米寿  
 米寿祝う母のにつこり深い皺  
 御来光昇るシーンに手を合わす  
 食事するシーンあの人左きき  
 名シーン別れのせりふ皆覚え  
 寅さんの喧嘩シーンは喜劇なり  
 見得を切る場面待ってる大向う  
 喝采のシーン八百長とは知らず  
 背景のシーンが一役買っている  
 平和呆け殺しのシーン客を呼ぶ  
 仙人の住んでた山も傷だらけ  
 遺跡から遠いシーンが甦る  
 衛星を掴むシーンへ世界の目  
 アマゾンで逝ったシーンが胸を刺す  
 トップ達のお詫びのシーン見苦しい  
 聖火リレー消えるシーンがリアルすぎ  
 駅伝のラストシーンに手をたたき  
 核武装嫌なシーンがよみがえり

雅風 弘一 朝子 花匠 羊子 義實 和歌子 重人 勇太 隆二 俊二 洞庵 哲子 鉄治 和枝 靖巳 好恵 雅子 呷笑

ワンシーンに泣く広島のきのこ雲  
 原爆のシーン決して忘れない  
 風呂敷にひとつ包んであるシーン  
 ドキメント子が泣くシーン胸つまる  
 感動のシーン織りなす孤児の旅  
 回想のふる里シーン青いまま  
 終章の旅のシーンに父母が待つ  
 クライマックス地吹雪に乗る津軽三味  
 哀歎のシーン見ている駅時計  
 花道を飾るシーンを考える  
 自分史はラブシーンから書き始め  
 初恋の君と遊んだ走馬灯  
 古日記喜怒哀楽が蘇る  
 思い出のどのシーンにも妻がいる  
 どのシーンカットされても僕は僕  
 佳  
 感激のシーン二度目は色褪せる  
 喝采のシーンへ稽古汗を拭く  
 出産のシーン女は強くなる  
 ヘソクリを確かめている母の顔  
 六十五年生きてシーンが線になる  
 人  
 二月堂松明シーンが告げる春  
 地  
 ラストシーン余韻をよそにコマージュル (備)  
 天  
 北の冬のアンケルも水墨画  
 軸  
 来し方どののシーンにも味ありて  
 典子 ひで ますみ 照子 義男 登美 晴翠 ツネ 俊子 螢 圭一郎 柳弘 文時 佳雲 大輪 甚一 能子 省子 たもつ 正雄 洋水 岳水

約

山海友照選



快眠をばつくり寺に予約する  
 責任をとる約束をしよう  
 約束を煙に巻いた玉手箱  
 口約を守る男の太い骨  
 縄のれん軽々約束してしまっ  
 約款に未必の故意も入れておく  
 ふところ逢う約束が脈をうつ  
 売約の札が縫せてる七不思議  
 極楽の予約して来たバスツアー  
 約束は誰も果さず母一人  
 約束を見破っている聴診器  
 約定のある巧妙な蟻地獄  
 居酒屋でした約束を反古にする  
 神前の誓いを反古にした離婚  
 太陽に約束できる子に育て  
 プロポーズ約束手形もろておく  
 約束を忘れた小指病んでいる  
 約款の細かい漢字見るゆとり  
 約束を固い握手で確かめる  
 約束を契る小指にあるほてり  
 約束に胸を弾ます花時計  
 軒下の春の約束路の臺

芳郎 政良 時弘 杜的 岳水 玉恵 子龍 (安) 美代子 重人 清芳 和枝 武史 俊路 典子 多賀子 雅城 甚一 朝子 忠男

路 集

白無垢を孫へ指切る老いの幸  
標準語に約して里の風が消え  
繰り言を聞いて約手の判を押し  
枯葉散り約束ごとを取り残す  
開始時間約をつけたら腹立たぬ  
死ぬまで一緒に居るくて重い約束だ  
約束をすれば人柄試される  
約款の小さな文字を読む不運  
約定の死角にあった落とし穴  
約束にしびれきらした伝言板  
約束の時間にはずむ赤い靴  
約束の言葉が温いお人柄  
約束を果すつもり太い指  
約束はなくても明日へ種を蒔く  
約束を守り通した花言葉

佳  
美恵子  
京子  
寿美  
しげお  
洋

勝 視  
可 住  
英 子  
宏  
剛 治  
剛 治  
旋 風  
正 劍  
ツ 劍  
愛 論  
靖 巳  
狸 村  
ちかし  
良  
隆 盛

和

岩本笑子選



平和呆けそしてイライラはじめる  
和と一字書いた揮毫が温かい  
俯向いて淋しがり屋が和に溶けぬ  
平和っていいな日本の花暦  
十人十色善意の嘘で和を保つ  
和音ばかり奏でて夫婦げ易い  
人情にふれて和んだ花遍路  
平和なのかな頭が軽い気もするが  
干柿の甘さに和む掘こたつ  
ワンクッション置いて和解の道さくる  
席順のない車座がよく和む  
和気あいあい五百羅漢の良いお顔  
和解してやさしい声を聞いている  
和があつてヒト科廃業出来ません  
いいこと言つてほんとの和ができる  
出るところへ出るで貴様ある和服  
足して二で割つて自分と和解する  
和を保つためにひととす貝になる  
同床異夢平和は長く続かない  
キミとボク和音になつてゆく絆  
歳月を囲んで和むクラス会  
日々和してこの頃増えた笑いジワ

あやめ  
保 劍  
正 劍  
権 悟  
時 弘  
よしえ  
京 子  
扶美代  
清 子  
潮 華  
清 史  
章 久  
富美子  
露 児  
たもつ  
重 人  
た だ し  
旋 風  
甚 一  
朝 子  
鉄 治  
叭 笑  
和気あいあいな中仮面が二つ三つ  
君が居るだけで和んで来る私  
体温をまあるく移す和のかたち  
ほのぼのと聖火が走っている平和  
人の和の脆さを知った失語症  
大法螺も和風の方が面白い  
和解してやさし指の爪を切る  
生かされて和の中にいるちりれんげ  
虎の子も株も預金もない平和  
陽は一つ月も一つで和を保つ  
ウマが合う干支で平和に敷かれてる  
女まだ少し残っている和服  
和解するつもりで朝の葱さきむ  
和解する気らしい今夜すき焼きだ  
人の和を保つ接着剤になる

岳 水  
義  
英 子  
宵 明  
可 住  
志 重  
寛 子  
たす子  
蟹  
はるお  
達 子  
島  
剛 治  
剛 治  
旋 風  
正 劍  
ツ 劍  
愛 論  
靖 巳  
狸 村  
ちかし  
良  
隆 盛  
美恵子  
京子  
寿美  
しげお  
洋  
和を以て尊しとする風見鶏  
猿も木を落ちて車座和やかだ  
平和だな午後の三時を打っている  
和やかに餅搗いてます食べてます

中居善信

# 初歩教室

題一 座

吐田公一

川柳は多読多作が上達のもと。一題で一つの言葉を見付けた時、異なつた着想で何句か作つてみる。例えは奥座敷・座りだこで

×滝もみじ住めば都の奥座敷  
△奥座敷懐旧談に花が咲き

○娘の縁談機嫌の悪い奥座敷

×座りだこ畳のくらしそのままに

△座りだこ知らぬジーン娘の育ち

○手内職していた母の座りだこ

詠んだ作品に○×をつけて、その着想の交換を試みるようにすれば、着想は徐々に拡がって行くよつに思つ。

添削句

○座布団を温めて老の日なたぼこ とよ子

○座つたら動かぬ老母の丸い背

脱字に注意、二句の下半句を交換すれば

▽座布団を温めて老母の丸い背

▽座つたら動かぬ老いの日向ぼこ

○相席に座る目線の位置困る 益子  
相席 座るで同義語

▽相席になつて困つた目のやり場

○予約した座席ほどよいとこに有り 富江

▽できるだけ具体的に詠むこと

▽大相撲間近に見えた予約席

○父の座を守り淋しく孤立する 弘子

▽初心者にしてはなかなかいい句だが、淋しく孤立にやや難

▽父の座を依怙地に守る床柱

○座右の銘索引欲しい程の数 弘一

▽原句は銘の数の多さを詠んでいるだけ

▽生き甲斐を与えてくれた座右の銘

○一言に座が白けてる皮算子 輝夫

▽誤字に留意のこと。だすと進行形の方が一

▽一言に座が白けだす皮算用

○老夫婦仲よく座つてひなたぼこ 寿代

上九に代えて座つている姿だけでなく、話し合つてる姿にすれば

▽来し方を語り合つてる日向ぼこ

○座りだこ死語になつての脚線美 啓子

▽原句もいいが

▽座りだこ知らず育つた脚線美

○車座になれば話もまるくなる 仁清

▽軽みの句でいいのだが、表現がやや説明的

○車座になつて話がるくるなり

○車座で仲間が集う唄がある ひでの

仲間が集う唄 冗長すぎる。青春の歌でよいのでは

▽車座で昔を偲ぶ青春歌

○車座になつて余興の句をひねり 羊子

▽単なる情景の実写より感情の注入を

▽無礼講飲む車座が温かい

○座りだこどこにとどこにと孫が聞く 郁子

▽座りだこの時はできる限り、それにまつわる話を詠めばいいのでは

○苦勞話孫に聞かせる座りだこ

▽妻の座を守り通した五十年 崇

○妻の座を定年にして娘と同居

▽妻の座を定年にして娘と同居

○座りだこ語らず知れる生活ぶり 方子

▽座りだこ語らず知れる生活ぶり

○座りだこ語らず知れる生活ぶり 方子

▽座りだこ語らず知れる生活ぶり

○座りだこ語らず知れる生活ぶり 方子

▽座りだこ語らず知れる生活ぶり

○都会の孫冬の星座に熱が入り 幸子

▽都会の孫冬の星座に熱が入り

○都会は不要。少年の夢は果てしない。

▽遊泳から孫は星座に熱が入り

○車座へ気兼ねしながら仲間入り 静子

▽車座へ気兼ねしながら仲間入り

○車座に気安さもらう仲間入り

▽車座に気安さもらう仲間入り

○素直にはあやまれずして座をはずす タツエ

▽原句は表現が素直すぎる。技巧も大事

○三ヶ日私座ぶとん用はなく よし子

着想はいい。正月の主婦(母)の姿が浮ぶ。

▽子ら集い座の間もない三ヶ日

○いい返事仲々座席立てれない 志重

いい返事の具体性がないので分りにくい句となつている。原句と内容は異なるが

▽中座する講演会のタイミング

○下座でも八起目願うダルマさん 睦子

でも、の表現が悪い。ダルマは不適

▽八起き目を狙う下座の虎視光る

○座りだこお楽にの声待っている 幸次郎

座りだこのある人は正座になれている。

▽あぐらより正座が楽と座りだこ

○座長さえ金封一番好きという 奴夫

ひねり。おひねりのこと。原句は説明に終

つている。参考句も芳しくはないが

▽ドサ廻り座長へ飛んでくるひねり

○押しのけて座った椅子の風当り 君江

原句はややインパクト不足

▽蹴落した椅子に思わぬ四面楚歌

○隅に座し人のこころを読んでいる りつえ

同じ内容をどう表現するかを研究のこと

▽冷めた眼で流れを読んでいる末座

○初会合年功序列で座が決まり 一乗

席順はなかなかうるさいもの。着眼点はい

いが佳句には少しもの足りない。

○膝の故障正座の集まりもつ行けぬ つね一

説明に終始してしまっている。

▽膝病んで正座がづらい趣味の会

○亡き夫の座布団ながめ刻過ぎる 義江

感慨を詠むならそれに合った言葉を

▽床柱背に面影の亡夫の座

○座が代り息の傘下となりました 政子

息子のことでしよう。誤字・脱字のないよ

う、これは基本です。

▽座が代り子に従ってゆく余生

○常勝の座うばわれて夜半の月 捷也

見付は実がいい。惜しむらくは中六の語呂

の悪さ。推敲不足が命とり

▽常勝の座が奪われた夜半の月

○切れ者も窓辺に座ればただの人 嘉信

切れ者。ただの人で説明句となつている。

▽窓際の椅子で贅肉の嘆かこつ

○お茶席に座る茶髪は我慢の子 美子

下五に難。我慢の具体的な表現が必要

▽お茶席でしびれが切れる茶髪の子

○苦い酒あぐら許され変る味 徳三

苦い酒より堅苦しい席の方が

▽堅い席あぐらで変わる酒の味 ふみ

○新客を厚い座布団待っている 厚いは不要

▽遠来を待つ座布団がそそそわと

### 佳句

ライバルの視線集まる主役の座 和可

頑固さを語る明治の座り臍臍 (三)八重子

母の年母と同じ座りだこ てる代

浮き沈み皆知っている座りだこ トキ

(黙って耐えて) 宏

窓際に座ってからの胃潰瘍 宏

(窓際族のやるせなさをうまく) 玲子

女も五十大べる話に座がはずむ (少しはお色気も) 玲子

正面に座ると背筋しゃんと伸び (輕みの句) 八重子

座布団が飛ぶ金星の勝ち名乗り 忠男

(力士冥利の一コマを) 忠男

不況風肩書の座も揺らぎだす みやこ

(時事吟として) 芳水

娘のお産父は立ったり座ったり (写実的) 芳水

寝ころべば童に還る古座敷 俊二

(郷愁を上手に表現) 俊二

煩惱を捨て座禅に冬の風 雄幸

(下五が効いている) 雄幸

妻の座も母の座も降り風といる 美也子

(見事の一言に尽きる) 美也子

少年の夢を招いている星座

私の句

少年の夢を招いている星座

# おしどり同人の一筆

(2)

## 個性のトライアングル

るそつだ。どちらの我が儘でそのようになるのかは知らないが、振り返れば長い二人三脚を続けてきたのだと感心している。

忙しい暮らしのなかの  
二人旅

林 荒介  
瑞 枝

二人で各地の大会に出掛けるようになって十数年になった。これも、広島で暮らしていた若夫婦が転勤で米子に帰ってきて、会社の仕事を任せられるようになったお蔭で、土・日の二日間の範囲なら、ときには月に二回三回と出掛けることもある。稀に月曜日にまたがることもあるが、三日間となると帰って来が忙しい。数年前の比叡山ホテルでの大会には風邪気味の瑞枝と出掛けて大変だった。病気をしたことのない瑞枝が、夏風邪を引いてしまい、薬局もお医者もいないお山のこゝろ、フロントから改源を貰い、コートで羽織って観光から句会、懇親会と努め上げた。私

も似たような体験がある。前日の梅園の散策や国分寺の塔などを眺めてホテルに帰ったら悪寒。街から売薬を買ってきてもらい、毛布を余分に出してもらって朝まで何事もなかったが、朝食をとってその売薬を飲んでゆつくと句会場に向かった。句箋に向かったころから頭がぼーっとししたが、書き上げた句箋を瑞枝に渡し、雑壇になった会場のいちばん奥に新聞紙を敷きつめ、披露が終わるころまで前後不覚に眠ってしまった事がある。そんなにまでしての川柳とは何だろうかといまだに結論が出ないままでいる。が、今年もまたあちこちに出歩くことになりそつだ。鴛鴦夫婦と呼ばれているが、性格も句風も全く違う二人だから、お互いの川柳に干渉する事もなく続けているが、忙しい川柳で大会に出歩くと地元の場合には不義理がつづく、何時まで出歩けるか判らないが体がづくづきり大会に参加するつもりだ。

鴛鴦の契りは嘘で毎年カッパルを変えてい

中 原 諷 人  
み さ 子

何処へ出かけるにも誰かが傍にいる旅すかたは、睦まじく視えているものらしい。おたがい庇い合うという訳でもないのだけれど傍に居ると居ないでは、支柱のない胡瓜やトマトにも似て不安感を憶えてしまう仲間らしい年齢になったことも手伝ってフルムーン気取りに句会・大会巡りをしている。平成二年暮れの急性肺炎に倒れて以後は、酸素携帯という荷が増えたこともあって単独では、少々無理になる旅が多くなったが、それでも、人の絆と作品を大切にしたいと出かけたくなってくるチームワーク？である。二人で一人前・半人前のコンビなものだから時には「三本の矢」トリオの家族旅をするころもある。やはり睦まじくなるのだろう。

昭和五十四年十二月、ふらつと降りた所が



いつも、いつも私の優先させてくれ、辞書と首つ引きで頑張ってくれています。本当に感謝々々です。

私が川柳を始めてから六年になります。そして、門前の小僧ならぬ、おばさんをやっていた妻を、川柳に引き込んだのは四年前のことです。

私達は、他人様からよく「趣味が同じいいですね」と言われています。そうかも知れませんが、句会で、どちらかが入選すると、共に喜び、駄目な時は、慰め合うことができます。句作りがうまくいかない時でも、互いに励まし合って、よたよたしながら何とかやっています。

句会から帰って、その日の感想を語り合うのも楽しいことです。時には、作句上のことや、句の鑑賞について話し合っているうちに議論が白熱し、娘を心配させることもあります。感受性の強い娘は「家庭がこわれてしまふ」と思うそうです。

二人三脚は、これからますます続きます。年齢とともに妻の負担はますます重くなることとでしょう。妻はよく肩を凝らします。そんな時、私は本職の腕を発揮します。これからも、せいぜい妻の肩を揉ませてもらうつもりです。

「おしどり同人」といっても、まだ、ほやの二人です。これからもよろしく御指導いただきますよう、お願い申し上げます。

## 孫 弟 子

### 河 内 天 笑 月 子

お父さんはやはり川柳々々云つてるよ

麻生路郎のぶ厚い「旅人」の二六四頁に載っている句です。私川柳的であまり一般向きのしない作品ですが、一ペン頭に入ると出ていかん不思議な力があります。このごろの自分がこのようになっている事を思えば、「いのちある句」なんやなアと孫弟子として感慨ひとしおです。

野坂つき子から河内月子になって貰ったのが昭和54年のクリスマス。翌年3月23日に堺東のやまたけで結婚披露の祝賀句会。その日の発表誌に故榎本聡夢、故中尾藻介、橘高薫風の大先輩諸氏から川柳夫婦船出のはなむけに多大な激励のお言葉を戴きました。そして感動さめやらぬ翌4月2日に会長八木摩太郎氏が急逝されたのです。うろたえる間もなく、

自発的に堺川柳会を引き継ぎました。何でも俺が俺という出しやはり根性が出た訳で以後ひろげた風呂敷の始末に難儀を重ねるといふ僕のこれまでのパトーンになりました。

丁度その頃から当時小学五年と四年の二男と三男の喘息の発作がきつくなってきたいてこれが堺や本社句会と重なる事が再々でした。こんなピンチは彼等が中学を卒業する頃まで五、六年も続き、延べ26回も中之島の住友病院に入退院をくり返しました。今は二人共元気で活躍しています。こんな中でも川柳堺の会を続けて来られたのも夫婦川柳なればこそだと妻の力の大きさを感じずに居れませんが、それより何より喘息を介して四人の子供達の間でも「協力する事」や「思いやる心」が自然に育ってくれた事がとても有難いことでした。「ああそれなのにそれなのに」です。こんなええ嫁さんに対して「ほけなす」やの「うすのろ」やのとほろくそに言う癖がまだあって弱ってるんです。氣イつけますけど。「もうこはん出来たでと妻揺り起こし」こんな事もたまにはありますけど句会では、「鈍いふりして父ちゃんに負けておく」とか「父ちゃんをちくちく攻める酒を酌ぎ」とかようこのごろやりこめられます。有難いやおまへんか嫁はんといふもんは。夫婦川柳万歳。

## 川柳の目

吉川 寿美

昨年オール川柳四月号に、時事川柳特選句「老人は死んで下さい国のため」発表以来半年余、賛否両論のすさまじさは文芸論争にまで発展する勢い。昨十二月十四日付朝日新聞社会面で「命長き時代に」の表題で取り挙げられたのは周知の事です。

この反響の中で短詩形文芸の表現の限界、作品の捉え方、川柳の根底にあるヒューマニズムの大事さ、そして時事川柳といえども一過性のものでなく、その時その時の記録に残せるものを心得るべきこと、時空を越えて訴える力のある作句を、そして、川柳の目で字面に見えない根底にあるものを読み取る大切さ等々学びました。朝日新聞にも高齢者の胸を衝く川柳とありましたが、一般の方には逆説には取ってもらえず、作者の同年代の方のほとんどが、老人はこれほど嫌われているのかと腹立たしく思い、戦中、戦後を生きぬい

て来た苦勞を思い起し、情けなさで胸を衝かれたのでしよう。しかし、川柳の目で字面にならないものを読みとり、貧政への痛烈な批判と受けとめながら、もう一つ「よくぞ言って下さった」と笑い飛ばせないものが胸底にありました。

省略の文芸十七音字の世界、時事川柳ならなおの事、現在をどんな視点で捉え、どう言葉にして読者の琴線にふれるか、表現にも限界があると今更ながら思いましたが、先輩からの常識的な見方、普通の表現では受け入れられないとの教訓を思い返し、ジェネレーションギャップの文字が頭をよぎりました。この論争の中で川柳の目の焦点がずれていくのではと少々戸惑いを感じたのも事実です。表現の善し悪しを論じるのは大いに歓迎しますがプライベートな事まで引き合いに出し、個人攻撃的な類いは避けたいもの、人間陶冶の言葉を考えさせられました。

平成五年福祉川柳のケースワーカーの句にしても、この度の国のための句にしても川柳の世界だけの問題でなく、政策への批判が政治屋と言う温床に胡坐をかき、党利党略に走り回る金バッジの耳には届かない。これがわが国日本の現状、お寒い話です。

さて、話を元に戻して、朝日の記事の中で

長い間老人医療にたずさわり、家族の深刻な悩みをみて来て共感を覚えた川柳歴三年の看護婦の方が、これから先どう生きて子供に迷惑かけずに、どう人生を締めくくればよいか死ぬまでの不安を強め「死になさい生きて下さい迷わせる」の句を詠んで居ました。賛成派でも言葉通り受けとられた句で、逆説的と言うのは本当にむづかしいこと、表現には心すべきとつくづく思いを深くしました。

紙一枚エンピツ一本あれば、字面に見えぬ心の底をぶつつけられる世界、難産であればあるほど無から有を創り出し、自分ひとりの欲びを抱きしめられる。この素晴らしい川柳と一生連れ添えられたらとの思いの中で、自分の拙さに歯がゆい憶いを重ねて居ります。

短詩文芸の表現法をこれほど広く論じられたことがなかったと思います。これを機会にただの論争に終らせぬよう、ひとりひとりがしっかり受けとめなければと思うとともに、読み手として字面の奥を読みとれる川柳の目、寛大なところを養わなければの感を深くしました。川柳の品格を失わず、表現の限界で読み手の心をゆさぶる。私にはとても難しい事ですが……

原点でエンピツ削り直さねば

寿美

# 本社 二月句会

二月六日(金)午後五時半  
アウイーナ 大阪

立春も過ぎ春の気配がほのかに感じられた六日夕、ゆったりとしていて豪華な雰囲気の新会場にて九十四名の参加により、二月句会は定刻開催された。

お話は西田柳宏子氏。まず三月六日、開催されることになった八五〇号記念大会の成功へ向けて協力を要請する。

次に鳥取県が県をあげて文化活動の推進に取り組んでいることを紹介。県民一人一人が何らかの文化活動に参加し、輪を広げることが目標に行政指導を行っており、川柳部門でも昨年からの指導者養成の為の講座が開かれ、氏は講師の一員として、その任を果たした体験などを話す。

初出席に傍島克治氏(高槻市)、指宿千枝子さん(東大阪市)を迎える。

月間賞は岸和田市の岩佐ダン吉氏に輝く。

(司会―ダン吉) (記名―月子・いわる)

(受付―美房・あやめ) (清記―希久子)

## 席題「このごろ」 米田恭昌選

良いニュースこのごろ聞いたことがない  
このごろは人より犬を信じます  
このごろの孫の笑いに救われる  
このごろは万歩計に励まされ  
このごろはアライドも捨てよく眠る  
私このごろコレステロール気にします  
このごろの日本政治家おらぬらし  
身に覚えあつてこのごろ落ちつかず  
同窓会このごろ酒量減ってくる  
顔色が冴えないこのごろの総理  
此頃は甘辛しゃんで起こされる  
このごろは赤鉛筆がよく売れる  
妥協点このごろ下げてばかりいる  
そう言えばこのごろ妻が笑わない  
老化した頭このごろ持て余す  
塾帰りに争つように眠ってる  
五分咲きの梅とあしたの話する  
中学生見るとこのごろ身構える  
この頃の世相に金庫買ってくる  
湯豆腐が芯から美味い昨日きょう  
嫁がせて今日この頃の茜雲  
このごろのナイフは人を刺す玩具  
春を感じる今日このごろの風の彩  
このごろはとんと喋らぬ反抗期  
このごろはやさしさこつこして夫婦  
気概もう薄れこのごろすく妥協  
この頃は息子がゴミを出すそうな

射月芳 房子 千歩 たず子 澄子 路児 紫香 三男 ダン吉 しげお 桂香 富湖 大輪 文秋 ダン吉 蘭美代子 みつ子 シマ子 扶美代 扶美代 路児 希久子 英子 千秀 シマ子

目に余る記事がこのごろ多過ぎる  
遺伝子をこのごろ舐りすぎないか  
この頃の落ちた酒量に老いを知る  
模写の絵を掛けてこのごろ茶の間飢え  
このごろの言葉へ舌が縛れだし

教師と生徒きよりが遠のく昨日今日  
バイトして息子このごろ大人びる  
バタフライナイフがこのごろよくしゃべる  
禁酒してこのごろ体調狂い出し  
このごろは合わせ鏡で見る頭

人も地も皆この頃の様変り  
このごろは酒を涙で割っている  
少年がナイフに見える暗い町

妻も年この頃いやに濃い化粧  
兼題「湯」  
ぬるま湯を出てきた鬼だこわくない  
初釜の湯沸き振袖かしまる  
ぬるま湯の中で謀叛を考える  
その返事ひと風呂あびてからにする  
ぬるま湯に腰の刀が錆びている  
湯かげんを聞く遠い日の火吹き竹  
やさしいお湯だ人魚のように横たわる  
露天風呂虎造唸る俺ひとり

諷云児 保久 章久 大輪 勇太 洞庵 森子 愛論 あやめ 章久 勇太 鬼遊 恭昌 藤井正雄選

剛治 照子 正子 千里 一歩 茜 夕花 ばっは

鎧脱ぎ捨て平和な首が湯に浮かぶ  
 深水の美女湯上がりの肌匂う  
 ポットに湯いづもあるから油断する  
 あの頃は銭湯だった若かった  
 湯豆腐と美人姉妹に会える店  
 良質のポリープお湯でもんでやる  
 効能に合った泉質めぐる旅  
 タイエット夜食横目に白湯を飲み  
 溢れる湯にふと難民の顔浮かぶ  
 焼酎のお湯割りが好き父の汗  
 美女になる湯とか知るのが遅かった  
 嫁した娘の後のお風呂は湯がすこし  
 長風呂が好きで物には動じない  
 信じてた女に熱湯吞まされる  
 老人福祉湯屋のチケット二枚くれ  
 妻のるすお湯とどん兵衛あればよい  
 素肌美を自己満足で長湯する  
 妻の留守湯がたぎるのも腹が立ち  
 るるま湯の中で凡人泳がされ  
 裸祭り湯気が血汐を昂らせ  
 二幕目まだぬるま湯が出られない  
 長湯して妻にドアを叩かれる  
 湯煙にあなたの嘘が隠される  
 湯があふれ日本不景気なんですか  
 お湯をもつはじかぬ肌で妬いている  
 ぬるま湯の暮らし感性錆びてくる  
 ふるさと創生 湯煙あげて暇な里  
 思いつきのあつて湯のみの柄の数

射月芳 克治 大輪 洋 周信 たもつ 隆盛 満州 三男 典子 美房 一步 洋敏 男女 三男 千里 千秀 シマ子 笛生 悟郎 萬的 正坊 かすみ 義 楓 柴 みつ子 周信 洋

佳  
 沸点をなだめてくれる蓋がある  
 旅の湯で大阪府の方へ寄り  
 露天風呂顔に雪散る湯のぬくみ  
 カウント10肩までお湯に押さえつけ  
 ゆ看板街がほんのり暖かい  
 人  
 露天風呂詩人にさせる月が冴え  
 地  
 湯も僕もまだ沸騰が治まらず  
 天  
 湯が溢れ心があふれ歌あふれ  
 軸  
 台所湯気の中から母が唄  
 兼題「伸びる」 高杉千歩選

森子 愛論 シマ子 愛論 とし子 萬的 昭子 落児 正雄 庸佑 螢 照子 義 一二三 紫香 森子 かすみ 雅文 朝子 保州 しげお 落児

伸びる子の十指に四季の風の音  
 伸び盛り米にかわった母の帯  
 サボテンがすくすく伸びる温暖化  
 おとほけの上手な枝がよく伸びる  
 素麵の糸ほど伸ばしたい命  
 ねこ柳伸びて光つて春ですね  
 首少し伸ばすと前途見えてくる  
 クレーンが伸びて借景消しにくる  
 背伸びしすぎて自分の影にけつますく  
 春の音髭まで早く伸びだした  
 偏差値が伸びる個性の花芽つむ  
 背伸びなど何時まで続く土踏まず  
 背伸びした僕があれから跳んでいる  
 すく伸びる爪真夜中に切っている  
 そつめんのすだれが伸びる三輪の里  
 あなたに逢える日はクリムがよく伸びる  
 ビルばかり伸びて空虚な都会だ  
 ちよぼちよぼが隣に負けたくない背伸び  
 髪伸びた儘退院のまだ遠く  
 伸び盛りもカバンも大きめに  
 伸びる芽へブライド邪魔な時もある  
 伸びすぎた擬音ばかりが溜まる耳  
 寝る前に夫婦で筋を伸ばし合い  
 夢喰へたポストの影が伸びていく  
 佳

勇太 克治 恵子 高美代子 ばっは 昭子 西 諷云児 美房 靖巳 洋 ダン吉 房子 笛生 金太 紫香 柳宏子 笛生 英子 萬的 勇太 天笑 千里 扶美代 恵子 扶美代 みつ子

物差しを伸ばすと腹も立ってこぬ  
一風

春ですな雑草の芽が先ず伸びる  
希久子

伸び切つてからの輪ゴムは唄わない  
大輪

草の芽は伸びる宴を始めてる  
いわゑ

三年生もつばあちゃんを越す背丈  
千歩

兼題「挨拶」 宮崎シマ子選

ご挨拶と言つて娘を盗りに来る  
正子

流れ矢をかわすお辞儀が胃に刺さり  
美代子

里帰りの挨拶墓で泣きくすれ  
一風

先生に挨拶すればいじめられ  
美房

挨拶をさせると覗く氏索性  
楓

丁寧な挨拶あとが続かない  
西

挨拶は生きる手立ての潤滑油  
高栄

お隣と挨拶出来た新世帯  
英子

仮設から出る挨拶がよく弾む  
石舟

挨拶を抜きにするほど急な用  
紫香

挨拶もなく飛びこんできた計報  
房子

通夜の席ムニヤムニヤムで頭さげ  
ますみ

挨拶が後ろから来る過疎の村  
射月芳

ええ天気でんと言つて行き違ふ  
洞庵

国訛り入れて挨拶点をあげ  
二三

自転車で挨拶撒いてゆく少女  
雅文

前後左右へする挨拶は丸い風  
森子

挨拶のかわりにドボツと酌いでくれ  
月子

微笑んでくれたら返すコンニチワ  
桂香

お早うの一言市が動き出す  
久峰

オッスでもやあでも嬉し朝の靴  
英子

手を握るそれが男の挨拶だ  
路児

おそろしや妻三ツ指で出迎える  
楓

挨拶などいらぬ伸で指目を合わせ  
たず子

メロン持ち挨拶に行く気の重さ  
義

風花に挨拶すると春をつれ  
義子

オリオンにお休み言つてから眠る  
みつ子

おはようさん儲かりまっかほちほちだ  
柳弘

伴せも不幸も挨拶なしで来る  
弘一

挨拶がすめばあくらの床柱  
章久

挨拶の下手な男のやさしい目  
いゝゑ

おおきにと言う挨拶を大切に  
桂香

挨拶もつまいぞ油断するまいぞ  
柳宏子

住  
挨拶が苦手で妻を楯にする  
石舟

挨拶に行く日の靴はピカピカに  
美代子

腐つても鯛挨拶に無駄がない  
諷云児

何かある私ごときに最敬礼  
泰子

泣いているのか森からこたま返らない  
扶美代

人  
着任の挨拶爪を隠してる  
恭昌

地  
開会の辞を聞いている鳩百羽  
美代子

天  
こだわりが吹飛ぶ朝のおはようさん  
女

軸  
五百羅漢の挨拶に会う寺の庭  
シマ子

兼題「盲点」 板尾岳人選

盲点に明りを点す雪となり  
千代

盲点はつき合わない夫婦です  
洋敏

大雪にぬかぶがあつた大都会  
鬼遊

しゃぶしゃぶは本命でない袖の下  
洋

少年法の盲点衝きにくるナイフ  
保州

敗因は優勝候補だったこと  
紫香

盲点を女だてらに突いてくる  
萬的

盲点をあつさり九官鳥喋る  
典子

盲点を探す大きな望遠鏡  
悟郎

僕の盲点妻がしきりについてくる  
満州

半額の盲点にまた引掛かり  
美房

盲点を一番知つてるのは味方  
希久子

お陽さまにすかすと盲点がみえる  
義子

コンセントの奥に盲点隠れてる  
ダン吉

盲点がざらりと見えた自然体  
昭子

モナリザの微笑に盲点隠される  
夕花

盲点をカバーしている門構え  
千歩

盲点のある人だからぬきられぬ  
三男

好敵手盲点チラリとも見せず  
あやめ

若いなあ盲点だらけ穴だらけ  
正雄

むき出しの盲点誰もつかない  
朝子

信用という盲点に微が生え  
桂香

盲点を突いたら唾う影法師  
大輪

盲点をついてる母のひとりごと  
信子

お互いに盲点のある凡夫婦  
冬葉

そこまでは読んでなかつた違約金  
盲点を突かれて怯まない雑草  
盲点へまっ赤な蓋微を挿しておく  
つまりいた石に盲点見透かされ

雅文  
金太  
茜

盲点でびくり箱が踊り出す  
盲点に接着剤を流しこむ

一風  
森子  
寿美子

矢印の先には穴が掘つてある  
満腹の時は盲点気にしない  
盲点は心齋橋に落ちてあり

洞庵  
大輪  
千梢

盲点を突く作戦は考えぬ  
盲点へ先回りするアワダチ草

正坊  
富湖

ばくの盲点教えてくれるふくらはぎ

人も  
たもつ

盲点を突く鉛筆を尖らせる

地  
諷云児

盲点に絆創膏が貼つてある

天  
しげお

傘立てで盲点をつく女傘

軸  
岳人

兼題「しんみり」 橘高薫風選

しんみりと雪に消え去るはんの舞  
しんみりと梅が咲いて庭の隅  
他人ごとで無ししんみりとニュース聞く

章久  
正子  
満津子

しんみりと新内を聞く柳橋  
娘は嫁ぎ父は一人の墨をする

洋敏  
たもつ

しんみりとすれば病に付け込まれ  
執刀医ほどに悟れず朝を待つ

桂香  
雅文

麻酔からさめてしんみり妻を見る  
大夕焼けもう病状にふれません  
しんみりの嫌いな仏通夜の席  
しんみりも美人絵になる通夜の席  
もう誰もしんみりしない七回忌  
しんみりと語ればうんざりしている  
しんみりと話したことのない夫婦  
しんみりといえはほぐれるもつれ糸  
遠まかりしんみりとする別れです  
帰つてからしんみりとする別れです  
しんみりと頷いてやる聞き上手  
しんみりと聞く母さんの裏はなし  
しんみりとしてきた話に窓をあけ  
しんみりと飲むものでなし春の酒  
しんみりとしとれず亡夫の艶話  
しんみりと仏間に座ることもある  
ここいらとしんみり妥協点さぐる  
しんみりとしたい時ほどはしゃぐ僕  
うどん屋でしんみり恋をあたためる  
ひれ酒は過去をしんみり語らせる  
年金の枠でしんみり差し向かい  
しんみりと話すにもってこいの雪  
しんみりと苦菜足跡噛みしめる  
しんみりと過ぎた昔をつむぐ夜  
しんみりと話す男の負け戦  
しんみりと聞いた話に嘘があり  
お葬式しんみりして暇がない  
しんみりと掌からこぼれる豆の数  
しんみりとユダと話がしたかった

ますみ  
扶美代  
隆盛  
セツ子  
楓楽  
千梢  
希久子  
頂留子  
恵子  
信子  
鹿太  
鹿太  
千里  
楓楽  
寿美子  
保子  
萬的  
千秀  
美房  
保子  
柳弘  
希久子  
悟郎  
弘直  
英子  
義子  
泰子  
正坊

しんみりと聞いている振りに騙される  
天笑  
父ちゃんがしんみり変な夕ごはん  
しんみりとしてたら犬が舐めに来る  
しんみりと詐欺師は話聞いてくれ  
竹山師逝く怒涛の海も静  
葬儀屋はしんみりとさせ無駄もなし  
しんみりの話はお茶の方が良い  
誕生日しんみり命ありがとう  
しんみりと総理は実のない話

住  
月子  
大輪  
千代  
義子  
弘一  
笛生  
かすみ  
グン吉

雪涅槃 武原はん女舞いおさめ  
薫風

お詫び

年末・年始にかけて新装開店  
と義母の癌闘病中も重なり賀状  
及び寒中見舞も差上げる時間と  
ゆとりがなく大へん失礼いたし  
ました

平成十年 春隣

板尾 岳人

# お世直し

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳ねやがわ

江口

度報

悪人の小憎たらしい門構え  
悪人は六法全書読んでいる  
ほんとうの悪人顔は現わさぬ  
時々許容範囲の悪人に  
悪人も赤絨毯を闊歩する  
逆転のお陰でとれた肩のこり  
ほろ苦い逆転だった髪洗う  
形勢が逆転したた水面下  
逆転を狙うトカゲが尻尾切る  
サッカーの逆転にわく視聴率  
マザーテレサの優しさ欲しい老人に  
年の暮れ温い情けをせびられる  
知らぬ間に支えられてる子の温み  
温い風待つ少年の風車  
甘い実が熟れる母の樹が温い  
普段着て駅まで送る温い人  
花嫁の荷物へ祈る空模様  
合格の声聞くまでは鈴鳴らす  
点滴へ祈る思いで待つ夜明け

小路 惠子 高栄 勇太朗 三峰 波留吉 庸碌 とし子 頂留子 ルイ子 権太 一風 洋 白洋 たもつ 英千子 博泉 朝子

手術中厚い扉へ祈る父母  
しあわせが消えないように祈ってる  
大凶のみくじ祈りを深くする  
祈ること何もないけど手を合わせ  
幸せなときは忘れてる祈り  
縄のれん上司を裁く怪気炎  
慌てても同じと暮れの飲み仲間  
御好意はまっすぐ受けて疑わず  
困ったなおまわりさんがご多忙で  
点と点つなぎ合わせている生活  
好景氣祈るみんなで風をあげ

川柳塔打吹

米田

幸子報

仁清 茜 冬葉 文秋 時弘 一途 光子 あやめ かすみ 亜成 度 季芳 松盛 和枝 一京 セツ子 京子 信子 芳光 禎元 玲泉 富枝 克枝 しろう 順子 博丈 勝見

旅に出てはらはら宇宙飛んでいる  
にこやかな笑顔の陰に鬼を見た  
にこやかな笑顔の裏に罫がある  
あの秘話はそのままそと持つて逝く  
黒梓を苦笑いさす秘話がある  
水虫に永住された足の秘話  
終焉の秘話一つ乗せ花いかだ  
独立を目指す覚悟の上の秘話  
ポケットの穴から秘話が駆け出す  
秘話のはずだけどもんが知っていた  
零戦の秘話神風とともに消え  
とっておきの秘話を喋るに酒が要り  
ふところにたくさん秘話がある女将  
ラップしておかぬと秘話が匂い出す

川柳塔きやらぼく

政岡日枝子報

多哥由 孝恵 かつみ 康子 よしえ 玲子 雄々 弘朗 節子 玲坊 螢 月子 天笑 幸子 美世 恵子 花子 富美子 晶子 春枝 荒介 蘭 天雀 千春 玲子 寿々子 八重子

思い出がまた増えていく初詣で  
自叙伝に嘘がないとは仙人だ

後手後手の手立てに寒くなるばかり  
銀行も株屋も洗う洗濯機

新しい楽器がポストの中にある  
ファイナレは天女の舞がいいかしら

春や春娘が嫁に行くと言う  
不器用な私草笛でも吹こう

真冬日の海が手招きして迷う  
それからの椿に見えてきた世界

リハビリの結んで開き手を打とう  
氣くばりのとても優しいやぶ椿

眩しすぎる上りホームの標準語  
尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

年老いて頭のアンテナにぶくなり  
アンテナを立てると来ますNHK

生き易いようにアンテナ向き変える  
三日には忘れる元旦の決意

おみくじに今年の計を指南され  
元旦に空高く舞う凧の糸

初日の出バジヤマで拝む十二階  
また一つ年を重ねて寅の春

初詣で惨事多難に祈願する  
元旦の三福まいり家族つれ

元旦のてのひらに置く白い紙  
真つ白な地図元旦に用意する

若者を諭す易者のうすあかり  
ピコピコと走るライトの淋しい赤

ふみき ぬき なるみ 亜弥 正子 田鶴 瑞枝 千代 すみえ てい子 日枝子

初風呂のあかりは老いをあからさま  
受験の灯消えて眠りが深くなる  
鬼ら雪崩れて芒ヶ原へ灯をともし  
商店街の愛想よくした不況風  
元日のめでたき年々深くなる  
神の声聞こえそうなり冬の星  
初詣で全力で投げますおサイ銭  
大あばれ期待してますタイガース  
よく笑う妻は寒さに強い人  
われおれに変わってからのうまい酒  
若い夢時には見ている喜寿の坂  
観葉植物の凄しい食欲  
恋の唄聞いて響かぬ老いの胸  
手を触れて張子の虎をうなずかせ  
喫せよ初春大雪の永田町

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

虎の威を借り裏口を通り抜け  
平和だな張り子の虎が首を振る  
襖絵の虎に嗤われないように  
カレンダーの虎が見守る老いの部屋  
動物園虎は静かに目を閉じる  
虎の威を借りるつもりが酔いつぶれ  
外またで茶髪でめめた娘の晴れ着  
晴れ着きた女房にうんと使われる  
晴れ着きて感動もらう母の席  
大山の晴れ着は白い白い雪  
ふつつかな娘を託す日の晴れ着  
つつましく優しい晴れ着着る

富美子 芳子 武庫坊 光穂 三代子 愛 とみ子 紫香 伊三郎 ヤス子 ハツエ 久子 薫風 与根一 静恵 螢 房子 満江 一葉 登志子 早苗 邦代 久枝 桂子 寿美子

海鳴りは未来の曲も奏でて  
未来像時の流れが変えて行く  
除夜の鐘未来の扉叩く音  
未来図を生活の中にもいつも置く  
子の未来孫の未来へ欲が出る  
ネクタイを畳む未来が今そこに  
ひたひたと春追う音や奴風  
宇宙まで続く連風空の果て  
糸切れた凧は一夜を果て泣く  
上昇気流凧は気楽な新春の夢  
幸せな凧スミーズに揺れている  
連凧に乗せて伝わるいい便り  
仲よしに取り残されて花手桶  
結び目をいつも確かめ合う夫婦  
影法師いつも仲よし離れない

日出子 登美子 明子 知恵子 アキエ きみ子 義良 茂美 きみえ 多賀子 静江 太泡 米子 畔 みえ

佳句地十選 (2月号から)

福井 桂 香

歲月へ敵も愛しいものうち  
国境に難儀な種が落ちている  
ふところに寂しい両の手を入れる  
嘘泣きが本当になった名残り月  
移り香が菊なら妻も叱るまい  
同居するこれから私試される  
センセイの腰巾着が法螺を吹く  
熱れ切ったメロン男とすぐ契る  
澄んだ空僕も汚してきた一人  
恐ろしいニュース見ながら夕こはん

田実子 湖風 螢 千歩 孝雄 スミ子 よしえ 雅文 秀男 正一

久しぶり大地と仲よし試歩の杖  
仲よしに話しくい日金のこと  
仲よしが出逢うといつも塙が空く

南大阪川柳会

吉川 寿美報

行き詰り視点を交えてする思案  
銀行を変える思案を妻とする  
正月の御節セツトを買うまいか  
五百羅漢思案のお顔も二つ三つ  
鬼太鼓へ頼りに迫る波の音  
下心あつて頼りに褒めそやし  
やり直し決めた二人に雪頻り  
情熱が頼りにペンを走らせる  
若者の心頼りに向きを変え  
痛いところ衝かれ頼りに水を飲む  
ひと頼り騒いだ後の虚脱感  
心得ていても頼りと出るあくび  
事実だけ見据えて夢のないカラス  
組立てた仮説の上にある事実  
独り言九官鳥が知る事実  
へソクリが箆筒の底にある事実  
悪事千里お天道さまはお見とおし  
釣つたのは事実と魚拓しやべりだす  
あくび出る愛がこわれてゆく事実  
表向き風に従う風見鶏  
方田に従う水を見て学ぶ  
大勢に従い僕が消えている  
身ごもつた日から男従えて  
人間を従え犬が散歩する

久しぶり大地と仲よし試歩の杖  
仲よしに話しくい日金のこと  
仲よしが出逢うといつも塙が空く

芳枝 午朗 叮紅  
庸佑 としお  
勝美 萬的 志華子 直子 凡子 悟郎 重人 三男 秋子 柳伸 千里 章久 正博 頂留子 柳宏子 庸佑 丹吉 東雲 文秋

星占い纏る思いで従いてゆく  
人生の大火に耐えて光り出す  
下火だが父の種火は燃えている  
下火になった枯葉にはほこり芽焼ける  
父さんの夜遊び下火になります  
ブーム去って雨の雫をみえています

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

店員を信じて今日も恙なし  
先代の遺した庭で秋の月  
ひぐらしよ泣くなコスモス咲き出した  
ひぐらしが鳴くから私も帰ります  
相性がいいの今宵酒うまい  
ひぐらしの明日を想う茜雲  
早起きの得で茜を拝みます  
相性というしがらみをはね返す  
使用済み大事に大事にしまひこみ  
鋒のちびた筆だが未だ捨てられず  
肝心のところで思案が逃げたがり  
ひぐらしが鳴くころ嫁に行つたげな

西宮北口川柳会

亀岡 哲子報

一番にならぬとも良し健やかに  
一隅の明るさもらう寒椿  
一と十始めと終りのコンビ  
賽銭は家族一緒でございませう  
一病とバランス取つてうまく生き  
くもの糸一本降りて来る決意  
元旦にしみじみ妻の顔を見た

星占い纏る思いで従いてゆく  
人生の大火に耐えて光り出す  
下火だが父の種火は燃えている  
下火になった枯葉にはほこり芽焼ける  
父さんの夜遊び下火になります  
ブーム去って雨の雫をみえています

シメ子 たもつ 哲郎 真砂 咲美 菜々 ぶじ子 かつ子 聖子 好栄 ちよえ 英子 はるみ 鈴江 博利 清泉 白汀 澄子 富喜子 キク子 しげお 江美 哲嗣

元日の寂しさ仏に箸がない  
シンデレラ夢見て踊るトージュエーズ  
ブティックの魔法に弱いシンデレラ  
シンデレラあつてなく散るタイアナ妃  
シンデレラのシナリオ変えたタイアナ妃  
真ん中に明るい人を座らせる  
明るい方へ鬼もだんだん寄つていく  
花の首明るい方へ向きたがる  
お早うと明るい声でゴミを出す  
傍にいてほしいと明るく言われた日  
明るい性格人を裏切らぬ  
神さまはたいがいいくじで決めなさる  
行き先の決まらぬままの羽織い  
泣く時はひとり決めているピエロ  
決めかねるけれど最後のご縁かも  
決心がついたら靴が軽くなり  
夫婦の和保つルールは決めてある  
大正もちと遠くなる年女  
福笹が信心深い手に揺れる  
表札も冷たい顔する冬の月  
多数決便利でそして恐ろしい  
野次馬の真ん中にいる父の顔  
冬だ冬だと北風小僧いばつている

わかあゆ川柳会  
松本はるみ報

はたる川柳同好会

井上 直次報

いさかしの残りが醒めぬ朝の冷え  
元朝の凜と清しい万歩計  
仲直り出来る朝のお味噌汁  
暖冬が朝の散歩を続けさせ

星占い纏る思いで従いてゆく  
人生の大火に耐えて光り出す  
下火だが父の種火は燃えている  
下火になった枯葉にはほこり芽焼ける  
父さんの夜遊び下火になります  
ブーム去って雨の雫をみえています

晴美 諷云児 求芽 トミエ 曙蝶 透太 いたゑ たす子 義子 白漢子 はつ絵 春蘭 鹿太 ひろ子 正坊 哲子 とみ子 二南 比ろ志 てる 石舟 みつ子 直次 喜美子 雪子

鮭を贈ると椎茸が戻つて来

お別れに贈る言葉はありがと

財産はないが生き様子に贈る

贈られた電子手帳をもらあまし

好物ときけば贈つてみたくなる

贈られし古伊万里の壺もてあまし

贈られた色紙が飾る春の床

葉書では失礼かもと手紙書く

年賀状出してた友が減つてくる

一枚の葉書人生左右する

一枚の絵ハガキからの村おこし

絵はがきの一枚買ひも旅の味

欠席のハガキに近況書きづら

長電話になりそつハガキで用を足す

仕舞いにはギユギユ詰めになるハガキ

焼地跡やすらぎ地藏掌を合わせ

玉子焼弁当ぬく母の味

君のひと言 百万本のバラよりも

中邪よりわたしの手贈ります

風邪の妻朝寝の顔の深い皺

朝夕の読経日課で一人居る

深呼吸してからハガキ裏返す

境界を悟つてからの楽隠居

反論の時だと思ふ煙草消す

難題を残して暮れる丑の年

ラブ神戸老いも若きもルミナリエ

明光

博史

祥洋

保子

敞子

桂子

善守

正安

正三郎

たけお

勝清

昭子

まみ子

馬洗

竹二

螢柳

久子

よしろう

キヨ子

英子

一壺

聡

辰子

たけし

さとみ

明日の風にかけよう思案やめにする

競走後兎は月へ亀は海

生き抜けば朗報聞ける幸がある

財布のひも締めて年末やりすこし

年調に四苦八苦して挑む椅子

金策を済ませオ里昂座がきれい

よく迂る口で見較べられた顔

キタに来てミナミの味をほめて

比べる目持たず一途に好きになる

バラバラに見れば勝つて目鼻だち

しぶんで比較ばかりして暮らす

偏差値でくすれてしまふ夢いくつ

震災でくすれたままで早三年

搦め手をゆくりくすす甘い声

不況風人情までがくずれがち

ワイングラス張つてた肩がくずれ出し

泣きくずれる肩を抱きたいと思つ

くずれない髪アデランスにちがいない

コメントも出来ぬ男が法螺を吹き

不都合はノーコメントで押し通す

コメントが前と後とで違つて

一年のコメント倒で締めくくる

逆転のヒーロー声をつまらせる

コメントはない百年を生きただけ

温暖化 孫子の未来おびやかす

ダン吉

猿杏

敏

専平

吐太

金太

忠宏

洞庵

絢子

扶美代

美代子

悦子

利武

重人

志洋

りつえ

一屯

みつこ

四三郎

庸佑

信子

和樹

晋

かつみ

泰子

思うこととことん言うて仲がいい

とことんの一步手前でホコおさめ

蟻が齧ると象の足でも疼く

故里に疼く心を癒やされる

疼くこころ救つてくれる子の寝顔

とたんに無口疼く古傷あるらしい

疼く背を押す疼く手の温かさ

古傷の疼きが今を遠くする

新任地渾名が先に知れわた

新年に煩惱をまた背負い込む

まあたらしい陽に少しだけ願ひごと

新しい夢あふれるる花の種

新しい帽子は出好き春を待つ

吹き抜ける風やわらかく春踊る

春の山グレイピンクと七変化

孫誕生一足早く春が来る

菜の花や瀬戸の乙女の早春賦

手の甲に春をのせてる木の芽和え

神獸鏡新春からヒミコ目を覚ます

嫁入りは五種類の帯持たす母

角帯が男の顔をひきしめる

新しい命輝く家族の灯

しゅんとせんかと叱つてくれる母の帯

川柳ささやま

酒井

朝子

シマ子

弘一

美幸

一風

頂留子

年人

泰

三男

民子

賢子

剛治

宏

弘直

登美子

透太

隆盛

欣之

度

東雲

とみを

夕花

洋

靖子報

恵美

とよ子

純子

美智子

遠慮した猫が時どき謀反する  
万策が尽きて信心深くなる  
大空に夢が舞うよな十二月  
野仏へ誰が信心野辺の菊  
錠剤を飲んで枯れゆく十二月  
欲ばかり頼む信心神仏  
封筒の中で遠慮の母がいる  
信心の杖を頼りに一歩ずつ  
誤字脱字証拠の齡はかくせない  
何よりの信心先祖へ掌を合わす  
十二月地球は止つたりしない  
極楽へ行つた証拠はないお布施  
信心が意外な幸運くれました

京都塔の会

松川

杜的報

年金の枠で足掻いている余生  
行草の足掻き総理のいかり肩  
鈍行の中で足掻いている時間  
もがいても足掻いても僕は海底魚  
見張り槽の鐘は不動で平和  
煩惱のかたまり百八の鐘を聴く  
横立ちし亡母との辺り除夜の鐘  
横町の老舗生きてる削り節  
鉛筆は姉が削ってくれました  
酒代を削って孫にお年玉  
薬一本掴むまではと身を削る  
終章にわたしを削る愛がある  
夫婦別姓旧姓欄の無い名簿  
名も変り住所もかえている名簿

多美子 夢だつた人を名簿からははずす  
すず子 故人になつても序列のある名簿  
末野 由緒ある鐘の響きをじつと聞く  
一 繁 邪心みな捨てよと寺の鐘が鳴る  
八重子 開発という名で地球削られる  
素水 鉛筆を削る素朴な木の匂い  
とみ子 同郷と知つた名簿で近くなり  
つや子 名簿ではうれしい彼が横にいる  
ヒサ子 深爪がひりひり亡父の小言かも  
和子 ひとときを大らか木喰の微笑仏  
芳郎 非常階段落葉遊ぶにまかせたり  
可住 実りの秋をふところに詰め旅終る  
靖子 湖東三山鐘が紅葉に彩添える  
 菓茸きの家守る老女の眼がやさし  
 大あくび明日は何をしようかな

うぶみ川柳会

西村

黙光報

カラオケは鐘の一つが面白い  
村芝居父さん今日はお姫さま  
嘘いくつ埋めると心風ぐだろ  
順番が狂つてどぶに埋められる  
煩惱を打ち消す鐘をついている  
綿密な女が埋まるおとす穴  
撞かれたも響かぬ鐘になり果てる  
尻餅の穴埋めてゆく歳月よ  
白鳥が一羽視野から飛びたため  
幻を追う国境線のない地球  
子育てにいい子いい子の芝居する

栄 おしどりも時にしている仲たがい  
礫 無職にもシングルベルの鐘は鳴る  
杜的 言い負けた背中に寺の鐘が鳴る  
庸佑 川柳塔ふくべ川柳会 橋本多哥由報  
修水 一生の願いと言われ貸した顔  
英一 いい月夜生きてることに感謝する  
ただし 喪服着た女に魅力見えかくれ  
とし子 辞書一つ我が生涯の杖とする  
福子 生きてる限り感謝を神にする  
達子 悔しさを癒やす杯小さすぎ  
春蘭 友の訃へ杯重い冬の章  
年代表 夜明けだよ木の芽と共に深呼吸  
武庫坊 宇宙まで夢が広がる年の明け  
美穂 玉砂利の音で大社は明けてくる  
水客 元旦が明けた障子にころげ込む  
 祝杯へ大海原のように注ぐ  
 大切に来る回覧板に縛られる  
 大寒に鍵は心にしめてある  
 朝もやに明けて市場は活気づく  
 竹の芽の香りに春がしのび寄る  
 欲一杯上げて願う初詣で  
 金杯は座布団敷いて寝てござる  
 祝杯に盛られた思いあふれ出る  
 夜明けまで語る娘の里帰り  
 年明け晴れてのれんが客を待つ

正和 ユリ子 雄人 遊子 明美 登美枝 ひろ子 宣子 静生  
 幸次郎 宏章 孝子 道子 清子 せつ子 伝住 芳之 庸二 登美 敬之介  
 由多香 雄々 千秋 黙光 舍人 崇  
 艶子報 西原  
 川柳塔おとり  
 橋本多哥由報

精一杯生きた証の笑みが湧く  
一杯も飲まない友と仲が良い  
一杯が二杯新年おめでどう  
原点の三三九度にたちかえる  
休日はあなたのために空けておく

### 川柳塔唐津支部

久保

### 正剣報

年金でやりくりしても三度食う

輝夫

宅配のお歳暮今日も隣まで

輝夫

消火した分だけ保険削られる

高明

身の程を整備点検旅に出る

タミ

散る紅葉掃いて女房に叱られる

幸夫

齢だからと言わんばかりの婦長の目

勝視

繰り返し脳裏へ去来若かりし

實

生かされて家族と聞いた除夜の鐘

晴翠

柚子風呂へ今年の憂さを捨てにくい

虹汀

海底宇宙は夢かナニ一世紀

あき

定年や酒はうまいし妻は美女

四郎

総会屋に出前を頼む用がない

正剣

せめて畳だけでもという倦怠期

和代

こぼれ陽が畳に揺られて蝶になる

登美代

結婚を交わす両家の畳替え

みね

三畳に机一つの居候

美子

畳綿背中にまとい冬籠もり

三千子

大あくら男の顔にする畳

百合子

言いつのむなしを抱いて石畳

めぐみ

青畳と呼吸が合った裾さばき

章子

有象無象畳に刻む人生譜

初子

他愛ない風の噂にしばられる

美寿子

乗りそこね風が運んだ宝船

正一

湯豆腐で今夜も過ごす不況風

正嗣

自問自答風の流れて身を委ね

千秀

一切を赦すと温い風が吹く

忍

村は無風で今も昔を捨てられぬ

公子

男一匹無風地帯を善しとせず

保州

丸い輪を三角にするつむじ風

碧

一つ捨て二つ拾った風の道

美智子

唯我独尊いつか頭を打つだろう

秀男

パワー全開独りになって翔ぶ女

町子

真ん中で孤独と向い合っている

親路

ワイングラスに独りの時間とし込める

昭枝

バリヤーを張って孤独なバラの赤

桂香

勢いよく回ったコマの孤独感

朱夏

低金利やがてバンクへ保管料

和子

あべこべに組めばバズルも解けてくる

嘉平

借金をしている方が派手に生き

当代

逆縁を幾たび見たか老母の背な

当

### 川柳大阪

坊農

### 柳弘報

いさぎよく切り替えなさい男なら

信醉

わたくしのお肌の期限死ぬまでよ

中<sup>3</sup>圭

適齢期のびたとと言っても期限あり

真紀

銀行へいそぐ年金振り込み日

川柳高知

川竹

松風報

速やかな薬はしがる日本丸

比呂志

先生も生徒もおなじ老人会

先生

先生の視線と合った大欠伸

快風

捻子巻かれ油差されて古時計

しげお

買いだめが冷蔵庫で期限切れ

鉄心

期限ある命図太く生きてやる

希久志

賞味期限切れても私生きてます

敏

宇宙には地球に変わる星がない

川童

チェンジする勇気下さい私にも

かよこ

母さんの生きるリズムに隙はなし

美すゞ

速やかに目標目指す蟻の列

洛酔

速やかな処理にハンコの数増やす

清道

期限など言わぬ友情貸してくれ

雅巢

髪の毛も期限切れたかよう抜け

まつお

交代で風邪を引いてる仲のよさ

一歩

十二月借金払いに追われます

良花

無期限に花嫁探す過疎の里

咲笑

無期限に尽くしてくれる母がいる

咲笑

主婦の座を嫁に渡して友が増え

柳昌

トラ年の妻に敷かれておく平和

本蔭棒

代償を払う地球が欠けている

ダン吉

本当に着いたんやろか払い込み

三十四

速やかに神はわたしを許さない

笑風

激安と聞き速やかに飛んで行く

多香

速やかにできぬ清掃年の暮れ

重人

払うもの払うて除夜の鐘が澄む

柳弘

一年の憂さ払う気の晦日は

重人

一年の憂さ払う気の晦日は

重人

一年の憂さ払う気の晦日は

重人

半分に切ったみかんに味がない  
遺産相続妻半分は多過ぎる  
目標の半分でよいダイエツト  
半分でいいわと女猪口を出し  
長電話ドラマ半分見そこなう  
仏像の横へ私を置いてみる  
夫婦して余生楽しむツリーング  
国中の柿鈴生りで熟れる秋  
好きですと言えぬ夫のやさしい目  
四面楚歌私の味方お腹の児  
味方だと信じた妻の票がない  
車間距離おいて平和な三世代  
半世紀少しばやけた平和論  
視点変え心の平和取り戻し  
米の味どうのこうのという平和

川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

しきたりの城を出られぬ座りだこ  
朝が来るまでに取らねば夜叉の面  
卵割る既に先手は打ってある  
先手とれ父の語録の光る文字  
魂胆が読めた先手を打ってやる  
早々と先手の名刺置いてある  
葬儀屋に先手を打たしてはならぬ  
歩を打った先手で顔色が変わる  
各論が見えて先手の釘を打つ  
先手とる息子近頃たくましい  
先手打つ頭脳についてこぬ身体  
御希望に添いかねますと先手打つ

圭風 孝雄 酒仙 佳風 菊野 有佳 竹萌 幸泉 テルミ 朱坊 六峰 子龍 和江 松風

ライバルに先手取られて従いて行く  
派出所の巡查と朝のご挨拶  
朝市の笑顔に元氣貰ってくる  
朝が来ぬ闇夜は無いと傲をくれ  
いい目覚めゆつくり朝のうまさ吸う  
ハミングと共に味噌汁匂う朝  
朝というひびきへ白い飯を炊く  
おはようの声で家族のリズム見る  
さわやかな朝を信じる靴の紐  
天下りぬくぬく座るいいポスト  
居座ると決めて馬鹿にもなってみる  
古傷に触れると座りだこ疼く  
座る位置決める苦勞は明かされず  
思い出をたずねて座る花の下  
座りだこ三人育てたお針箱  
座っても寝てもひとり膝小僧  
争わぬ主義で斜めに座る癖

紀美女 紫香 柳宏子 三男 吞天 誠子 佐代子 君枝 和重 萬的 金太 光代 輝子 千寿子 三枝子 克子 螢報 睦子 三千代 保子 かつ乃 弘子 喜与志 和子 汲香

反当り八俣作り米余る  
鄭重に土に返した古俵  
父母はあの山裾に安らかに  
哨煙の裾野ゆうゆう牛遊ぶ  
ライバルが私の裾を踏みにくる  
皺寄せがみんな裾野の方へ来る  
裾まくるほどの馬力が落ちてきた  
嫁ご娘の裾に礼儀のしつけ糸  
裾さばき見事に敵は去ってゆき  
嫁のこと日記の中に褒めておく  
いまさらねえ夫の日記に興味ない  
間魔さん俺の日記をつけている  
弱音だけ溜まる日記になっている  
法螺吹きが法螺の日記で締めくくる  
古日記狙い撃ちする妻の乱  
日記には喜怒哀楽がとじてある  
病床に日記が書けるようになり  
因習に堪えた涙の古日記  
古日記に畳んだ恋のページ  
ときめきも追憶となる旅日記

実満 野節 武子 野草 宣子 ひかり 久枝 一京 孔美子 隆風 盛良 八重子 公子 くに子 きみ子 螢

川柳塔鹿野みか月 土橋

畝一俵の希望をのせる雪になる  
農政に左遷をくった米俵  
裾野への白いなあが道続く  
山裾をぐるり七草摘んでくる  
一月はしっかり書いてある日記  
いやなことご破算にして初日記  
口下手で上手に嘘がつけません  
おもしろい木の株磨くたまみかく  
目鼻口それぞれ味のあるつくり  
依ごと食べさせたくてヒトメボレ

睦子 三千代 保子 かつ乃 弘子 喜与志 和子 汲香

緊張の連続初アルバイト  
十六歳バイトデビュー果たしたぞ  
孝行のひとつ黙って跡を継ぐ  
たまに来て親の肩揉む次男坊  
おはようの一言親は安堵する  
孝行の平均点は出しにくい  
初春を元気に米寿おらが春

一路報 高史子 高千枝 蘭幸 静風 美佐雄 寿枝 夏喜

思考力鈍る炬燵の昼下がりに  
 新年に地球の健康誓うなり  
 日だまりで何かが芽吹きそつな音  
 少年のポケット青い鍵がある  
 味方にも渡せぬ鍵が一つある  
 鍵盤と遊んで母とお留守番  
 青空へ心の鍵を解き放つ  
 自閉症治す扉の鍵がない  
 火葬場の鍵よこんなにかるいのか  
 いつまでも続く苦勞は世にはない  
 この続きは三途の川の鬼に言う  
 豊作が続き豊かになれぬ国  
 すうーとと一緒に居たいおひとです  
 どこまでも続く宇宙の中にいる  
 続編を書こう退院第一歩  
 続編がいつか途切れる日を想う  
 帯の芯あたり女の情を秘め  
 木枯しへ椿の花芯身構える  
 4Bの芯でしっかり自己主張  
 五十年曲がらぬ芯について来た  
 まっすぐな芯がときには嫌われる  
 大臣の答弁芯が見当たらぬ  
 芯として自分の位置を考える

大原川柳社

矢内寿恵子報

汎美 比呂子 一枝 喜美子 喜久恵 房久恵 真由美 不朽 清水 歟 カツ子 幸子 蝸牛 笑子 菁居 栄恵 静佳 千代美 千華 笹舟 節夫 一路

メロディーの余情たつぷり歩が和む  
 苦を一つ捨てきる母の返し針  
 苦勞など口にしません座りだこ  
 年の暮れ寒い財布の独り言  
 母逝つて余情の渦と差し向かい  
 苦勞する細い腕にも意地がある  
 苦勞した妻を愚妻と申されず  
 あの日から余情くすぶる火消壺  
 幾山河苦勞は夫と分け合つて  
 人それぞれ苦勞を計る升がない  
 浮雲に苦勞話の二つ三つ  
 丸い背に古い苦勞がのつている  
 忘れたい事があふれる年の暮れ  
 苦勞した数だけ丸いお人柄  
 孤児帰る苦勞は言わぬ父母の墓  
 ありし日の余情に咽る葬の列  
 逢つてきた傘の雫にある余情  
 苦勞して苦勞知らずの子を育て

川柳塔みぞくち

小西

雄々報

すみえ 玉恵 辰江 悦子 妻子 喜美子 正己 巴子 こふゆ 敏子 幸子 朝代 美佐子 ひでの 昭子 和子 あすなろ 寿恵子 久子 和代 公美枝 鈴枝 智恵子 弘子 信敬 豊枝 正光

バーゲンにつられ余分な品を買い  
 バーゲンの広告迷うほど入る  
 バーゲンに見え隠れする人の欲  
 やりくりの峠を越えた妻の愛  
 やりくりの上手な指にあるダイヤ  
 もう一人無理やり会わす秘書の腕  
 やりくりがつかず白紙のペンを置く  
 やりくりを隠す笑顔に深いしわ  
 やりくりの顔がほころぶ温い酒  
 おいしさへ油断で戻るダイヤット  
 大手とか四大の名に油断した  
 うっかりと相槌打っている油断  
 年金に油断していた低金利  
 相手の油断をついた王手飛車  
 美辞麗句酔わされ油断する私  
 油断も隙もならぬお方と見られてる  
 子想屋の達者な口に聞き惚れる  
 予想だにしないあの日のきのこ雲  
 天空に光のラッシュルミニナリエ  
 手の位置に困る美人と乗るラッシュ  
 ラッシュアワー誰かがわあつと怒鳴りそう  
 旅行する三日前から酔つている  
 故郷が帰省ラッシュで遠くなる  
 甲子園の土全国の旅に出る  
 可愛い子旅に出したら帰らない  
 講師師みたいなベテランバスガイド  
 トラの子が瘦せて戻つた株の旅

岸和田川柳会

長谷川呂万報

康女 静江 雄々 敏光 松風 洞庵 萬的 一齋 狸村 信博 路子 苑子 盛之 鹿太郎 甚一 白光子 ひで 一弥 金太 ダン吉 東雲 美津子 文時 美智子 吉三 基

おーいおい銀河列車が旅を待つ  
新聞と牛乳止めてバリ旅行  
お財布も私も疲れ旅終わる  
駅弁を食べて回顧のフルムーン

高槻川柳サークル卯の花 川島颯云見報

秒針をとめて命をのぼしたい  
助かった命をみんなして囲む  
蟻の命をまたいで通る小さな靴  
貝になり再起の命温める

慣れた頃山みくびつていた命  
命二つ今年も揃う夫婦著  
雨の日は信号おぼろ命おぼろに  
うかつにも男に貰う果し状

ふく刺しが怖くて皿に笑われる  
用心のしすぎ置場所また忘れ  
用心が過ぎて隠した鍵がない  
平均寿命までのはんびりある時間

ライバルがのんびり構え気が揉める  
もう師走のんびり春を待つことに  
のんびりと極楽ゆきの汽車を待つ  
ポンとたたかれのんびりやの目が醒めた

目を伏せて言うから嘘に聞こえます  
日記帳をゆつくり伏せる今日暮れる  
目を伏せて頭ごなしを噛み分ける  
女かなし伏せの姿勢で耐えている

阿呆なめに遇った話は伏せておく  
切り札が伏せてあるから落ち着ける  
腹割って話せば埋まる深い溝

蛙城 呂万 さまよ 富志子  
とし子 紫香 スミ子 萬的 柳宏子 大輔 比ろ志 澄子 稲子 芳治 克舟 石舟 一笛 杜的 節子 とみ子 秀夫 静江 あやめ 高栄 波留吉

義理ひとつ済ませ茶房のレモンテイ  
かみしめた言葉にあつたかくし味  
計が続く枯葉が散つてゆくように  
朝の靴磨いで許す事もある  
特売のチラシがお辞儀する師走  
極楽へ行けたら浮気してやろう  
生かされて平均寿命命ひた走る

川柳後楽吟社

從野

健一報

ひいきみに見ても私の負けを知る  
父の足一生アクセル踏みつづけ  
少子化の子供に地雷踏ませない  
ビル街に現代病が潜んでる  
泥舟に乗り込んで知る身の重さ  
山肌が爪突き立てるブルドーザー  
日が落ちるなあが影が枯野いく  
去年よりさびしき深い年の暮れ  
師走風もつ小道具は欲しいのさ  
どの口も開けばしつかり自己主張  
食べる相談女は喜々として話し  
悲しい日なのに酒を飲んでいます  
貝柱緩み寡黙な妻喋る  
隠し持つ刺にさされる心地よさ  
隠れ里今は都会のストリー  
返り血を浴びない距離で旗を振る  
人間にきつと戻れる里の川  
人生の炎小さくなる余生  
元旦というのに救急車が走り  
カンテラの炎と北の旅に酔う

茶の子 富美子 白漢子 泰雄 しの お 諷云児  
美智子 佐加恵 吉則 信善 幸子 敏明 金吾 柳五郎 博友 忠成 浄美 拓治 青銅 邦季 まさお 桃風 道博 たけ志 秋月 正秀

新年へ張り子の虎が身構える  
大正の生まれで涙もろくなり  
秋の風おんなの香水そじませ  
鞆を開けるとハトが様子を見にくる  
腹割った話が続く茶の間の灯

川柳東大阪

森下

愛論報

母の背をモデルに登る余生坂  
すっぴんで家族団欒するモデル  
モデルから筋道変えた泣き笑い  
受胎したらしい悩みが深くなる  
慈悲深い五百羅漢と語る秋  
長崎の鐘に祈りが深くなる  
青空を覗いて見たい深海魚  
泥かぶる覚悟の辞表叩きつけ  
損得で生きてころろに寒い風  
大損をしたというのはお金持ち  
学童を守る黄色い旗振つて  
恥じらるを忘れてた守る椅子  
お守りの亡母の写真に励まされ  
ドアチェーン女に守る城がある  
初恋のネーム残している机  
定退の机の傷を撫でている  
チャップ台にも変わる机が一つある  
事務机花一輪へ茶がうまい

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

地に足をつけた生活が見直され  
ワラ屋根に柿のスタレで昏れてゆく

哲郎 照路 健一 草風 鮫虎狼  
あや子 柳伸 東雲 治也 猪太郎 雅文 晋吾 朝子 たもつ シマ子 恭昌 賢子 湖風 正博 柳宏子 文秋 愛論 かがり あきら

悔い一つ抱いて酌む酒苦くなる  
金融も冬が来たのか風邪を引き  
福耳に頼りすぎたか出来ぬ金  
落葉掃きこの家どうやら茶人らし  
足が地に着くのが少し遅かった  
メモ帳に年末出費の多い事  
宴会の俺の座席はこの辺り  
休耕田不思議がってる地蔵さん  
雪割って春待ち切れずフキのトウ  
地団でない道にもあった登り坂  
大地の夢地球が青い幸せだ  
志度駅が建て替え知らず動転し  
目薬が夜の日課に加わって  
あぶく銭煙のように消えてゆく  
抜けた毛を拾い集めている未練  
明暗の矢が放たれた受験生

川柳クラブわたの花 吉村

無器用な夫を拝みこき使っ  
地蔵さん拝む間もなし師走なり  
がんこ祖父今日はどうした拝んでる  
ろうそくがゆらぐ曾孫に拝まれて  
初日の出雲よどけどけ霧もどけ  
運転はあなたまかせであくびする  
アリバイを妻がとことん衝いてくる  
友達というのが本音はまだ言えず  
ジャンボくじとことん悩み二十枚  
逢いたいね年賀に書いてそれつきり  
愛情の愛は消えても情残り

マツエ 正雪 坊太郎 吟笑 貞月 文仙 放任 治延 輝夫 ひかり なみ子 チカエ いさむ よしみ くに子 はつ恵

一風報

ますみ 幸子 トシエ まさと 明子 けいこ いっふみ 春江 知佐子 美代子 民子

拝むのに寺も神社もはしごする  
センセイが拝み出したよ選挙だろ  
小遣いが欲しい孫から拝まれる  
靴音が近付いてくる新世紀  
拝み倒してやっとお嫁にきてもらう  
幸せは先ず健康と庭いじり  
瀬戸際に立って神さま仏さま  
宮参り元気に泣いた鈴の音  
大仏さん拝むと素直さがもどる  
神妙にお供の犬も拝んでる  
一家言とことん譲らない男  
親に似ずとことんやり抜く子に拍手  
生涯をとことんつくす妻の愛  
観光は拝む姿のでかれる  
辻地蔵覚えもみじの手を合わす  
白内障手術し妻の皺目立つ  
家事をして働いてます妻の顔  
ありがたい妻をとときき拝んでる  
賽銭のわずかばかりに拝まれる

倉吉川柳会

谷口

次男報

初土俵きれいどころが花を添え  
初釜は俵茶碗に緑映え  
依もちのみのすくねがハイチーズ  
家計にも一つはほしい徳俵  
おにぎりは俵型から子に伝授  
さん儀雛にやさしい舟になる  
嫁取りに小判俵につめて行く  
黄門さま俵に座り叱られる

明 八寿子 宏 剛治 ミツ子 道子 春江 幸枝 隆盛 寿代 信子 友甫 逸子 美智子 朝子 鬼遊

国を憂うからつば頭痛み出す  
徳もらう知恵には軽い頭蓋骨  
頭髮は瘦せてわたしの身は太る  
恋ひとつ頭の隅で風化せず  
いつ見ても頭の低いお人柄  
青いアザ昨日の酒を思い出す  
目の奥の青い思い出ばり追う  
青信号暴走車には要注意  
いつまでも青い尻尾を持ち続け  
頭から離婚するとは言っていない  
正月は昔ながらの家の味  
果てしなくこれからがある青い海  
民宿の人魚が酌いでくれた味  
米俵肩にかついだこともあり

横浜あおば川柳会

菱田

満秋報

苗植えるように地雷が埋められる  
はね起きて時計と競う朝支度  
とりとめた命へ朝の三分粥  
白い朝ゆうへの未練消されてる  
病室の朝はナースの声で明け  
縁を切る勇氣もなくて共白髪  
あの世への縁は鼻唄でもうたい  
断ち切った心算がつづく腐れ縁  
朝起きて今日一日のネジを巻く  
新しい城に輝く朝がある  
誕生に植えた桜は空に伸び  
おはようが昨日のしこり溶かして  
証言の朝確かめるへの位置

苦句 玲子 よしえ 康子 玲坊 美ッ千 小生 天雀 かつみ ちよ子 明美 雄々 秋人 徳三 八重子 広和 道子 純子 良子 街湖 達也 サト子 羊子 芳江 亜希子 充子

古い師前世の縁を言いたてる  
縁あってかわす誓詞がうそになり  
雪の朝詩人になって外を見る  
赤い服意外夫がほめてくれ  
包丁のリズムが誘うよい目覚め

黒縁の眼鏡はずして今女史の恋  
金の成る木信じて今朝も水をや  
翔びたくてめがねの縁を変えてみる  
朝焼けに今日の子感が吉と出る  
看護婦の笑顔病室朝にする

朝粥で始まる僧の修業道  
コスモスに休耕田が廻る  
すげ笠がきれいに並ぶ田植え唄  
赤い糸引張りあって登る坂  
土つけたままが朝市先に売れ

堺川柳会

河内

月子報

札東にかたい心はいつか消え  
ぼちぼちと飾る絵筆を持つ夫婦  
ささやかに稼いだ金を粋にまき  
よろこんでくれると欲が消えてゆく  
山茶花の垣根を抜けて一葉忌  
ぼちぼちと小春へ母の手を引いて  
お福茶をまつたり入れて願い事  
ぼちぼちに信号まちに追いつかれ  
少年の掌に茶柱が一つある  
愛憎を越えて夫婦のどくだみ茶  
さりげなく火山を抱いている夫婦  
熱爛に目刺しと喜寿が夢心地

見早子 嘉信 為佐子 かつ子 かのぶ子 絹子 ふみ 省子 和可 雅子 笑子 潮華 歌子 早智 満秋 紀美女 勇太 りつえ かりん 小雪 楓 満州 頂留子 美代子 泰子 昭子 冬虹

参拜のかしわ手ひびく一の宮  
一服の抹茶にころなごみまず  
ぼちぼちと行つて小石に蹴躓く  
ぼちぼちと間にあう僕の持ち時間  
鮭登る川お帰りと石が言う

ざりげなく加齢のせいと言つておく  
ぼちぼちでいいと代筆たのまれる  
茶柱を抱いて海鳴り聞いている  
アンダンテ低いかかとの靴にする  
着こなしが上手になってきた茶筌  
春風をいっぱい摺んでる さくら

ざりげなくかぶる帽子の粋なひと  
ほのぼのと一期一会のお茶の味  
ちぎれるほど尻尾を振つてお出迎え  
胴上げの喜びペソをかきながら  
いいことで月下美人とお茶にする  
喜びを独りになって含む酒

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

家族には見せぬおやじの隠し芸  
遠く住む家族をつなぐエメール  
成人になった抱負を書く日記  
成人の見識みごと侮れず  
成人の日から大きな声になり  
成人を亡父の位牌にそつと告げ  
同居して温いスープの旨いこと  
いい出合いスープに笑顔浮いている  
焼きたてのパンの匂いを持ち帰る  
たこ焼きの温みと帰る紙包み

一三三 哲平 みつこ 扶美代 健吾 喜代子 アキ 樹千代 しげお 森子 天笑 寿恵子 寿美 春蘭 多哥由 欣之 正三郎 正坊 庸佑 悟郎 しげお 知香子 慶子 路児 英子 一笛

二三人木屑を焼いている仮設  
孫たちがあのおねあのおと焼くお餅  
大雪でパパがはじめて朝帰り  
人生もわたしの肌も曲り角  
有難いファン徹夜もして並ぶ  
中ぐらいの幸せがよいいなづな打つ  
蘭玉を見上ぐ二ひきの紋羽織  
両隣不在 仮設の夜の冷え

形状記憶 父の頑固はそのまんま  
一日を棒に振つた手みかん刺く  
サークル檸檬 小林 一夫報

孤独から逃げるポストを友にして  
絆匂う少女真つ直ぐ投函す  
いさぎよく恋をポストに葬りぬ  
ポストまでどちらが速い一輪車  
虫が好きで 虫のように死にたい  
母の針じりりと急所ついでくる  
余生ゆるりとさせてはくれぬ鉛筆  
改まる年へ素足で立つてみる  
枠組みの中で自在な毬あそび

城北川柳会 神夏磯典子報

三連休と財布が疲れ果て  
夜更かしを朝の鏡に見破られ  
鍵全部あけて父ちゃん休みです  
札東のかさが和解のキーになる  
遠い過去高嶺のこはん噛みしめた  
さよならは空気に共に天国へ

紫香 明光 博史 石舟 柳宏子 登代子 萬的 重人 楓 楽 喜美子 いわゑ みつ子 一夫 智恵子 希久子 あずき 千代 秀夫 あき子 典子 史風 トヨ子 義江

歳月は絆引き裂く中国孤児

へそくりがブーツの中で退屈し

鍵穴を上手に開ける子が怖い

人生のラストと決めたホームの灯

まだ傘寿今日も出かける独り言

幸せの扉を開ける鍵でした

父さんの料理だんだん板につく

兄弟げんか一度はほしい一人っ子

鍵のある部屋で疎遠になる親子

預かって身動き出来ぬ家の鍵

健康の鍵握ってるお母さん

耳も目も足も弱って口元氣

ありがとう極の母に紅を引く

キーケースの中に内緒が一つある

ベースデー大正ロマンはお赤飯

裏口の鍵札束で開けている

坊さんのお経元氣で耳障り

やがてくるラストに花の種を蒔く

おむすびの味はいつでも母の味

沈黙を守る対立ラストまで

良識の死角で謀反考える

仏飯に今日一日の幸を盛る

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

児の父になると野心が錆びてくる  
置き場所を替えて男を売りに出し  
お年玉玩具売場で思案する

普段とは違う行儀のお年玉

虎の尾を踏んだ男の肝っ玉

政子

静枝

扇帆

一枝

登美子

昭子

和歌子

春蘭

ただし

久留美

高栄

あい子

陸子

千歩

達子

白峰

とし子

朝子

あやめ

寿美子

倫子

公一

引き際を知った男の大銀杏

懺悔する男の骨は透けてくる

間が持たぬときはみかんを手すめます

この腕に頼れと父の太っ腹

舞台裏男の涙見せしめよう

神妙に膝が待つてるお年玉

みかんの葉一枚入れて子へ便り

青春の味かも知らぬ夏みかん

みかん手に纏れ話を聞いている

いずも川柳会

團山多賀子報

満ち足りた生活にひそむ白い蟻

お地蔵の丸みに満ちるもの貰う

倅せな笑顔が満ちる三世代

善政の満ちるお国で高枕

水甕を満たして主婦をやっている

妊婦服の余裕愛が満ちている

農耕へ水満々と春を呑む

ときめきの一句にいのち満ちてくる

潮満ちて明日へ闘う力瘤

ああ夢でよかった寝汗拭きながら

大海に出る夢年は考えぬ

子との夢も探さない一人部屋

母さんの夢は平和な世界地図

夢みん枯れたわけではない冬野

大鳥居見上げて祈るでかい夢

祈り続けるうちが幸せだと悟り

元旦の祈り明るい陽を受ける

祈りながらポツリポツリと懺悔する

雅城

ツネ

ヒサ子

花匠

島

黙人

一人

花

花

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

五

母の背がだんだん丸くなる祈り

黄昏れる明日へ祈る夕茜

寒灯に祈る水垢離神のごと

寒い訃に冥福祈る冬銀河

こころもちスタート台を前に置く

スタート台ゴールのことは考えぬ

スタートから目立ちたがりは前に出る

羊一匹足りないままでも人生

出発は同じあきらめも人生

号砲一発先を行く人転ぶ人

出発と決めて後へは戻れない

贅肉を落しスタート点に立つ

川柳藤井寺

高田美代子報

金粉をまぶす贖物らしくなる

白粉も紅も要りますまだ一人

白雪をかぶったサンタの贈りもの

白粉焼役者の年期 垣間見る

白雪で飾ると冬の絵が出来る

身を粉に働きました養子です

一票に基地粉砕の夢をのせ

柔らかないムードで対話カウンセラー

芯の無い男だそっと手を放す

柔らかな日射した遺書を書いてみる

柔らかなく病母を包んだ白い嘘

お謝りなきいとやわらかく攻める

負けそうなき私を煽る鬼がいる

煽動して遠くで見るふところ手

煽られてそして空しき一気飲み

治代

義良

水煙

多賀子

章峰

きみえ

芙佐子

由紀子

明朗

草介

信介

裕

和子

三郎

桂子

かつみ

悦子

正一

六正

史郎

和樹

絹歌

鐘造

美代子

アキ

昭子

美房

順風

煽られて先頭はしる癖がある  
煮えきれぬ二人を煽る甘い酒  
隣の蕎麦を煽つてみて冬である  
煽られた椿が一つ落ちました  
煽られた椅子で十字架背負われ  
飲めぬ酒呑んでもみたり年忘れ  
趣味一つ止めてしめつた胸の中  
平和とは良いものであり第九条  
コンビニでヒントをもらう老いの膳  
戻れない過去追いかける白い風  
これからを優雅に暮す彩を選ぶ  
結局は金の力で付くけじめ  
欲棄てた頃に思いは叶うもの

岬川柳会

八十田洞庵報

生きる道そこにもあるか崖の草  
生きるための努力黙って子に見せる  
懸命に生きてころりと蟬の殻  
生きたる欲半寿の春もお不服  
超不況今したたかに生きていく  
成人の日素直に残る娘らも居る  
ガラクタも古着も生きるリサイクル  
生きがいのとどめはついのわがすみか  
八十路すぎ生き甲斐となる畑仕事  
素直な妻演じ続けて肩が凝り  
仲直り素直になつてホツとする  
素直さを買われた孫の晴れ姿  
素直さが隠れて久し倦怠期  
四年目を生きたる飯設に幸祈る

一屯 修六 元紀 扶美代 花梢 春蘭 恒雄 智久 敦子 治子 政代 志洋 みのる 令子 俣子 みやこ 庄六 孝子 孝子 ユミ子 鉄男 悦子 幸子 よし子 正美 朋子 年子

譲り合い信じて生きる老いの日々  
はいと言ひ二十歳の春に嫁して来た  
時々は素直になれぬ腹の虫  
素直さに負けて本音で語り合う  
あなたには素直な心できたけれど  
お見合で素直な言葉出ないまま  
精いっぱい生きる男に悔いはない

翠洋会

柴田英壬子報

一本の藁幸運の奇跡呼ぶ  
飛び立つ日念じて鶴を折りつづけ  
トラ刈りにするので孫は逃げまわり  
病む人に奇跡をねがう星ぞらに  
奇跡的生死を分けた震災禍  
奇跡など願わず明日へ一歩ずつ  
虎の子を温め育てて罪作り  
奇跡かも癌であつたと思えない  
床の間の牛虎に替へ今年こそ  
発想は昨日のままで奇跡待ち  
シートベルト奇跡が生んだカスリ傷  
小トラ大トラ行き交う眠らない都会  
凄美人にわたしがもてたのが奇跡  
虎の子を冬眠させる低金利  
叩いても張子は首を横に振り  
メークドラマ奇跡は二度と起らない  
奇跡などおこらなかつた夫婦仲  
虎カッと口を開いて大願成就  
神風の奇跡信じた敗戦記  
酒造り子孫に残す虎の巻

みつ子 和美 とみ 勇 ヤエ ミチエ 洞庵 英壬子 志華子 凡子 会美 蕉子 光子 綾子 真砂 叡子 宣司 絹子 澄子 石舟 正坊 蛙 靖巳 義 希久子 正雄 東雲

瓦礫の下病父が笑っている奇跡  
癌告知奇跡がほしい神だのみ  
ねこによくなれず張り子の虎通す  
来世紀覗んで虎の髭は立つ  
賀状どさりたのしい虎の揃いぶみ  
寅年の千里を駆けるパスポート  
格好よく吠えてもたかがタイガース  
李白にも杜甫にもなれずトラになる  
大穴の馬券をいつも期待する

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

晴着の孫両手をついておめでと  
心まで凍てつくような寒の入り  
百歳を夢見る屠蘇の長寿箸  
暖冬に季節はずれて花が咲く  
体重計使用禁止の三ヶ日  
あれも年これも年だと医者と言つ  
マラソンのいま一陣の風となる  
孫が来て虎の置物持ち帰り  
鉛筆を削り揃えて初句会  
四キロの勢い初の孫誕生  
二度の職勢いをつけペダル踏む  
丸橋が堀の深さを測る石  
石段を数えて登る京の寺  
失つて分かつた石のあたたかさ  
浜石の丸さは知らぬ姫そだち  
愛情のカケラを探す猫目石  
仲よしの顔して裏で策を練る  
仲よしがいいつも会つてる水車小屋

ひろ子 千梢 さと美 佳秋 千歩 喜美子 恭昌 楓 楽 鬼遊 まさ 江美 正治 ハツエ 満寿蔵 すみ 向西 勇次郎 弘治 夢之助 六浦 昌子 澄子 十四郎 鹿太 石舟 紫香



## 兄 森川 拔智を偲ぶ

栗谷 春子

冬の日もとつぷり暮れてじいんと寒さのこたえる夜となりました。

電話のベルが思いなしか、チリンチリンといかにも淋しくひびいて、それは兄・森川拔智の死を知らせたのでした。

兄の身体の不調は毎度のこと、あまり気にもかけなかつたのですが、いきなり死を知らされて身のこきざみにふるえるのをどうにもなりませんでした。

その時一番に案じたことは、自分はまだこんな病後の身でどうして広島まで——ということでした。

徐々に話をききますと、兄は少し前から大阪に来ていて次男の家に居る中に身体の調子が悪くなり、次男の勤務する伊丹の市民病院に（次男は市民病院の医師でした）入院中に急変し、動脈硬化で亡くなったとのこと。告別式も豊中で行うとのこと。私は参列出来ると聞き、悲しみの中でもそのことがうれし

つたのでした。

拔智の上二人は男で三人男の子がつづいてはじめて私が女兒だったもので、拔智兄さんにも大変かわいがられて、まるで腰巾着のようなものでした。

口笛を吹きながら好きな絵を画いては毎日何枚も画をくれるのでした。それが今もつづいて雪がつもれば大雪の、バラが咲けば真っ赤な一輪の絵を送ってくれるのでした。

あなたも絵を画いて送って下さいと、はがきが来て居りました。

豊中での告別式は少し変つてゐるなど思うほど、しめつぽくはなく、皆が兄の心を痛いほどわかつて居るのだと有難く感じて居りました。私もはじめに肉親の方たちと顔を合せた時と最後のお別れにお棺の中へお花を入れる時だけさすがに顔をおおって泣きましたが、その手で兄の顔を撫でてみました。

拔智の川柳を少し拾ってみました。

世直しは誰かがするとゴルフする大雪で医者に通わず雪見酒

大雪に電話ですませずるめ焼く

鶴と亀年も知らずに生きている

この鹿は去年もたしかここにいた

酒買つて仔犬忘れて帰りかけ

万歩計バンドにつけたまま昼寝

当るも八卦俺は当然ぬ方信す

選挙には牛歩で行こかやめとこか

八十を何んだ坂こんな坂越えて行く

元就のゆかりの土地にわれは住み

月下美人咲くまで待てず酒の宴

油絵の涼気を贈る雪景色

兄弟五人そろつて同人でしたのに、四人になつてしまいました。

兄を偲ぶ句

兄からののがきが来そう絵を描いて  
あつまりは何だったのかと聞きそうな

栗谷 春子

夢でしか会えない人がふえてくる

森川まさお

兄逝きて待てどもこない花使り

森本 節子

思い出がみな楽しくて句にならず

結城 君子

# 柳界展望

## 新同人紹介

福士 慕情  
— 五楽庵・島推薦

権代 康女  
— 雄々・たつみ推薦

山本 正光  
— 雄々・たつみ推薦

本吉 宗光  
— 雄々・たつみ推薦

近藤 春恵  
— 完司・多哥由推薦

村上 信子  
— 完司・多哥由推薦

井上 次郎  
— 薫風・鬼遊推薦

(前月分追加)

山田 かよこ  
— 重人・金太・一步推薦

加島 由一  
— 薫風・岳人・美房推薦

★香川県の川柳塔おっばこ

吟社は1月4日、町立白鳥公民館で300号記念合同川柳大会を開催、左記の人々が町長賞に輝いた。

明日への夢は夫婦で丸く

描く 川崎ひかり

シワ幾つ増やし我が城守

り抜く 木村あきら

見栄を張る年でもない

着ぶくれる 木村 久子



満願成就千羽のツルが風になる 川崎ひかり

★川柳塔わかやま吟社の平成9年度各賞決まる。

〈葵水賞〉

姐のくほみに沈む妻の飢え 山根めぐみ

〈あおい賞〉

中吉と出た納得の暮らしむき 小山 太一

〈たちはな賞〉

やつて見せるそんな意欲

に逆らえぬ 吉村さち子

〈課題吟賞〉

箸二本持てる手がある祈らねば 中井栄美子

▼訂正とお詫び▲

■2月号 P 88 (初歩教室) 中段13行目「胸叩き引き受け退つ引きならぬ羽目」

▼計 報▲

■森川抜智氏(同人・広島県)は12月12日、病気のた

め死去。享年87歳。

### 3 月 各 地 句 会 案 内

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	6日(金)午後1時から 雨・開く・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 わかやま	8日(日)午後1時から 風・美人・サイン	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	9日(月)午後1時から 芽・回る・暖かい・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川 柳 同 好 会	10日(火)午後1時から 磨く・付ける・珍しい	豊中市立釜池公民館 阪急・モノレール釜池駅西へ150米 〒560-0033 豊中市釜池中町3-10-28 井上直次
八尾市民 川 柳 会	10日(火)午後6時から すんなり・唸る・居酒屋・別	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
堺川柳会	12日(木)午後1時から 窓・味(共選)・いつも(折句)	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅西所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 まつえ	14日(土)午後1時半から 陽 気・無 言・望 む	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅
岸 和 田 川 柳 会	14日(土)午後1時半から 例年・老後・和菓子・アイドル	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒569-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 ねやがわ	15日(日) 正 午 から 雀・迷う・炎える・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	16日(月)午後1時から 金庫・親しい・悩む・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯 の 花	19日(木) 正 午 から 一匹・改める・ふくらむ・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
南 大 阪 川 柳 会	20日(金)午後6時から 操作・増殖・想像・臓器	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
はびきの 市 川 柳 会	22日(日)午後1時から 味・組む・コーナー・「嫌」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
京 都 塔 の 会	26日(木)午後1時から 序・よもや・信用	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
富 柳 会	26日(木)午後1時から 蓋・絞る・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
東大阪 市 川 柳 同 好 会	28日(土)午後6時から 昔・鳴る・カバン・悪魔	東大阪市民社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市長尾3-3-21 片岡湖風

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

# 編集後記

センターは昭和六十年一月からで、それまではアウイナ大阪の旧呼称（なにお会館）の和室で続けられていた。結局、古巣に戻ったわけで、それも広々とした新しい豪華な会場である。

## 言葉の文

いけないことを見て、或は知って黙っているのは教師の務めを果すことにならない。「叱る」と「注意」これはその時の両者の解釈に依るが、少くとも、子どもをいい方向に進め度いという気持ちで教師に有ることに間違いない。新聞の見出しの「叱られて」を見て心

★川柳塔八五〇号という特別の思いの中で、編集後記のペンを執る。今、私の手元にある一番古い塔誌は六四八号。昭和五十六年五月麻生霞乃追悼号である。

★本社会会は同人に限らず広く誌友・一般の方々も誘い合って一人でも多くの御参加をお待ちしています。

★64ページにわたる、その五月号の中には今も御活躍の方もたくさん居られるが亡くなられた方、川柳界を感概深く読み返す。

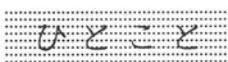
★今までもこの欄に載せたにも時々掲載されているが相変わらず、前月号と同じ句を投句する人がいる。大抵は原稿下読みの時にチェックしているが、時には見落とすことがある。選者も編集も数多くの句に接するの

★八五〇号までの歴史の中には、麻生路郎先生の志が脈々と流れている。「川柳は人間陶冶の詩である」

★八五〇号大会には、一人でも多くの笑顔と心からお待ち申し上げます。(み)

★一月から本社会場がアウイナ大阪になった。今までのメンズファッション

★八五〇号大会には、一人でも多くの笑顔と心からお待ち申し上げます。(み)



日本語は難しい。下手に言葉の追求をすると、あれは言葉の文だとうまく寝られる。道徳地に落ちているんな事件が起きる。特に驚くことは、教育の場の最悪の事件である。新聞の見出しには大きく「先生に叱られて」と書かれている。先生は少年に級友の前で言わないで、授業後、廊下で話されたところある。

いけなことを見て、或は知って黙っているのは教師の務めを果すことにならない。「叱る」と「注意」これはその時の両者の解釈に依るが、少くとも、子どもをいい方向に進め度いという気持ちで教師に有ることに間違いない。新聞の見出しの「叱られて」を見て心ない言葉に怒りさえ覚えた。「叱る」であろうか、「注意」であろうか。

井上 照子

▼吟醸酒ブームである。しかし高価であり、純米大吟醸に至っては、目玉が飛び出るほどである。では、吟醸酒とはどんな酒なのか、まず本醸造酒か純米酒でなければならぬこと。

▼本醸造は、ぶどう糖や水飴を使わぬこと、アルコールの使用は白米1あたり120ℓ以下であること。

▼酒の味には、甘・酸・辛・苦・渋の五味があると言われるが、アルコール添加酒は酸ゼロのアルコールで

うすめられて、味のバランスが崩れ、酸味不足でコクのない酒となるのである。

▼とまれ私は、アルコール添加酒は酒の主流と認め難いのである。そこで純粋日本酒協会加盟の酒銘を、

山形「まほろば郷 栃木「東力士」山梨「七賢」愛知「明眸」京都「桃の滴」「玉の光」「招徳」兵庫「八重垣」「酒豪」。紙数が尽きたので以下次回。(金)

★一月から本社会場がアウイナ大阪になった。今までのメンズファッション

★八五〇号大会には、一人でも多くの笑顔と心からお待ち申し上げます。(み)

外原料をいっさい使用し

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（5月号）」

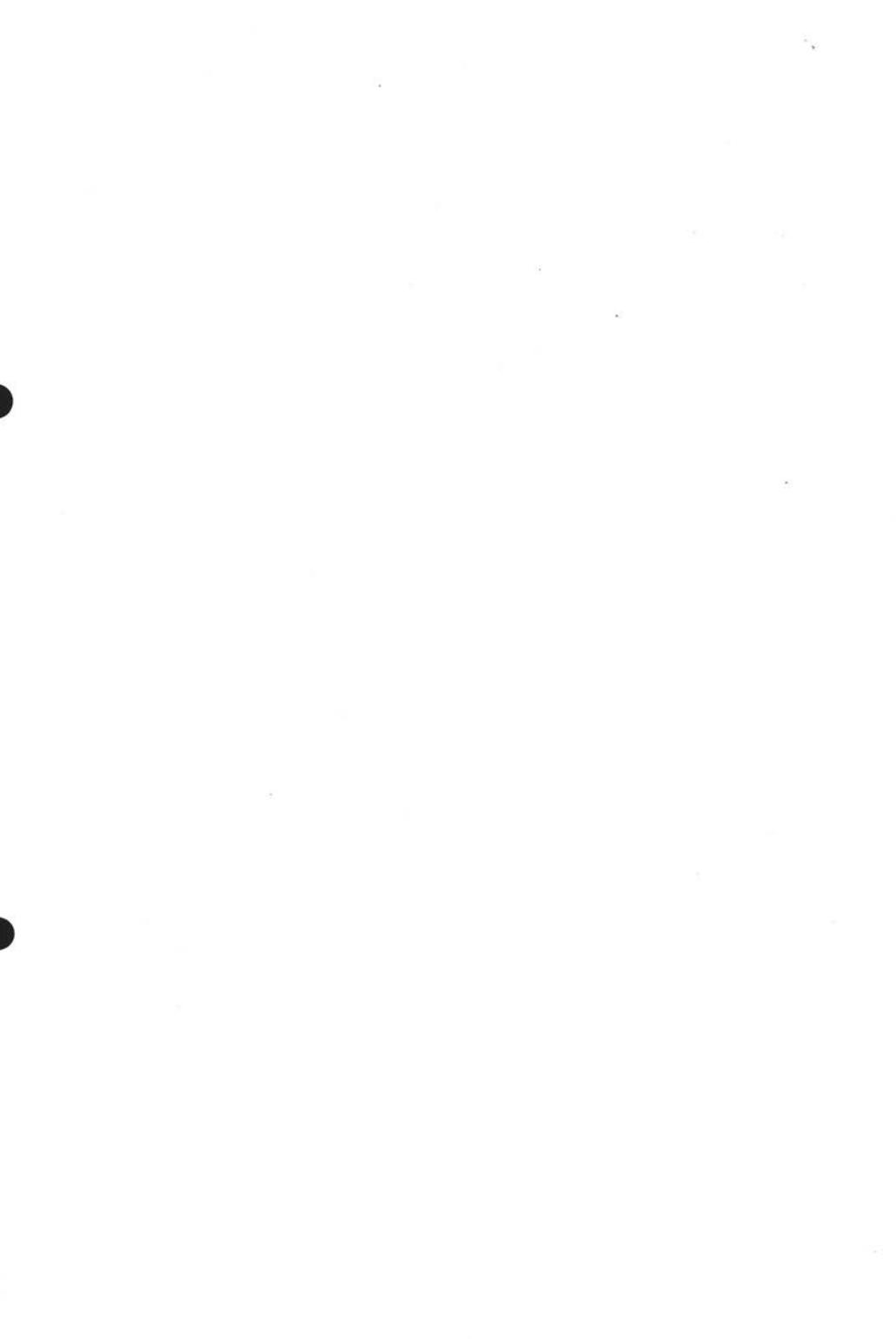
地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



## 作品募集

初歩教室 「張る」(3句) 吐田公一担当	課題吟 (3句)	「こだわる」 A	「家」	苗香の花 (3句)	宮西	八木	西田	橘高	川柳塔 (8句)
		春木圭一郎選	高須賀金太選	酒井輝選	宮西弥生選	八木千代選	西田柳宏子選	橘高薫風選	

5月号発表 (3月15日締切)

6月号

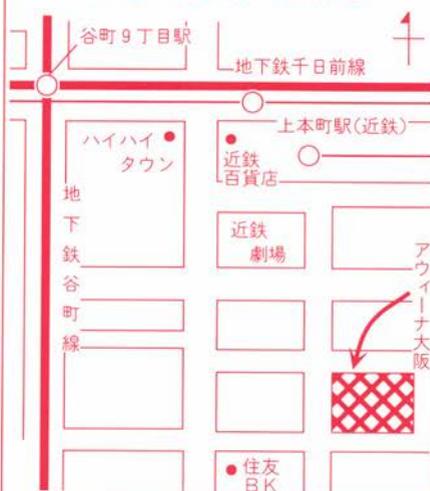
課題吟「振る」「素朴」  
「再び」  
初歩教室「口」

本社3月句会は、3月6日(金)に850号記念大会を行うため、中止いたします。

本社4月句会 7日(火) 予定

兼題 「傾く」「すっきり」「食べる」  
「関心」「苦手」

## 850号記念大会及び 本社句会会場略図



## 夜市川柳募集

第10回「駄目」 森中恵美子選  
ハガキに3句 3月末締切  
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3  
河内天笑方 堺川柳会

## NHK川柳作品募集

3月は選抜高校野球のため中止  
いたします。

〒545-0005

振替 〇〇九八〇一五一一三三六八番  
電話 (06)26元一六九一四番

発行所 川柳塔社

大阪府阿倍野区三木町二一〇一六  
ウエムラ第2ビル202号室

編集兼 発行人 橋高 薫  
印刷所 美研アト

平成十年三月一日発行

一年分 七千九百円(同)

半年分 四千円(送料共)

定価 六百円(送料76円)

## 「川柳塔」への投句について

- ①川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限ります。
- ②澎湖抄・苗香の花欄および一路集(課題吟)への投句は、同人・誌友に限ります。ただし苗香の花欄は女性だけ。
- ③各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説



新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。  
あなたの思いをかたちにします

## 美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号  
TEL・FAX(06)372-1178



【イメージ・キーワード】  
“Value for Human”  
バリュー・フォー・ヒューマン

ミッシェル・アルクール



オーエスケーの  
紳 士 服

株式会社 **オーエスケー**

〒540-0024 大阪市中央区南新町1-4-7  
(06) 941-9631